the prism

七篠名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｈｅ　ｐｒｉｓｍ

【Ｎコード】
Ｎ６８９２Ｙ

【作者名】
七篠名無

【あらすじ】
私立巴咲高校（ともえさきこうこう）に通う御咲麗一（みさきれいいち）は、勉学に励む優等生。ただの学生であった彼の運命は、ある少女の手によって壊される。巨大な起動兵器が地球を制圧するだろうと断言する、自宅の前に倒れていた少女、カノン。そして、それを食い止めるために用意された起動兵器『アヴソリュート』に乗って戦う運命を強いられる麗一。壊された日常から紡がれる新たなる物語とは？

――――――文章が乱れていたり、誤植があったり、分かる人にしか

分からないマニアックなネタも混ざっていますが、どうか温かい目で見守って下さい。

ｂｙ　七篠名無

ｔｈｅ　ｐｒｉｓｍ　#１　上（前書き）

どうも、七篠名無です。
このｔｈｅ　ｐｒｉｓｍを書いていくにあたって、閲覧する方々に１つだけ申し上げておきたい事があります。
私、創作に関しては自信があります（自分で言うのもなんですが）ですが、説明がヘタクソで挿絵も無いので、劇中登場する人物や兵器などのイメージ像を、私の考えている通りに皆様にお伝えする事ができません。
ですので、脳内保管でお願いします。
一時期、挿絵は某掲示板でよくあるアスキーアートを使用しようかな？と思ったんですが、製作するのに膨大な時間がかかるので取りやめました。
そう考えると、２ちゃんねらーとか凄い技術ですよね。私、上記の一件で某掲示板を思い直しました。
さて、前置きはここまでと言うことで……
どうぞ、ｔｈｅ　ｐｒｉｓｍをお楽しみください。

the prism #1 上

プロローグ

私は、一体どうすれば良いのだろうか？
そう、意味も無く自分に問いかける。
勿論、答えなど返って来る筈も無い。
そんな事は最初から解かっていたが、つい、想ってしまう。
本当に、意味など無いのに。
私は今、自分にとって大きな決断を仲間から迫られている。
本来は悩む必要など無い。
返す答えは、もう決まっている筈だった。
しかし、本当にいいのであろうか？
これを行えば、取り返しの付かない事になるだろう。そうなれば、
私はただの犯罪者になってしまう。
大きな罪悪感が重くのしかかる。
そもそもの話、私はこの案に乗り気では無かったのだ。
そして、口火を切った当の本人は、もう、いない。
この計画の最高責任者は私となり、大きな使命感を心に感じながら、
今までの道程を耐えてきた。
もう、後には引けない。共に歩んだ仲間たちに一声かけるだけ。それ
れでいい筈なのだ。
しかし、私の理性がそれを拒む。
私は、平和を望んだ。今も切にそれを望んでいる。
しかし、それでは、私がやってきた事とは何だったのだろうか。
どうしてこんな計画を進めてしまったのだろうか。
なぜやっていた事に何の疑問も感じなかったのだろうか。
……。
「どうしたものか……」

色々な考えが脳を飛び交い、これ以上脳内で考え続けるのは疲れてしまったのか、座り込んでいた男の口からは、自然と言葉が出ていた。そのまま口は、小声ながらも延々と喋り続ける。
そんな彼は、影からずっとこちらを見ていた小さい人影にも気付く事は無かった。
「……」
小さい影は、動いた。

1

地球。
太陽系の惑星で唯一の、生命体が生まれた星である。
その星の中の1つの小さな国、日本。
その国では、今、まさに太陽が昇っている。
太陽の眩しい光は、日本の領空を満たし、領海を温め、領土を照らし出す。
つまり、朝だ。
その朝日に照らされた、一つの街、虹乃町（にじのまち）。
その町の一角にある、一つの家。その中に住む住人は、今日も日常に身を投ずる運命にあった。
「……ふわあぁぁ……」
まだ眠そうに欠伸をする、背の高い少年は、ベッドの横に置いてある目覚まし時計に目を移した。
「……6時か……」
少年（みさきれいいち）――御咲麗一はそう呟くと、今日もいつも通りだ。などと思いつつ目覚まし時計の鳴ってもいないアラームの機能を切った。
ここ最近、寒い訳も無く、熱くも無い。何とも言えない中途半端な日が続いていた。
麗一は、まだ名残惜しそうなベッドから出て、彼は顔を洗いに洗面台へと立つ。

毎朝、鏡を通して鉢合わせる自分の洗い立ての顔を、麗一は改めて見る。
完璧なる童顔が、そこにあった。
それをみて、麗一は一種の情けない気持ちになってしまう。男として生を受けた筈なのに、こんな女々しい顔なんて……。麗一はそう思ってしまうのだ。
はあ、と、麗一は溜息をついた後、学校の制服に着替えた。そして、家のゴミを持って外へ出る。
ゴミを集積所まで持っていくと、麗一は自宅に戻らずに、家の向こう側にある洋菓子店の裏口へと入っていく。
何も知らない人に、今の麗一の行動を見せたら、彼は何をしているんだろう？と思うだろうが、これは彼にとっての忙しい朝の情景だ。

彼、御咲麗一の両親は、彼が2歳ぐらいの頃、既に亡くなってしまっていて、両親と仲の良かった一家に引き取られた。
だが、その引き取った家も最初から父親がおらず、母親も引き取られて3年もしないうちに亡くなってしまった。そして彼の親権は、この一家の長女に引き継がれたのであった。
そしてこの洋菓子店『ｒａｉｎｂｏｗ』は、彼の保護者代理人が現在住んでいる家である。そして彼は、その保護者代理人の所に朝食と、昼食の弁当を作りに行ったのだ。

「……おはよう。お邪魔しますよ～」
麗一は、対等の相手に使う言葉と敬語を織り交ぜた妙な言葉を発しながら、『ｒａｉｎｂｏｗ』の裏口へと入る。
家の中は静まり返っていた。つまり、この家の住人はまだ寝ているのだ。
麗一は、帰って来ない返事には慣れている。玄関で靴を脱ぎ、家へと上がる。

玄関のすぐ前にあるドアを、麗一は勢い良く開いた。
「……やっぱりね」
麗一は苦笑いを浮かべた。
リビングへと通ずるドアを開けた先にあったのは、大テーブルに突っ伏して寝ている、ロングヘアの女性だった。腰にまで届いているその長い栗色の髪が、目移りしそうな程麗しい。
この女性が、御咲麗一の保護者代理人であり、この洋菓子店『ｒａｉｎｂｏｗ』の店長、逢坂優歌（あいさかゆうか）である。
「姉さん……またこんな体勢で寝てる……」
麗一は、優歌の事を「姉さん」と呼ぶ。なぜなら、「お義母（かあ）さん」と呼ぶには彼女は若すぎるからだ。それに、結婚もしていない。
だが、他にも理由はある。
「起きて下さい。姉さ～ん？起きて下さいよ～……もう」
呼びかけても、揺すっても反応無し。全く起きる気配を見せない。
「……もう、だらしないんだから」
こんなだらしない人を「お義母さん」なんて呼べない。これがもう１つの理由だ。結婚できないのも、この事が手伝っているからであろう。
現在、２８歳。そろそろ結婚しないと婚期を逃してしまう。
早く幸せになってもらいたいな。と思いつつ、麗一は彼女を揺すり続ける。
「……んん……」
「やっと起きましたか……」
麗一は嘆息する。
「……うにゅ……？」
寝ぼけ眼の優歌。いまだ未覚醒のためか、奇天烈な発言をする。
「おはよう、姉さん。朝ですよ」
「……にゃむう」
「寝ないで下さい……」
睡魔の猛攻に屈させてなるものか、と思いつつ麗一はそれでも取

り乱さずに優歌に呼びかける。
「……むう……麗ちゃん……あと5分だけ……」
「ダメですよ、早く起きて下さい」
「……は～い……」
こんな会話もいつもの事だ。麗一は、寝ぼけ眼で足取りもおぼつかない優歌を、洗面所へ連行、顔を洗わせた。
「もう、1人でやって下さいよ……」
ばしゃばしゃと音を立てて顔を洗う優歌に、麗一は呆れ顔で呟いた。
「……んんんん……よし！お姉さん、目が覚めちゃいました～！」
「顔を拭いて下さい、姉さん」
背伸びをした後、覚醒を宣言した優歌に、麗一がにべもなく言う。
「はいはい、分かってますって」と言って、優歌は顔を拭いた。
「それで麗ちゃん、ご飯の方は？」
「残念ですが、まだできていません」
「うええ！？お腹すいちゃったよぉ……」
そう言うと、優歌は床にへたりと座り込む。
「立って下さいよ……ご飯ができたら呼びますから、その間は着替えでもしていて、待っていて下さい」
「はーい。なるべく早くね♪」
恋歌は、どきりとするような笑みを浮かべると、颯爽と2階へ上がって行った。
優歌のパティシェとしての腕もだが、彼女のこの笑顔も手伝ってのおかげか、この洋菓子店は繁盛している。
姉さんの笑顔には、人を魅了する何かがあるんだろうな。と思いつつ麗一は朝食を作るためにリビングの調理場へと戻った。

この家の朝食は和食だと決まっている。
味噌汁とおかずを何品か作り、炊けたご飯を盛ってしまえばもう準備は出来てしまう。

朝食を作り終え、自分の昼食である弁当の具材を作り始める麗一。
鼻歌交じりに慣れた手付きで、彼はあっという間に具材を作り終えると、その具材を弁当箱へ詰めにかかる。
その作業もあっという間に終わり、休憩の意味も含めて、彼は冷蔵庫から冷えたお茶のボトルを取り出し、コップに注ぐ。
コップを満たした緑色の液体を、麗一は飲み下す。
麗一は緑茶が好きだ。なんと言うか、心が落ち着くのだ。
一休憩を終えた麗一は、次の仕事に取り掛かる。
次の仕事とは、『優歌の妹を起こす』事である。
二階に上がるとそこにあるドア。
そこには、『ゆうかちゃんのおへや』と、可愛らしい平仮名で書かれているプレートがぶら下がっている。ここが保護者代理人である、優歌の部屋だ。
その向かい側にある、もう1つの部屋。
そこには、優歌の部屋のドアに掛かっているプレートと同じものが掛かっていて、そこにやはり可愛らしい平仮名で、『れんかちゃんのおへや』と書かれている。
プレートに書かれている『れんかちゃん』とは、優歌の妹である、逢坂恋歌（あいさかれんか）の事である。
恋歌は、麗一と同じ年齢で、麗一とはかなり長い付き合いとなる。
学校も同じなので大体いつも一緒にいるが、それが元で高校入学当初は、クラスメイトからかなりからかわれた。
そのせいなのか、以前と比べると随分と素直じゃなくなってしまい、取っ付きにくくなってしまった。高校の女子の中では綺麗な方なのに、非常に残念である。
まあ、元は素直だったのか、と言われると、そういう訳でも無いんだが。
「ふう……。よし」
意気込んで、恋歌の部屋のドアノブに手を掛ける。
なぜ意気込まなきゃならんのだ、と、誰かが見れば思うだろうが、

ドアを開ければ理由は直ぐに分かる。
「……」
ドアを開けた麗一の目の前に飛び込んできたのは、毛布を床にぶちまけ、腹を出した状態で熟睡している恋歌の姿だった。
「こりゃあ酷いな……」
何年も同居同前の状態で、既に見慣れた光景になってしまっている筈の麗一の口からも率直な感想が飛び出す始末だ。
しかしいつまでも呆けている暇は無い。一刻も早く麗一は彼女を起こしにかかる。
なぜなら麗一は、遅刻は1回もした事が無い生徒に贈られる、学校の皆勤賞の有力候補だからだ。こんな事で、皆勤賞がふいになっては困るのだ。
「恋歌、起きて」
「……」
「恋歌〜、起きてよ〜」
ゆさゆさと身体を揺するも効果が無い。
この家は二人揃って良く寝るなあ。と麗一は思いつつ、肩を揺すりながら呼びかけ続ける。
もし僕がいなかったらこの2人は一体どうなってしまうのだろうか……。
そんな事を考えるくらいの時間、肩を揺すり続けていると、
「んんん……何よぉ……」
恋歌が目を覚ましたようだ。
「はあ、やっと起きたよ……」
「んん……？誰？麗一……？」
「そうだよ」
「……何やってんの？」
「起こしに来たんだよ……」
朝で頭がまだ冴えきっていないからか、恋歌が大ボケをかます。
僕が起こしに来るなんて、いつもの事だろうに……。そんな問答も

麗一にとってはいつもの事だ。
「恋歌、ご飯できてるから、早く降りてきてね」
「分かってるわよ……。何年こうして来たと思ってんの？」
「はいはい、悪かった悪かった」
「何よ、その言い方……」
「いいから早く降りてきてね～」
「分かってるわよ！」
おお怖い。こうなった時の恋歌には構わない方が良い。次、何か言おうものなら、今度は鉄拳が飛んでくる。拳で語り合うのは遠慮したい。どうせ一方的に語り込まれるだけだ。
麗一は急いで下のリビングへと戻って行った。

食事を終え、麗一と恋歌は学校へ赴く。
今日は見事な晴天だ。念の為にカバンの中にはいつも折り畳み傘を入れてはいるが、今日は使う必要は無さそうに思えた。二人の後ろから聞こえる、優歌の「いってらっしゃーい」が、妙に心地よく聞こえた。
彼らの向う場所は、『私立巴咲（ともえざき）高等学校』である。
私立にしては珍しい、低額費で入学できる高校であって、学力もそこそこなので、毎年かなりの人数が応募し、倍率は2倍を下回る事は無いと言っていい所だ。
麗一たちは、そんな狭き門を潜り抜けたのだが、中学3年の時点で巴咲高校に合格できる学力があったのは麗一だけだった。
麗一はもっとレベルの高い学校にも行ける学力はあったのだが、恋歌が頑張れば合格できそう、かつ自分が授業で退屈しなさそうな様な高校のレベルまで志望校を下げて、それに合格できるような学力を付けさせるため、麗一は中学校生活最後の1年弱の期間、熱心に勉強を教え込んだのだ。
その麗一の努力は報われ、見事、巴咲高校に合格する事ができた。
今思い返すと、僕、頑張ったな……。

などと考えながら歩いていたら、恋歌が話しかけてきた。
「ねえ、麗一。今日のお弁当は何？」
「それは、開けてからのお楽しみだよ」
麗一は恋歌の質問に、少し意地悪な返答をしてみた。
「えええぇ！？イジワルゥ……」
すると案の定、頬を膨らませて恋歌が麗一の態度に抗議の意思を示す。恋歌は表情豊かで、始めて彼女を見る人でも、彼女の印象は強く残るだろう。
話しているとその表情がくるくると変わるので、麗一は色々な言葉を言って、彼女に感情の起伏を発生させるのだ。そんな色とりどりの顔を見るのが、麗一の登校中のささやかなイベントとなっている。
そして、そのイベントには、参加者がもう一人いる。
「おやおやおやぁ？これはこれは、麗一殿と恋歌様ではありませんか？」
どこからともなく現れた、麗一や恋歌と同じ制服を着ている、麗一よりも一回り大きい背格好の青年。ぼさっとした前髪を上に乗せたその顔は、いかにも気怠そうな表情をしているがそれ以上の詮索ができない、独特の表情を取り繕っている。
「あ、おはよう、有無（ゆうむ）」
これに対して麗一は、何事も無かったかの様にさらりと挨拶を言う。恋歌はと言うと「おはよ。また朝から怠そうな顔してるわね」と、柊の葉を添えた挨拶を投げつける。
この扱いに、有無と呼ばれたその青年は、「あっさり返すなよ、つまんねえ……」などと、後ろ髪を掻きつつ愚痴を零した。
この青年――七篠有無（ななしのゆうむ）は、麗一のクラスメイトだ。
少し引っ込み思案な麗一にとっては、話し掛け易いがために親友の仲である。
有無は恋歌とも直ぐに打ち解けて、いつの間にか仲良し組のような関係になっていた。
そして3人は現在2年生になるのだが、なんとこの3人はまたし

ても同じクラスなのだ。偶然の産物か、はたまた腐れ縁の始まりか、それは麗一たちには分からないが。
今では、神出鬼没の有無が2人の前にいつの間にか現れている。そんな登校風景も日常と化してしまっていた。
「それにしても、有無はいきなり現れるわよね。どうやってやってんの？超能力？」
「超能力？そんなモンあったら、もっと有意義に使ってるさ。ただ単に俺は神出鬼没なんだよ」
「それって自分で言っちゃ意味無いんじゃないかな？」
「こまけえこたあいいんだよ。あ～、それにしても、ダリーなあ……」
なんていう何気ない会話を交わしているうちに、気付けば巴咲高校に着いている。
「……お、もう学校か。早いな」
有無がポツリと言った。
「話していると、時間が経つのが早く感じる事ってあるよねぇ……」
「でも、現在時刻はちょっとキツいかもよ？急いだ方がいいんじゃない？」
「「え？」」
恋歌の言ったことに反するかのような意見を掲示した麗一に、2人から疑問――――否、確認の意味を含めた声が上がる。
恋歌と有無は、別段、息を合わせている訳では無いのに、ほぼ同じタイミングで校舎に備え付けられている時計を見た。その時計の指し示す時刻は、8時26分。あと4分で予鈴が鳴る。
「……急ぐぞ！走るぜ、麗一！」
「え？あ、うん！」
「ちょ、ちょぉっとぉ！！あんたら待ちなさぁい！！」
3人は慌ただしく校舎の中へと入って行った。
学生が、自分たちのクラスへ入っていく。

そんな当たり前の光景が目の前で流れていく。
麗一たちも、その光景に投影される日常の1ピースだ。流れに習って、自分たちのクラスへと急ぐ。
「はあ、やっと着いた……」
麗一は自分の席に座ると同時に、溜息を1つ吐き出した。
巴咲高校の2年1組の教室は、4階にある。
普通の高校生ならおよそ経験したことの無いであろう朝の仕事を終え、ここまで歩き、4階まで上がるのがどれ程の労働か、麗一は日頃から理解していた。
机に突っ伏して、少しでも体力の減少を抑えようとする麗一。
その後ろに、麗一に近づこうとする1人の女生徒の姿があった。
背は恋歌よりも2回りほど小さく、整った顔立ちと綺麗にそろっている前髪。歩く姿も様になっており、世に言う『良い所』の育ちである事が伺える。というか、彼女の場合は実際に良い所で育っている。
その娘は、しゃなりしゃなりと麗一の横まで移動すると、声を絞り出すようにして、麗一に話しかけた。
「み、御咲君、おはようございます……」
「ん……あ、式園(しきぞの)さん、おはよう」
麗一に返事を返されたその娘(しきぞのるり)――――式園瑠璃は、気恥ずかしそうに頬を赤らめる。
「あ……えっと、あの……その……」
瑠璃はパクパクと口を動かすが、会話が繋がらない。
「……えっと、どうしたの？」
「い、いえ、何でもない……何でもないです……」
瑠璃は、またも恥じらうように俯く。
「……大丈夫？体調が悪いの？」
「へ？い、いや、そんな事は……」
口ではそう言うものの、顔は耳まで真っ赤だ。熱でもあるんだろうか。

麗一はそう思い、立ち上がって瑠璃の額に手を当てた。
「ひゃっ？」
手が触れた途端、瑠璃はびくっと身体を震わせると、後ろに飛び退いて縮こまってしまった。
「え！？あ～……えっと、ゴメンね。今僕、何か変な事したかな……？」
「い、いえ……違います……」
麗一の問いに、瑠璃は縮こまったまま答えた。
２人の間に、微妙な空気が流れる。
「あ～……え～っと、もういいかな……？」
先に口を開いたのは麗一だった。
「は、はい……すみません、お足を止めさせてしまいまして……」
「いや、そんな事は……」
上品な謝罪の言葉を言った後「はあ……」と、これまた上品な溜息を漏らして自分の席へ帰っていく瑠璃。
その残念そうな横顔を見て、麗一は首を捻った。
自分は何か、変な事をしただろうか？
答えは出て来ない。
彼女の事だから、僕らみたいな中流社会の住民には分からない気苦労とかがあるんだな。と、麗一はこの事についての自己完結をして構想を終了する。その途端、教室のドアがガラガラと音を立てて開いた。
「おはよー！ホームルーム始めるから、席について下さ～い！」
ドアから出てきたのは、とても背の低い女性だった。だが、その手には出席簿が握られている。つまり、教師なのだ。
この教師が麗一たちのクラスを受け持つ教師、城咲穹（きざきそら）である。ちなみに、担当教科は保健である。
学生に様な容姿とは裏腹、雄々しい名前の持ち主のため、名前だけでは男性と間違われ、容姿では学生と間違われる。それが彼女の悩みらしい。

丁寧にドアを閉めた穹は、そのまま教卓の前へ――――

ズデッ！

「いったぁ！」

……段差で転んだ。

「穹センセ、相変わらずっすね」

大きな声で有無が言う。案の定、クラスは笑いに包まれた。

「ぅぅぅ……笑わないで下さい～！」

穹は顔を真っ赤にし、手を振り上げて反論する。

そんな子供っぽい仕草が、容姿に次いで彼女を人気にしている理由の1つである。

加えて言うならば、クラスを騒がしくする要因の一つでもある。

「皆、静かにしてあげようよ……」

「そ、そうよ！皆静かにッ！」

麗一が少し声を張って言う。それに恋歌も呼応して、教室は何とか静けさを取り戻した。

「御咲君、逢坂さん、ありがとうね……」

穹は、若干目に光る物を湛えながら2人に礼を言って、出欠を取り始めた。

……この人、教師として大丈夫なんだろうか。

そんな無粋な疑問は答えが当たり前すぎて、あえてそれ以上は考えなかった。

麗一は何も言う事無く、穹の話す伝達事項に耳を傾けた。

巴咲高校は、学力はそこそこあるため、それ相当の授業はする。

現に、授業中はクラスメイトは終始無言でノートにペンを走らせている。

しかし、麗一にとっては『この程度』の授業でしかない。もちろん授業自体はきちんと真面目に受けるのだが、麗一のレベルともなれ

ば退屈に感じてしまうのだ。
早く終わらないかな……。
麗一が黒板の内容をノートに書き写し終えてから、既に４分程だ。
授業の内容の説明は全て終わり、先生の雑談が始まっている。
こんなくだらない話を聞いている暇があったら、早く次の授業を受けたい。と麗一は思うのである。
と言っても、この授業が終われば、昼休みで、朝食の時間だ。授業は３０分程おあずけとなる。勉強熱心な麗一でも、昼休みは楽しみなのだ。
その昼休みに食べる弁当には、恋歌の好きな揚げ物、エビフライが入っている。恋歌、どんな反応するかなあ……。麗一は回想に耽る。
そんな事を考えるうちに、授業の終了を告げるチャイムが鳴り響く。
授業が終わり教師が号令をかけさせると、教室内は一気に騒がしくなる。
麗一は、このざわざわしている空間が嫌いなのだ。そのため授業が終わったら、恋歌と有無、そして、時々瑠璃も連れて、麗一たちはいつも昼食を摂っている、ある場所へと向かう事にしている。
「麗一、おつかれ」
今日、先に来たのは、恋歌の方だった。
「今日のお弁当、頂戴！」
「はいはい、ちょっと待ってね……」
麗一は、言われた通りに自分のバッグから、２つ弁当箱を取り出し、片方を恋歌に渡す。
その時丁度、有無がやってきた。
「う～す、麗一ィ。おおっとぉ！？また愛妻弁当（？）か。恋歌ァ、いい旦那さんを持ったな……ぐへえっ！！」
有無が台詞を言い終えるか否かという所で、恋歌が有無の顎に強力な一撃を叩き込む。しかも脚で、だ。

確か恋歌は、武術等は何も習っていない筈だ。どこでこんな危険な体術を身に付けたのだろう。麗一は毎度の事ながら首を傾げる。
「あああもうっ、あんたはうるさいのッ！そこで黙ってなさい！もう……。ほら麗一、さっさと行きましょ。」
「あ、うん。そうだね。早く行こうか。」
不機嫌な恋歌に口答えすると、どうなるか分からない。少なくとも殴られるのは目に見えている。麗一は歩を進めようとした。その時、瑠璃が麗一のもとに近寄ってくる。
「……あの、御咲君……」
話しかけた瑠璃は、もじもじとしながら、こう続けた。
「昼食、ご一緒してもよろしいですか？」
「あ、うん。もちろん」
「そうですか……良かったです」
麗一の肯定に瑠璃は心底嬉しそうに笑うと、麗一の横に並んで、麗一の制服の裾をふわっと掴んだ。それに、恋歌がくってかかる。
「ああーっ！何引っ付いてんのよ麗一ィ！」
「え？いや、今のは僕がやったわけじゃなくて、式園さんが……」
「どっちも同じよ！いいから離れなさい、恥ずかしくないの！？」
「いや、僕は別に……」
どこかしら不穏な空気が漂う。周りもざわざわと色めき立って、何かしら囁く声が聞こえる。

『またあいつらか……全く、毎回毎回騒々しいな』
『いちゃいちゃしやがって……麗一の奴め、うらやま……いや、けしからんな』
『いったい式園さんと恋歌ちゃん、どっちを選ぶんだろうね、麗一君は』

これが世に言う「修羅場」とか言う奴なんだろうか。それにしては、ちょっと生易しいような……では、この状態を何と言うんだろ

うか？
「この状態をな、『婿の取り合い』って言うんだぜ、麗一クン」
いつの間にやら復活していた有無が、麗一に言う。
「へ？……ムコの、取り合い？」
「そうそう、一体、この戦に勝つのは誰なのか、全ては麗一、お前次第だ」
「え、え～っと、有無、その話さ、もしかして2人が僕に気があるのを前提で話してないかい？」
「えぇ～！？麗一クゥン、今の台詞、本気で仰ってますゥ？」
「だって、そうでしょ。まさか僕みたいなのに2人もの女の子が、ねえ……冗談キツイよ、有無」
「……人一倍の鈍感やな……」
「え？いや、そんな事は無いと思うけど……」
「いやいや、麗一君、いいから聞きたまえ。君は自分を過小評価する傾向がある。が、それはダメだ。改善すべき1つのポイントだ。……加えて言うならば周りに敏感になれ。もっと自己主張を持って生きて行かないと、女の子は素直にはならな……」
ここまで言って、何かの気配を感じたのか、有無が振り向く。
「……お前は、何を言ってるんだ？」
ギギギギ、と首を後ろへと向けた先には、脳天から鬼のような角をメキメキと生やした恋歌の姿があった。少なくとも、彼にはそう見えた。
「……あ、あはは、恋歌さん、こんにち……」
「いっぺん死んでこぉぉい！！」
何か言い訳をしようとした有無に、恋歌の見事なアッパーが炸裂し後ろへ吹っ飛んだ。この格闘家顔負けの戦闘技術に、そこかしこから賞賛の拍手が沸き起こる。
その拍手の対象の恋歌は、廊下にまで吹き飛ばされてぐったりとしている有無に、びしっと人差し指を突き立て、言う。
「あんたはそこでちょっと頭を冷やしなさい！麗一に変な事を吹き

込まないで！……ほら、行きましょ」
「へ？あ、うん……行こうか。式園さん、行きますよ」
「あ……はい」
「おぉいおい、待てって、置いてくな～」
「復活早ッ！」
律儀にも麗一がツッコミを入れる。
「まだ起きれるんなら、今度はキャメルクラッチでもどう？」
「もう絶対言わないんで許して下さいお願いします」
「物騒だなぁ」
まるでコントの様な会話をしながら、４人組は『秘密の食事場所』を目指した。

巴咲高校の屋上。
その屋上で、男女が２人ずつ、計４人が賑やかに食事を摂っている。
そう、『秘密の食事場所』とは、屋上の事だ。
だが、巴咲高校は、屋上を生徒に解放している訳では無い。
つまり、校則違反だ。
「……」
まるで居場所が悪い。と言わんばかりにそわそわしながら、巴咲高校屈指の優等生、御咲麗一が昼食を食べている。
「なぁにそわそわしてんだぁ？麗一ィ。鍵が掛かっている事になっている所に、先生殿は来ませんって」
そんな様子に気付いてか、サンドイッチを口の中に放り込んだ有無が麗一に話しかける。
「でも、校則違反だし……」
「大丈夫よ。だって、今まで誰にも注意されなかったし」
「わ、私も……あまり校則違反は嫌いですけど、できればこのような静かな所で食べたいです……」
「まあ、確かにそれはそうだけど……」

そもそもここは、さっき有無が言った通り、鍵が掛かっていたのだ。それを1年生の頃、有無本人が無理矢理こじ開けて、そこで昼食を摂るようになったのだ。
そして今に至るわけなのだが……。
やはり止めるべきでは無かったのだろうか？
今更になって麗一は考えるのであった。
「あ、あの、御咲君の卵焼き、美味しそうですね」
瑠璃が麗一に、恥ずかしそうに言う。そんな瑠璃の問いかけに、麗一は答えた。
「あ、これ？よければあげようか？」
「え！？いいんですか！？ありがとうございます……って、御咲君、何を……？」
麗一が、自分であげるといった卵焼きを、自分の箸で掴んだ。それを、瑠璃は不思議そうに眺める。
「あ、いや、箸どうしで物を取るのはマナーが悪いからさ、はい、口開けて」
「へ……？」
「いや、いいから、あ～んって……」
「あ、あーん！？」
瑠璃は、顔を真っ赤にして俯くと、程無くしてがばっと顔を上げた。
何かしらの覚悟を決めたような表情をしている。
「は、はい、どうぞ……」
「ん、はい」
瑠璃は、口の中に入った卵焼きを、上品に咀嚼する。かなり無駄なスキルではあるが、そのようにせよと育てられてきた瑠璃は重要な物と考えているようだ。
「……いつもながら、とても美味しいです」
「ありがとう」
頬を朱くしなら瑠璃が言った一言に、麗一が礼を返す。
「というか、式園さんのお弁当も毎度ながらかなり豪華だよね。１

つ欲しいな」
「え？あ、ああ、これは、その、私が作ったんじゃなくって、仕えている者が作った物で……」
「美味しいの？」
「え、ええと……それは……私は美味しいと感じますけど、御咲君の舌に合うかどうかは……」
「それでもいいよ。１つだけ、何でもいいから」
「そ、そうですか。それじゃあ、このハンバーグで……」
そう言って、瑠璃は箸で、そのハンバーグを持ち上げた、そして、麗一のしたように、彼女もまた、食べさせようとする。
「み、御咲君……どうぞ」
「あ、食べさせてくれるんだ、ありがとう」
礼を述べた後、麗一はそのハンバーグを食べた。肉がとてもジューシーで、かと言ってしつこくない。手間暇かけて作られた１品だという事が窺い知れた。
「……むう、これは……流石に僕には出せない味だ。美味しかったよ。ありがとう」
「……そ、そんな、こちらこそ……」
「それにしても、いつもこんなに美味しい物を食べられるなんて、羨ましいなぁ」
「え、あ、ありがとうございます。でも、御咲君のお料理も、じ、十分に美味しかったです……よ？」
「そんな、お世辞でもそんな事は無いよ」
麗一は気にも留めていないが、瑠璃は今の台詞を本気で言っていた。一流のシェフが作った料理を幼少から食べていた彼女でも、麗一の料理の出来には舌を巻く程だった。
「お、お世辞じゃないです、本当に美味しかったで……」
「あぁあああああっ！！あんたら何やってんのよォおおおおお！！」
瑠璃の台詞は、こちらを発見した恋歌の絶叫によってかき消された。叫んだ恋歌は、そのままずかずかとこちらに寄って来る。

「見てたわよ、麗一……何させてたのかしら……？」
「え、ええっと、ですね、恋歌さん……」
必死の弁解を試みるものの、恋歌には既に『はいあ～ん』的なものを見られてしまっている。これは毀れも無い事実だ。
現状を確認した麗一は、最早弁解の仕様が無い事に気が付く。
……もう、僕は駄目かもしれない。
心の奥で覚悟を固め、最後の足掻きとばかりに話そうとする。
「あのね、怒らないで聞い……」
「おおっとぉ！？どうしたぁ！？修羅場かぁ！？包丁とか鋸とかは持ち出すなよォ恋歌ァ！」
「な、何が修羅場よ、いい加減にしなさぁぁい！！」
「ぐへあぁぁ！！」
たった今の有無の野次のお蔭で、恋歌の怒りの対象は麗一から有無に移行、仮面ラ〇ダー顔負けのライ〇ーキックを繰り出し、有無は奇声をあげ吹っ飛んだ。
「わ、凄い……」
このCG無し、ワイヤー、ロープ共に無しのアクションに、瑠璃が素直な感想を漏らした。
「麗一ィイ！！」
「は、はいぃ！」
怒鳴って名前を呼ぶ恋歌の迫力に押され、思わず声が裏返ってしまった麗一。
そのままどかどかと寄って来る恋歌を見て、麗一は歯を食いしばった。
何が来るか。総合近接格闘か、それとも助走をつけてのドロップキックか。思わず身構える麗一だったが――――
「は、はい！これ、食べなさい！」
出されたのはそのどちらでもなく（というか格闘技ですらない）、1つのエビフライだった。ちゃんとタルタルソースまで付いている。
「ほら、育ち盛りだからまだまだ食べれるんでしょう！？」

「え、恋歌、それ、恋歌の好きなやつじゃ……」
「いいから！口をあけなさい！！」
これ以上何か言おうものなら、本当に体術を繰り出されそうだ。
麗一は素直に口を開けた。
恋歌は、「宜しい」と言って、麗一の口の中にそのエビフライを優しく入れた。
「んぐんぐ……って、恋歌！シッポは取ってよ！」
「あ、ゴメン、麗一」
麗一の指摘に手を前に出して謝る恋歌に、怒りの表情は見受けられなかった。機嫌が直って何よりだ。
「さ～て、今度は麗一から何かもらおうかしらね……」
「え？いや、僕もう食べちゃったよ。それに、中身は同じだから、そんな事しても意味が……」
「はぁ！？大アリに決まってんじゃない！」
「そ、そうなの……？」
麗一は困り顔で藍を見た。すると、瑠璃は微妙な表情で頷いた。その仕草自体はちょっと可愛らしかったが、どうやら麗一の問いかけ自体がタブーの様だった。……なぜだ？
「むう……無いなら仕方ない。缶ジュースで勘弁してあげましょう」
「う、うん、いいよ」
麗一は、後で恋歌に缶ジュースを奢る事になった。
自分を鉄拳制裁から救ってくれた有無にも後で奢ってやろう。麗一はそんな事を考えつつ、有無の方へと顔を向ける。
「……」
麗一が視界に入れた有無は、何か見つけたように空を睨んでいる。
「……有無？どうしたの？」
麗一が近づき、有無に声を掛けた。
「ん？ああ、いや……あれ」
言葉で伝える代わりに、有無は空を指差した。
空は、雲１つ無い青空――――――

いや。
空の片隅に、黒い雲が1つ、ポツリと浮かんでいた。
それは、みるみるうちに空を覆い隠し――――
ポツリ。
水の粒が、麗一の頬に1つ当たる。
「……雨だ」
麗一は呟いた。
念のために傘を持って来て良かった。
「嘘でしょ……？今日、傘持ってきてないのに」
「あ、あの……2つありますから、貸しましょうか？」
「ホント！？ルリちゃん、ありがとね～！」
そんなありふれた2人のやり取りを、有無はにやにやしながら見ていた。「何よ」と恋歌が有無に向かって言う。
「いやぁ？お前ン事だろうから、麗一から借りるかと思ってたぜぇ、大人になりましたねぇ……」
「んなぁっ……くっ、くたばれぇっ！！」
「あべしっ！！」
顔を真っ赤にした恋歌のアッパーが、見事に有無の顔を捉えた。
有無は意味不明な断末魔をあげて後ろへ吹っ飛ぶ。
もっとも、意味のある断末魔があるのかは分からないが。
「ほら、麗一、ルリちゃん、濡れちゃうから行くわよ！」
「え？あ、うん。有無、ずぶ濡れになる前に戻って来てね～」
倒れ込んだ有無に話しかけた後、麗一たちは校舎へと戻って行った。
「いってってって……っつう……恋歌め、何も本気でやらんでも……」
誰も居なくなった屋上で起き上がった有無は吐き捨てるように文句を言った。
恋歌がいない今なら、何を言っても構わない。ついでに誰もいないから、『独り言を言う寂しい奴』とも思われない。

「……あいつらも、早く言っちまえば良いのに……」
『あいつら』とは、恋歌と瑠璃の事だ。
何気なく呟いた一言だが、この場にあの2人（特に恋歌）が麗一とペアでいると、この台詞に過剰反応するだろう。
……その時でも、多分、麗一は何食わぬ顔をしているだろうな。
「……鈍感すぎるぜ、麗一」
吐き出すように呟くと、有無は校舎に戻ろうとした体を後ろ向きに起用にひねり、屋上からの景色を眺めた。
さっきと変わらない、屋上からの景色。

――――――の筈なのだが。
「……？」
一瞬、何かが見えた。
今からずぶ濡れになるであろう、大地。
その大地の上に浮かぶ、2本の足を持つ、人の形を纏った、黒っぽい、巨大な何か。そんなようなものが、ちらりと見えた。
「……？」
……見間違いか？
本当に、見間違いだったのだろうか。一瞬にしては妙に臨場感のあった光景だった。
「……まさか」
有無が呟く。
理由を問われれば、まず、こう言うだろう。
嫌な予感がした。
そう有無が思った時。

ドザァアアアア……

空から、いきなりバケツを引っくり返したかのような雨が降り始めた。

突っ立っていた有無は、無論、直撃を食らった。
「……嫌な予感って、これか！？」
ずぶ濡れになった有無は、チャイムが鳴るまでに着替えよう。そう思って校舎の中に引き返すのであった。

2

土砂降りの雨は、学校が終わっても止まなかった。
有無は学校で用事、恋歌は瑠璃に傘を借りようとしたのだが、その傘は瑠璃の迎えが持って来るので、その迎えが来るまで待つ事となった。
そのため、麗一は1人で帰る事にした。
「……1人で帰るのって、久し振りかもね」
呟いて、麗一は傘を広げた。
そして雨の中を家まで歩く。
学校から家まで帰るのは、行きに比べると道程が短いように感じる。
「……」
家に帰ったら今日の授業の復習かな。そう思って歩いていると、もうすぐ自分の家だ。
この角を曲がれば、すぐそこに玄関が――――
「……！？」
麗一は我が目を疑った。
玄関の前に、何か（・）ある（・・）。麗一は目を凝らして見てみる。
人だ。
玄関の前に、人が倒れている。
「……！！」

気が付いたら、麗一は駆け出していた。
そしてそのまま倒れた人に駆け寄り、肩を揺する。
息はある。だが反応が無い。
倒れているのは、可愛らしい女の子だ。身長は１００ｃｍ以上はあるだろうが、とても小柄だ。
更に言うと、彼女が身に纏っているのは、とても小柄なこの子が着てもまだ小さめの薄手のワンピースだ。傘も持たずにこんな格好でこの雨の中にいてはいずれ衰弱してしまうだろう。
しかし、救急車が必要だろうか？暖かくすれば、問題は無いかのように思われる。
取り敢えず、自分の家に運び込もう。それで目が覚めたら、話を聞いてみよう。
麗一は、小さい体をだき抱え、家へと運び込んだ。

家の中に運んだ後、麗一は彼女をソファに寝かせ、そのまま暖かい毛布で包んだ。
流石に服が濡れているからといって女の子を身包み剥がす訳にはいかなかいので、服はそのままにしておいた。
問題のその娘は、すうすう、と可愛らしい寝息を立てて寝ている。
「……」
妙に落ち着かない。今まで自分の家に、他の誰かと一緒にいるという出来事が、全くと言って良い程無かったからなのだろうか。
「……本でも読むかな」
とにかく、気を紛らわせたかった。麗一は本棚から本を一冊取り出し、読み始める。
「……」
麗一は、本を読むスピードも速い。あっという間に何ページか読み、次のページを読もうとページを捲ろうとした時。
「……んっ」
声が聞こえた。麗一の物では無い。

つまり、少女の物だ。
麗一がソファに近づくと、少女はまだ眠そうに眼をぱちぱちさせていた。
「気が付いたかい？」
麗一が話しかけた。少女は一旦びくっと体を震わせると、麗一の方へと向いた。微細ながら、目が見開かれているのが分かる。
「あ、ごめんね。驚かすつもりは無かったんだ。」
麗一は驚かせたのでは、と思い、反射的に謝った。
すると、少女が反応した。
「……似てる」
ポツリと、無機質な声が麗一の耳に届く。まるで耳を素通りして行くかのような、平坦な声だった。
「え？えっと……今、何て？」
「……いえ、何でもありません」
少女は、またしても無機質な声で返答をする。
「……ここは、どこですか？」
少女は尚も続ける。彼女は輝かしい銀色の髪を持っている。それと相反するかのような、宇宙空間のような漆黒をたたえた瞳が麗一を正面から見据える。
「ええっと……ここは僕の家だよ」
「……そうですか」
質問が終わると、少女は黙り込んでしまった。
……。
気まずい沈黙。
その沈黙の間、ずっと少女は麗一を眺め込んでいた。
腰まで届く長い銀色の髪、ほんのりと朱に染まっている淡い白色の頬、濡れてしまって、肌が透けている服、その全てが、食い入るように麗一を見つめる。
「……ええっと、君の名前は？」
この状態に耐え兼ねた麗一は、とにかく話しかけてみようと思い、

少女に質問した。
「……？」
少女は、首を傾げる。
「……私の、名前？」
「そ、そうそう！仲良くなるには、まずお互いの名前を知っとかないと。こんな所で出逢ったのも、何かの縁、運命の出会いだよ」
「何かの、縁……。運命の出会い、ですか」
「う、うん……、まあ、ね」
運命の出会いなんて面と向かって言われると照れくさいな。
麗一がそう思った時、彼女は思いもよらぬ事をした。
「そうですか、では、運命の出会いを祝して」
そう言い放って、彼女は麗一に顔を近づけた。
そして――――――
「！！！」

麗一の唇を奪った。
麗一としてみればたまった物では無い。いずれは愛する人と交わすために取って置いていた、いわば『最初の口づけ（ファースト・キス）』を、まだ名前も知らない（というか知りたいのに返答をしない）少女に奪われてしまったのだから。
しかし少女は、そんな麗一の心境など露知らず、何とも大胆に舌まで入れてきたのだ。
他人にとって羨むべき状態である当人は、そうでない状態を羨む。
そんな言葉を思い出し、そして思い知った麗一だった。
「な、なな、ななな……」
「……ふうむ、誤差、＋０，０１……！」
「い、いきなり、な、なにをするんですかぁ！」
麗一の猛抗議を全く無視して、少女は麗一の手をがっしと掴む。
そして少女は、こう言った。
「……私たちは、本当に、運命の出会いをしてしまったようです」

「はいぃ！？」
少女は納得していても、麗一は、少女の言っている言葉の意味が全く分からない。
そもそもそれ以前に、いきなりキスをされた麗一は、頭が混乱して思考が全くまとまっていない。こんな状態の人間に話しかけても物事が理解できる訳が無い。
「う、うう、運命って、な、何を言ってるんですか。お互い、まだ何にも……」
「それは、これから知れば良いんです」
「は……？」
それは一体どういう意味だ。麗一は叫びたい気分だった。
「……手始めに、貴方の名前を教えて下さい」
「え……」
「こういう時は、まず男性からというのがマナーです。」
「あ……うん……」
興奮していた頭が徐々に冷えていって、冷静になって来ると、麗一は、相手が自分を丸め込むように話を進めようとしているのが分かった。まあ、話を仕切ろうとしてくれているのなら、それでいいのだけれど。
「僕の名前は、御咲麗一。麗一でいいよ」
「ミサキ　レイイチ……」
「そう、それが僕の名前」
「そうですか……」
「……」
気まずい沈黙は変わらずだが、麗一は、この娘と話している間、不思議なものを感じていた。
話していると、心が穏やかになってくるのだ。
そして、いつの間にかすっかり落ち着き、まるでセラピーを受けたような気分になった麗一は考えた。
彼女は一体何者だろうか？

答えは出る筈も無い。
答えが出ない問題は考えない。麗一は思考を中断して、彼女の言っている事を良く聞くようにした。
「それでは、私の名前を」
「あ、うん。何て名前なの？」
「私の名前は……カノン・ブレスタ。カノンで、いいです」
「カノン・ブレスタ……って事は、外国の人！？」
「……いえ、違います」
麗一は驚いたが、カノンと名乗る少女はそれを否定する。
「じゃあ、どんな生い立ちなの？」
「……知りたいですか？」
「うん。できればで良いけど、良かったら教えてくれないかな？」
「……話すと長くなると思います」
「君さえ良ければいいよ」
麗一はなるべく会話を続けるために矢継ぎ早に対応をした。
しかし。
「……」
ここで、彼女は黙り込んでしまう。
「……えっと、どうしたの？」
「……約束してくれますか？」
「え？」
「今から私が言うことを、全部信じると約束するのなら、話します。」
「……カノン？」
麗一は、想像がつかないでいた。
これからこの娘は、何を言うんだろうか？
多分、突拍子も無い事を言うんだろうが……。
だけど、この娘の眼は純粋だ。曇りが一切無い。嘘をつくなんて事はしないと思う。
麗一は、この娘を信じてみようと思った。

「……分かった。約束する。信じるよ。だから、話してみて。」
「……分かりました。それでは」
カノンは長い沈黙の後、ふう。と、息を吐くと、ポツリと告げた。
「……私は、別の世界からやってきた、人工的に作り出された人間です。……いえ、人の解釈によっては、人間かどうかすら危うい存在です」
「……え？」
自嘲的に、カノンは言った。麗一は疑問符を付けた返事を返してしまったが、カノンはより詳しく言い直した。
「私の頭には、脳の代わりに有機性超高度思考発生装置が埋め込まれています。つまり、生きたコンピューターみたいな物です。」
「……」
麗一は、言葉が出なかった。
何にせよ、彼女の言っている事を要約すると、「自分は生きたオーバーテクノロジーです」という事なのだ。普通の人なら、到底信じる事はできないだろう。
しかし、麗一は彼女と『話を信じる』という約束をした。
ここは、仮説を立てて無理にでも理解するんだ。と、麗一は口から出かかっていた言葉を飲み込んだ。
麗一の、脳の中で仮説を展開し、理解しようと必死に考え込んでいる様を見ていたカノンは、麗一に向かって呟いた。
「麗一さん……やっぱり、無理でしたか？」
これは、カノンの心からの言葉だった。カノン自身、無理な約束をさせた。そう思っていた。
麗一は、突然話しかけられて戸惑ったが、必死に言葉を紡いだ。
「え……いや、僕は信じるよ。だけど……」
麗一は一呼吸おいて、言った。
「僕は……『君が人間じゃない』だなんて、言ってほしくないな。」
「……ッ」

カノンは、麗一にそう言われると、少し頬を朱にそめて下を向いた。そして、照れくさそうにこう言った。
「……そんな事を言ってくれたのは、麗一さんが初めてです……ありがとうございます」
「え、あ、どうも……」
麗一は、こんな時はこう答えるのが当たり前だと思っていた。それなのに、そんなに感謝されるとは思いもしなかった。少し照れくさい。
麗一は、中断した思考を再開し、カノンに詳しい事を色々聞こうと思っていた。仮説と言っても、情報が無ければただの妄想だ。全く意味が無い。
「ねえ、カノン。どうしてこの世界に来たんだい？」
「……はい。私は、ある目的のために、仲間と一緒に地球のあるこの世界にやってきました。しかし、私は、元からその目的には賛同しかねていて、それが元で共にこの世界に来た仲間と意見がすれ違い、裏切者扱いされました。私はそれから、この星の人に、仲間の目的を伝えに来たんです」
「へえ……その目的って？」
麗一は、おそらく興味本位で聞いたのだろう。
しかし、帰ってきた返答は、耳を疑う物だった。
「仲間の目的は……この星の侵略です」
「へえ……はい？」
侵略？
「……ごめん、もう一回言ってくれないかい？」
もしかしたら、聞き間違えたかも知れない。淡い期待にすがって、麗一はもう一度、カノンに聞き返した。
しかし、帰ってきたのは非情な回答だった。
「……仲間の目的はこの星の侵略です」
間違い無い。今、彼女ははっきりと、『侵略』と言った。
侵略！？地球を！？

「そんなの、冗談じゃない！！」
「でしょう？私も貴方と同じ気持ちです。私はこの星の生物の命を私たちの都合だけで無下に奪う訳にはいかない。そう、思ったのです。」
「だから、仲間を裏切った。と……」
「まあ、そのようなところです」
「……」
あまりの話に、麗一は続けるべき言葉を紡ぐ事ができずにいた。
そしてカノンは、またしても厳しい現実を言い放つ。
「私は、ここの世界の時間で言う、正午過ぎにこの世界にやってきました。そして、ここに辿り着く数時間前、私はこの世界の『インターネット』と言う物で、世界の兵力や、武器の性能などを調べ、細かく分析を試みました。もしかしたら、この世界の兵力は、かつての仲間が用意した侵略用の兵器に十分対抗できるのではないか。そう思ったのです」
ですが、と、カノンは首を小さく横に振ると、続けた。
「この世界の兵力では、あの人の作った兵器には歯が立ちません。私の計算では、あの人たちの所有する全部の起動兵器を投入したとすると、１０日もしないうちにこの星は制圧されます。」
麗一はその絶望的な発言を前に、黙り込むしか選択肢が無かった。
対抗できるかできないか。その問いの答えは薄々分かってはいた。世界を超えられる力を持つ相手に、地球の人類の科学力程度では勝てる筈が無い。そう思ったのだ。分かってはいたのだが、いざ指摘されると、どうしても気分は落ち込んでしまう。
沈黙が部屋を包む。
その沈黙を破ったのは、麗一だった。
「……どうにも、ならないのかい？」
麗一は、この星がいずれ彼女の仲間、言い換えた所の『異世界人』によって侵略されてしまうという事実に、どうしても納得がいかなかった。

「僕たち、地球人が生き残る方法は、無いのか？」
麗一はカノンに言った。これで「無い」と言われたらそれまでだ。
そしてカノンは、無言でうなずいて、言い放った。
「ありますよ」
その言葉が今の麗一にとって、どれほどの心の救いになったか解からなかった。
「あるのか！良かった……」
絶望感が一気に希望へと変わり、ほっと胸をなでおろす麗一。その過程で、必然とも言える疑問を麗一は抱いた。
――――――それって、どんな方法なのだろうか？
「カノン、それで、その方法って……？」
麗一は、カノンに尋ねた。
この一言が彼の運命を変えてしまうとは、麗一はまだ知らずにいた。
「私は、あの集団から抜ける前に、機体を一つ、強奪しました。」
「え？」
キタイ？キタイって、何の事だ？
「その機体は、あの人の造り出した機体の中でも究極と言わしめる機体であり、絶対無比の力を持っています。この機体であれば、いくら彼女らと言えど……」
「ちょ、ちょっと待って、ストップ」
「はい……？」
まさか、と思い、麗一は会話を一旦止め、質問した。
「キタイ、って、何の事、かな？」
「……機体は機体です。……そうですね……分かり易いように言えば、ロボットの事ですよ」
「ろぼっと……？」
「詳しく言うと、戦闘用に開発された人型の兵器の事です」

「……」
……なるほど。
麗一は、彼女がこれから何を言おうとしているのかを、解かったような気がした。
「……あの、カノンさん。まさかとは思うけど、僕にその機体とやらに乗って戦え、なんて言わないよね？」
「麗一さん……」
何言ってんだコイツ。と思われても構わない。麗一はただ、その次の言葉に「そんな訳無いじゃないですか」という台詞を期待しているだけなのだ。
頼む。麗一は願った。
「……凄い。よく分かりましたね」
そんな麗一の願いは、超が付くほどあっさりと砕かれてしまった。
希望と思ったものが（少なくとも自分にとっては）そうでないと知り、諦めのムードが麗一の頭を包み込む。
と、同時に、この理不尽な扱いに対する、静かだが猛烈な怒りが湧きたった。
どうして僕なんだ！麗一は思った。
「な、何を言ってるのさ！どうしてそんな……！！」
「貴方以外にできないのです……」
「だからどうしてさ！！」
「麗一さん、落ち着いて下さい」
「ッ……！」
確かに、彼女の言う通りだ。ここで騒いだって何にもならない。
怒りの感情が萎み、麗一の心にカノンに当たった事への後悔の念が湧き上がる。
麗一は、無理にでも気を落ち着かせた。
「……分かったよ。じゃあ、何で僕なんだい？」
ひとまず落ち着いた麗一は、一番気になっていた事を尋ねた。
「あの人の作った機体には、搭乗者の脳波を測定する機能が付いて

います。そして、登録されている脳波以外の人間が乗っても、稼働しないんです。」
「なるほど、防犯対策みたいなものか……。でもそれじゃあますます、僕が乗っても意味が無いんじゃ……？」
麗一は、話を理解し、その過程で生まれた至極まっとうな意見を言った。だが、カノンは否定する。
「私も初めはそう思ったんです。ですが、１つ盲点がありました。」
カノンは、「これから話す事は、この世界の人にはちょっと難しいかも知れませんが」と前置きを挟んでから、また話し出した。
「世界は、１つではありません。この世界の他にも、無数の世界が広がっています。」
「……それは、今までの話から、何となく分かるよ」
何となく分かる、というか、認めざるを得ない状態になってしまっている事に、麗一は言った後に気付く。
カノンは、気休め程度にしかならないだろうが彼が話を呑み込み易くするように、少し間を置いてから、続けた。
「その１つ１つの世界は違くとも、そこにあるものの『存在の波形』はどの世界でも共有されている。……解かりますか？」
「んんんん……ああ、何となく分かった。つまり、違う世界でもそれと同じような存在がある。という事かな？」
「ん。満点です。例えば、道に落ちている石があれば、大きさや質量、その元素や構成などに多少の差異はありますが、同じような物が別の世界にも存在します。この世界に住まう猫なども、同じ様な個体が別の世界にも存在します。私たちはそれを『同一因果共同体』と呼んでいます。」
「同一因果、共同体……」
麗一は、重要そうな単語を復唱した。
「はい。……ですから、それに基づいて考えた時、内面などは多少違くとも、この世界でも機体に登録されている脳波とほぼ同じ脳波を持つ、『同一因果共同体』がいる。という事に気が付いたのです。

そして私はこの世界で、その方を探させて頂きました。」
　そこまで言って、カノンは麗一の事をしっかりと見つめた。
「……そして、私は見つけたんです。『同一因果共同体』を」
「それが、僕だって言うのか……どうやって分かったんだい？」
麗一が質問をすると、カノンは頬を赤らめ、恥ずかしそうに言った。
「……さ、さっきの、キスで……」
「あ……そうかい……」
　この返答に、麗一は黙らざるを得なかった。これ以上この事を話すのは、お互い嫌だろうからだ。少なくとも麗一はそう思う。
　麗一は脱線した話題を再び元に戻した。
「……そ、それで、やっぱり、僕が乗らないといけないのかい？」
「はい」
カノンは麗一に、はっきりと言い渡した。生き残るためには、自分の身を削るような真似をしなければならない。余りにも厳しい現実に、麗一は俯いてしまう。
「……戦え。って、言うのか？この……こんな僕に」
「……申し訳ありません」
カノンは謝罪する。だけれども、言葉を続けた。
「……麗一さんにしか、できない事なのです。もし、麗一さんが何もしなければ、間違い無く、貴方も含めた大勢の人が文字通り無に還ります。」
　カノンはこの台詞の『文字通り』の部分に力を込めて言った。それほどの技術差があるという事を麗一に間接的に伝えるためだ。
「……」
麗一は、黙っていた。
戦う意思が固まっていないのか、それとも、ただ単に現実逃避して居るだけなのか。見ているカノンには解からなかった。
　カノンは、黙り込んでいる麗一に、励ますようにこう言った。
「……麗一さん、戦うのは麗一さんだけではありません」
「え……」

「どうやって、私が機体を強奪したと思いますか？」
「あ……」
「私も、その機体の搭乗者です。２人乗りなんですよ。あの子は」
「……！」
カノンも、搭乗者！？
麗一は驚愕に目を見開いた。
「出来れば、麗一さんを始め、この世界に住まう方々には迷惑をかけず、私１人だけで戦いたかった。ですが、私の方の搭乗席は、機体の調整しか出来ませんから、機体自体は動かせないんです。でも、貴方が……麗一さんさえいれば、機体を動かせる。一人前に戦えます……だから……」
「そう……か」
「麗一さん……お願いです」
漆黒の瞳に光る物を溜め込み、まるで黒い湖の様になった彼女の眼が、麗一をとらえる。さしずめ、水面に映った人の顔のようであった。
「……ふっ」
その映った顔が笑う。つまり、カノンの目の前にいる麗一が笑ったのだ。
「……麗一、さん？」
急に笑った麗一を見て、カノンは首を傾げる。
「これって、運命、ってやつかな……？」
麗一は、カノンに尋ねた。
「……それは、分かりません」
「だよね……。だけど、僕にしか……僕だけにしかできないのなら……」
そこまで言って麗一は、こくりと頷いた。戦うという意思表示だ。
「麗一さん……ありがとうございます……」
カノンがやや深めに頭を下げる。声は相変わらず無機質だったが、嬉しそうにも聞こえた。

頭を下げた後、カノンが手を差し出した。
「？……何だい？」
「……握手です」
「ああ……」
差し出された手の意味が分かった麗一は、その手を握る。
そういえば、キスした後、カノンは僕の手を握ったな。麗一は思い出す。
その時は、焦りの余り感じ取れなかった彼女の手の温もりを、麗一は感じた。この、暖かくも小さい手が、この世界の救い主の手だと思うと、いつも傍にいて、彼女の役に立ちたい。麗一はそう思えるようになったのだ。
麗一とカノンは、お互いに見つめ合う。
その時――――――

バァン！！

もの凄い音でドアが開けられ、まずは恋歌、続いて優歌が部屋へ入ってくる。
「麗一ィ！いつまで待ったら来るのよ！夕飯はどうした……って、あれ……？」
「むにゅ～……お腹空いた……っきゃー！！その娘可愛いー！麗ちゃん、どこで見つけたのー！？」
勢いの良かった恋歌の声は萎み、その代わり、可愛いものが好きな優歌が奇声を上げた。
「ええっと……麗一さん、これは……」
「れ、麗一ィイ！その子誰よ！誰との子よぉ！」
「人聞きの悪い事を言わないでくれ！」
困惑するカノンをよそに、やや論点がずれた口論を始める麗一と恋歌。２人は今まさに、近所迷惑を具現化したような存在となっている。

「2人とも、し～ず～か～にっ！！」
ふいに聞こえた大きな声に、麗一と恋歌は驚いた。声を発したのは以外にも、いつもマイペースな優歌だった。
優歌は、「恋歌ちゃんと麗ちゃん、ケンカしない」と2人を諌める。その後、優歌の視線は、先ほどから興味の対象となっていたカノンへと移る。
「で、麗ちゃん。この娘だ～れ？」
麗一に問いかける優歌の後ろで、恋歌は「うんうん」と言わんばかりに腕を組み、首を縦に振る。
「え、え～っと、ですね……」
麗一は返答に困った。誤魔化すにしたって、いきなりの事でそこまで考え付かないのだ。
「いいです。麗一さん」
何かと弁解しようとする麗一を、カノンが制す。余計な事は言うな。という事だ。
麗一を制した後、「全部話します」と言うカノン。麗一はたまらず彼女を奥まで引っ張り、耳打ちする。
「話してもいいの？はっきり言って、あの人たちが信じるかどうか分からないよ？」
優歌はどうだか分からないが、恋歌はそういう類の物は「嘘だ」と言い張る奴なのだ。麗一は長年の付き合いでそこの所を肌で感じていた。
「そこは麗一さんが何とかして下さい」
なげやりの様なカノンの物言いだが、あくまでも彼女は真剣だった。
はてさて、どうなるものかね。
麗一は底知れぬ不安を感じながら2人を説得する事にした。
説得している間、麗一は、カノンが何か言う度にケチを付けそうになる恋歌を宥める役に徹した。優歌の方はと言うと、始めは半信

半疑だったが、持ち前の人一倍の好奇心で話にのめり込んで行き、最終的には麗一に向かって「ファイトイッパーツ！！頑張ってね、麗ちゃん！地球の未来を守るんだぁ～」などと、ほぼ他人事のような態度だった。

……本当に、この人は保護者なんだろうか。

自分の身を案じない優歌の態度に、麗一は泣きたい気分になった。

「……話は以上です」

カノンが話を終えた。

「恋歌……大丈夫？付いて来てる？」

麗一は、魂が抜けたような恋歌に話しかける。恋歌は、麗一ほど頭がよろしくない。スケールが余りにも大きい話に、オーバーヒートを起こしてしまったようだ。

最初は何かと理屈を付けて反論していたのだが、話の後半になって来ると「もう疲れた」と言わんばかりに全く話さなくなってしまった。今は、酸素が足りない金魚よろしく口をパクパクさせている。

「それにしても、麗ちゃん大変ねえ……いきなりロボット乗るんでしょ～？」

優歌が、まるで世間話の様に話しかける。この人は何でこんなに他人行儀でいられるのだろうかとやや疑問に思いつつ、麗一は首を縦に振った。

「大丈夫！麗ちゃんならいけるよ！頑張ってね！」

優歌はウインクして、麗一の肩にポンと手を置いた。

その直後、ガバッと恋歌が体を起こす。

「お姉ちゃん……本気なの？」

この期に及んでまだ口答えする気のようだ。

「恋歌ちゃん、まだ信じられないの？」

優歌は、優しい声で恋歌に話しかける。

「だ、だって……麗一が……麗一が、ロボットに乗るなんて……そんなの、信じらんない……」

それはそうだ。僕自身未だに漠然としているというのに。麗一は

理解した筈なのにどこか逃避していた自分を情けなく思った。
そんな麗一をよそに、優歌は続けた。
「でもね、恋ちゃん。彼女の眼を見てみなさい。とっても真剣でしょ？」
「……」
「だから、信じてあげよ。ね？」
「……麗一は、いいの？」
恋歌は、ふいに聞いた。麗一は答える。
「僕は、この娘を……カノンを信じるって、約束したから」
「……そう」
苦笑いしながら答えた麗一を見て、恋歌はポツリと呟いた後、ふっと笑った。
「……ああもう、いいわよ、信じるわ。……そこまで言うならね」
恋歌は、話に同意し、麗一はホッとする。
まず1つ、重荷が外れた。
そんな麗一をよそに、優歌がカノンに語りかける。
「ねえ、カノンちゃん。今日はお泊りするところはあるの？」
「……あ」
優歌に尋ねられたカノンは、返答を返さず俯く。そして、言った。
「……お恥ずかしながら、確保しておりません……」
彼女の話では、この世界に来たばかりなのだ。見つかっている方が変だ。
そう思って聞いていた麗一だが、この後の優歌の台詞で度肝を抜く事になる。
「それじゃあ、今日からカノンちゃんは私たちの家族で~ す！宜しくね～」
麗一と恋歌は、あまりにも突拍子の無さすぎる話によろけそうになる。
「姉さん……」
「あら？麗ちゃん、イヤなの？」

「いや、そういう訳じゃ……」　今から家族にするのは賛成なのだが、書類だの身分証明だの何だので大変になる。と麗一は思うのだ。多分、恋歌も同じ気持ちだろう。
そういう事を言いたかったのだが、優歌の「大丈夫、どうにかなるって」で抑え込まれてしまった。
本当にどうにかなるのなら、それに越した事は無いんだが……。
「カノンちゃん、そういえば服がビショビショじゃない。替えは……ある訳無いか」
優歌が言う。そう言えばそうだった。長ったらい話が続いたせいで、麗一も彼女の服の事をすっかり忘れていた。
「じゃあ、服は私のコスプ……じゃなくって、ちっちゃい奴を持って来るから、カノンちゃんはここでお風呂に入っといてね～。恋歌ちゃん、ダッシュ！」
「おっけー！すぐ取って来るね！」
いや、ちょっと待って。麗一はそう言いたかった。
使い方が分からなかったらって……その時点でカノン本人はもう既に本格的に入浴する体制になっているっていう事じゃないか。それはちょっと、いや、ちょっとどころか、かなりマズい気がする。
……入る前に一通り教えてあげよう。麗一は思った。
「それにしても、お腹がすいたよぉぉ……」
麗一が一通り回想を終えた時、優歌が液状化したかのように床に崩れ落ちた。
「あ……どうしようか、夕飯」
難しい話で、空腹もすっ飛んでしまっていたのだ。気が付けば、尋常ではない空腹が麗一を襲う。
「麗ちゃん、何か作っといて……」
「分かりました。カノンがお風呂から出たら、そっち行きますんで……」
「おっけー……それじゃあ、待ってるよ～……」
げんなりした優歌は、それだけ告げると自分の家へと帰って行っ

た。
家に残っているのは、２人の男女。
「……」
自分はどうすればいいんだ。と言わんばかりのオーラを漂わせたカノンが、麗一を見つめる。
「……と、取り敢えず、お風呂場へ行こうか……」
無言の圧力を受けた麗一は、カノンを風呂場へ連れて行った。

カノンの着替え（どう見てもコスプレ衣装なのだが）を受け取った後、一通り風呂の使い方を説明し、カノンを入浴をさせる事に成功した麗一は、夕食を作り始めた。
何にしようか。と言っても時間があまり無いので、唐揚げを大量に作り、それを元で白米を平らげるという『唐揚げランチ』なるものを作る事にした。
この料理は、揚げ物好きな逢坂家が考案し、優歌と恋歌の母が生きていた時からあった料理である。主に料理を作る時間の無い時などに麗一もよく作る。
「……ふう」
揚げ物を終え、ソファに座って息を吐き出した麗一は、ふと気付く。
今度から3人前が、４人前になるのか……。
家族にカノンが追加されれば、当然食事を作る量も増える。
当たり前の事だが、いつもと違う食材の量に、麗一は違和感を感じずにはいられなかった。
そんな事をぼんやりと考えていると、リビングのドアが開いた。麗一は反射的に振り向く。
「……！！！」
途端に、麗一は顔を真っ赤にしてソファから転げ落ちた。
それもその筈、そこにいたのは入浴を終え、よりにもよって全裸に近い状態でドアの近くに立っているカノンだった。

濡れたままのその肢体は、幼い身体付きながらも艶めかしい色気を持っており、じっくり見ようものなら危ない何かに目覚めてしまいそうな、なんだかよくわからないパワーのような物が――――って、僕は何を考えているんだ！？
麗一は、倒れながらも脳内で補完している自分を恥ずかしく思った。
「麗一さん、お風呂から出ました。……麗一さん？」
「……！！」
立ち上がった麗一は、目を覆い隠して壁に向かって指を差し、パクパクと口を開閉させている。
何かを伝えたい。それは解かるのだが、カノンはそれ以上理解できなかった。
しばらくして麗一は、何とか声を絞り出し、こう伝えた。（と言っても、呂律が回っていなかったのだが）
「……バ、バスタオル、出てる、筈、なん、だけど、さ、あ、あれで、か、身体を、拭いて、できれば前を……か、隠して来て、くれないかい？」
「……あ」
ここでカノンは、なぜ麗一が慌てふためいているのか、その理由が解かった。
「す、すみません。それ、取ってきます……」
カノンは、顔を真っ赤にして、再び風呂場へと戻っていった。

しばらくして、バスタオルを身体に巻いたカノンが、リビングへと入って来た。
カノンは、そのまま無言で歩いて来て、ソファに座っている麗一の隣へと腰を掛ける。
そして、カノンが口を開いた。
「……すみません。あのようなはしたない所をお見せしてしまって……」
「いや、あれは……僕も悪かった。お風呂から出た後の事を言って

無かったし……」
麗一は、カノンに謝り返した。これは、事故とはいえ彼女の全裸を見てしまった麗一なりの反省の意の表れだった。
それに対して、カノンは「そんな事は無い」と言う。そして、一言付け加えた。
「……麗一さんって、お優しいんですね」
カノンは、一瞬どきりとするような笑みを浮かべた。
「あ……ありがと、ぅ」
引き攣った喉から声を出す麗一。語尾が吊り上ったのは気のせいではないだろう。
「……まあ、いいや。それよりも、さ、これ、着替えだから。取り敢えず、これに着替えて。僕は自分の部屋へ行ってるから。終わったら呼んでね。そしたら、一緒にご飯を食べに行こう」
麗一はこれ以上アレを引きずるのはゴメンだとばかりに話題を逸らす。
「はい」
「……じゃあ、ね」
麗一は、それだけ告げると、2階の自分の部屋へと移動した。

程無くして、麗一の部屋のドアがコンコンと鳴る。
麗一がドアを開けると、ドアの前にはカノンがちょこんと立っていた。
カノンが着ている服は、優歌が昔作ったという、コスプレ用のワンピースだ。本来は優歌が着るために作ったらしいのだが、これを着ているアニメのキャラと同じ体格の人が着れるように作ってしまったため、誰も着る事ができずにお蔵入りとなった代物らしい。
『熱中している時に間違えると、そのままノンストップで作っちゃうの……そーゆうものなのよお……』
昔、泣きながら机に突っ伏していた優歌を思い出した麗一だった。
しかしまあ、良く似合っているなあ。麗一は感心した。

何よりも、カノンが銀髪と言うのもあるからだろうか。白色のワンピースは目移りしそうな程に眩しかった。
以上、考察終了。考えを振り払い、麗一はカノンに確認する。
「あ～……着替えは、終わったの？」
「あ、あの……」
カノンは、聞かれてそれとなくもじもじする。
「えっと……どうしたの？」
「……あの、麗一さん……」
カノンは、隠して持っていた物を、気恥ずかしそうに取り出す。
それは、カノンの着替えとして渡された一式の中に入っていた下着、ブラジャーだった。「え？」と、いきなり下着を見せられて、僅かに赤面して困惑する麗一に、カノンは言った。
「こ、これ、胸当て……なんですけど……付けていると、むずむずして……痒くなっちゃって……その、外してしまいたいんですけど……いいですか？」
「……あ～」
困った。
麗一は、同居人の洗衣服の洗濯で下着には慣れているとはいえ、こういうケースは初めてだった。
「……と、取り敢えず、僕から姉さんに返しておくよ」
「助かります……」
下着を受け取った麗一は、カノンに先に玄関で待っているように言うと、ゆっくりと階段を下りて行き、溜息を吐いた。

「……それじゃあ行こうか。カノン、ちょっとこれを持ってくれないかい？」
「……はい」
麗一は、家を出る準備を済ませた後、唐揚げの入った籠をカノンに持たせた。
「……これは？」

「ああ、それかい？それはね、唐揚げって言う料理だよ」
カノンは、唐揚げを見るのは初めてだった。質問された麗一は、扉に鍵を掛けながら、問い掛けに答える。
「カラアゲ……？」
「ふふっ、美味しそうでしょ？」
「……はい」
「1つなら、食べてもいいよ」
「……本当ですか？」
「うん」
カノンは、麗一に言われた通り、食べようとして唐揚げを1つ摘まもうとした。
湯気を立てている唐揚げは、やはりまだ熱く、ちょんと触ったカノンは「熱っ」と言って、直ぐに手を引っ込めてしまった。
「あ、大丈夫？火傷しなかった？」
「大丈夫です」
麗一が聞いてくる。カノンは直ぐに答えた。
「良かった。じゃあね……」
そう言うと麗一は、唐揚げを1つ摘まむ。
熱さを我慢し、そのままそれをカノンの前へ持って行った。
「はい、カノン」
「……？」
差し出された唐揚げを見て、カノンは何をしていいのか、直ぐには分からなかった。
一瞬考えた後、カノンは解答を導き出す。
「……口を開ければいいんですか？」
「そうだよ。はい、あ～ん」
「あ～ん……？」
カノンは首を傾げる。すかさず麗一が補足した。
「誰かに食べ物を食べさせる時は、大体そう言うんだよ」
「……なるほど」

一応の納得はしたようだ。カノンは、口を開けて麗一の持つ唐揚げを食べた。はふはふと言いながら唐揚げを飲み込む。
「……！」
「熱かったかな？」
「……熱いですよ。でも、美味しかったです。気に入りました」
心なしか嬉しそうだ。お世辞ではなく、本当に気に入ったらしい。
「そっか。それは良かったよ。もっと食べたいかい？」
「……はい」
「でも、皆で食べた方が美味しいよ」
「……そうですね」
「それじゃあ、行こうか」
「はい」
そう言って、２人は洋菓子店『ｒａｉｎｂｏｗ』まで歩いたのだった。

「ふにゃ～！腹いっぱい～……」
夕食の終わった優歌は、ソファへと飛び込む。
「すぐ寝ると太っちゃうわよ、お姉ちゃん……」
「はうう！！そうだったぁ！お姉ちゃんダイエットしてたんだったぁ、ううう、結構食べちゃったなあ……」
恋歌の言葉でショックを受けた優歌は、お腹のあたりをさする。
「え～っと……一応、カロリー控えめな油で揚げたから、大丈夫かとは思いますよ……？」
「ホントぉ！？麗ちゃん、気が利くゥ～！」
皿洗いをしながらの麗一の一言で、しょげていた優歌がにぱっと笑顔になる。
それにしても、お皿くらい洗ってくれてもいいのに……。
優歌の綺麗な笑顔を眺めながら、麗一は思った。
「……ごちそうさま」
カノンが箸を置く。それを待っていたかのように、優歌が話しか

けた。
「あ、ねえねえ、カノンちゃん。寝る時は、麗ちゃん家とココ、どっちで寝たい？」
「え……」
「カノンちゃんの好きな方でいいよ～」
ニカニカと笑いながら言う優歌だったが、優歌は元々が小さい娘が好きなのだ。夜な夜な優歌がカノンに対して、とんでもないイタズラをするのではないか。と麗一は不安になる。
そう言えば、カノンって、今ブラジャーを付けてないんだっけ。
……危うい。麗一は危惧した。
頼むから自分の家を選んでくれ。麗一はそう思うのだが……
「……」
麗一の心を見透かしているかのような、そして何だか違う解釈の仕方をしたような、そんな恋歌の視線が、麗一に集中砲火を食らわせる。
「……何さ、恋歌」
「……べっつにぃ」
ぷいっとそっぽを向かれた。どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。……なぜ？
麗一は訳が分からなかった。
「えっと……」
「別に、迷わなくってもいいのよ～？カノンちゃん」
「そ、それじゃあ……麗一さんの方で」
心なしか弱い声で、カノンは言った。
「えええ！？」
それに食い付く恋歌。
「……どうしてよ」
恋歌は、ほんの少し威圧感を滲ませた声で問う。それに、カノンは答えた。
「……いずれにせよこの世界には、直ぐには彼らは攻めて来ないと

思います。まだ猶予があるという事です。ですが、これはあくまで仮説に過ぎません。もしかしたら、明日攻めて来るかも知れない。そんな時に、唯一の防御手段である機体を動かせる私たちが一緒にいなければ、直ぐには出撃できません。ですから、できる限り麗一さんとは一緒にいたんです。」

「ああ、なるほどね」

謎が解けたぞ。と言わんばかりの表情でポンと手を置く恋歌。

「……むう、それなら、仕方無いかなあ」

なぜか残念そうに呟いた後、優歌も同意の意思を示した。

「うううう……残念だなぁ……」

そう言って、涙目で俯く優歌。

そんな顔をされると、こっちが俯きたくなって来るよ。麗一は思った。

という事は、優歌はさっき麗一の考えた『とんでもないイタズラ』を仕掛けるつもりだったらしい。回避ができて何よりだ。

「それじゃあ姉さん、恋歌、僕はもう帰るね」

食器洗いを終えた麗一は、話も程々に帰る準備をする。

「え、ちょ……」

「あ……待って下さい、麗一さん」

なぜか麗一を引き留めようとする恋歌だったが、その声はカノンの声とかぶさってしまった。

釣られるようにカノンも、玄関へと向かう麗一に付いて行く。

「それじゃ、また明日ね」

「……また明日」

優歌と恋歌に別れを告げて、2人は家へと戻って行った。

「心配なの？恋歌ちゃん」

麗一とカノンが去った後、優歌は恋歌に話しかけてきた。

「うん……まさか、そんな事は無いと思うけど……ね」

恋歌は、麗一とカノンが2人きりになる事を快く思っていなかった。
もしかしたら、麗一が夜な夜な、カノンにイタズラするかも……
……などという考えがぐるぐると恋歌の頭の中に浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返していた。その『イタズラ』の具体的な描写は、はしたないので考えない。あくまでも表面上、概念上の考察だ。
「大丈夫よ」
そんな恋歌の気持ちを知ってか知らずか、優歌は肩に手を置き、優しく諭す。
「麗ちゃんは、いつだって誰かの気持ちを考えて動いていたわ。そこの所は、恋歌ちゃんだって分かってるでしょ？」
「……うん」
「だったら、大丈夫よ。麗ちゃんを信じなさい」
力強く優歌は言った。たまに優歌はこんな事を言ったりするのだ。そして、そんなときの優歌が言ってる事は、大体間違った事は無かった。
うん。と、恋歌は優歌に返事を返して、思った。
大丈夫。麗一はそんな奴じゃない。
……信じてみよう。麗一を。
だって、あたしは……

さて、どうしたものか……。
所変わって、ここは御咲麗一の家である。その家の中で、麗一は自分のベッドを前に立ち尽くしていた。
麗一自身も入浴を終え、明日の用意も完了、後は寝るだけだ。
しかし――――
今日から、寝るのは麗一だけではない。もう1人、カノンがいるのだ。
だが、麗一の家にはベッドが1つしかない。

つまり、1人は床で寝る羽目になるのだ。
「あの……私、床で寝ましょうか？」
カノンは黙り込んでいる麗一に進言する。麗一は驚き、首を横に振った。
「へ？いやいやいや、そんな……」
「いいんです。私は、居候の身ですから……」
僕だって、居候みたいなものなんだけどね。
そんな気持ちを抱きつつ、麗一はカノンに言う。
「そんな事、ないよ。僕だって、姉さんのお荷物みたいな物なんだ。それに……」
麗一は一呼吸置いて、言った。
「それに、君みたいな女の子を床で寝かすなんて……僕は我慢ならないよ」
「……」
カノンは、顔を上げる。その瞳には、麗一の顔が映っていた。
「だから、さ、僕が今度から床で寝るから、カノンはベッドで寝ていいよ」
「……麗一さん……」
カノンの声は相変わらずの無機質だったが、その表情は心なしか悲しそうに見えた。
「……麗一さん」
「何だい？」
麗一は振り向いて、カノンに尋ねる。
「あの……それなら……」
尋ねられたカノンは、もじりもじりと身体を動かした後、麗一の度肝を抜く一言を言い放った。
「……一緒に……寝ませんか？」
時間が凍ったかに思えた。

「……え？」
麗一がその凍りついた空気に耐えられず声を発した瞬間、凍り付いていた時間は一気に沸騰を通り越して気化する。
「こ、これなら、お互いの意見が、通ると思います……」
「いやいやいやいや！それは、ちょっと……」
この娘は、今日何回ブッ飛んだ発言をしただろう。
麗一はそんな事を考えつつ、彼女の提案に否定的な意を示す。
だが、彼女は言ってのけた。
「……大丈夫です。だって、麗一さん、私をどうこうしようだなんて、そんなこと考えていないと思いますから」
「う、うん……そりゃあ、まあ、ね」
「……なら」
「いや、でも……」
「……麗一さん」
カノンは、麗一の発言を遮る様な形で、続けて言った。
「……私、ずうずうしいお願いをして、それを受け入れてもらった挙句、ここに住まう事になってしまったんです……だから、麗一さんには極力、迷惑を駆けたくないんです」
「う……」
このぶっ飛んだ発言には、彼女なりの思いやりがあった。
それを理解した麗一は結局、押し切られるような形でカノンと一緒に寝る事になった。
彼女の出した勇気を、無下にする訳にはいかなかったからだ。

「……大丈夫？狭く、ないかい？」
2人でベッドに横になった麗一は、カノンに尋ねる。
「だ……大丈夫、です……」
心なしかうわずった声で、カノンは答える。
初対面では全く気にせずにキスまでしてきたというのに、ここ数時間で羞恥という物を覚えたようだ。麗一はまともな感覚を身に付

けていたカノンに感謝に近い念を覚えた。
窓から差し込む月明かりが、部屋を照らす。その月明りでうっすらと見える天井の隅を、麗一はそれとなく眺めていた。
「……」
それきり、会話が続かない。続くものと言えば沈黙くらいだ。
……この沈黙にも、今日何回立ち会っただろうか。
「……あの、麗一さん……起きてますか？」
ふいに、カノンが話しかけた。
「……なんだい？」
麗一は態勢を変えずに、声だけで答えた。
「その……こんな事に巻き込んでしまって、本当にごめんなさい」
「……いきなりどうしたのさ」
「……ロボットに乗って戦えだなんて、普通は引き受けないと思います。……ですが、貴方は引き受けて下さった……。それは、嬉しいです。改めてお礼を言います……」
カノンはそこまで言うと、顔を上げて麗一を見据えた。
「……ですがこの行動は、貴方の日常生活の破滅を意味します」
カノンは会話を少し切って、また続けた。
「……どうして麗一さんは、こんな事を引き受けたんですか？」
精一杯の謝罪と共に、麗一の選択に対する疑問を、カノンは言う。
「はは、そう考えればそうだねぇ……」
それに対する麗一の第一声は、呑気な物だった。ふっと笑う麗一を見て、カノンは小首を傾げる。
「……でも、それって、僕にしかできない事なんだろう？それなら、僕がやるしかないじゃないか。それにね……」
カノンはと同じように少し会話を切って、麗一は話した。
「僕は……生きていた証が欲しいんだ」
「……証？」
「そうさ……」
すっと、麗一の眼が細くなる。どこか、とてつもなく遠い場所を

眺めているような、そんな眼だ。
「僕……そんなに目立つ方じゃない。ふっと消えてしまいそうな存在だ。いつ死んでしまうかも分からない。そして、死んだら忘れ去られてしまう……それはちょっと、悲しいなって」
麗一は続ける。
「だから僕は、世界に名前を残しておきたいんだ」
「それが……貴方の戦う理由……？」
カノンは、ポツリと呟いた。それに、麗一は「うん」と頷く。
単純すぎやしないか。カノンは口にこそ出さなかったがそう思った。
が、すぐに思い直す。
この麗一という男性は、一言で言えば優しい。
それ故に単純な動機で人を助けようとする。
この決断もその一環だとするならば――――
「話が長くなっちゃったね。ごめん」
「いえ、話題を振ったのは私ですから……」
麗一は、1人長く語ったことを謝罪した。カノンは、構想を半ば中断させると、自分のせいでもあると言い首を横に振る。
「ふふっ、カノンは優しいんだね」
麗一はそう言って、カノンの頭を撫でる。さらさらとした銀髪が麗一の掌をくすぐった。
こんな優しい人に、優しいと言われるなんて。
そう思ったせいもあってか、カノンはくすぐったそうにもじもじして、上目づかいで麗一を見つめた。
「……もう寝ようか。おやすみ。カノン」
「……はい、おやすみなさい……」
そう言って、2人は横になる。もうそれ以上、喋る事は無かった。

the prism #1 上（後書き）

どうも、七篠名無です。
まずは時間を割いてこの小説を閲覧して下さった事に、お礼申し上げたいと思います。
次に、弁解を。
閲覧して下さった皆様なら分かるかと思いますが、この物語、これ１つでは最後まで書かれておりません。
これに関しましては、小説本編は４００００文字以内で書け、という制約がございまして、１話の段階で５００００文字を超えてしまった本編は2分割してＵＰしなければならなくなったからという事情があったので実行した次第でございます。ご了承ください。
ついでに言いますと、一応のチェックはしたのですが、いまだに誤植や理解しにくい文面などが多々あると思います。そればかりはどうかお目こぼしをば……。
さて、次はついに起動兵器がそのヴェールを脱ぎます。ロボット目当てで来た方々には申し訳ない事態となってしまいましたが、どうか寛大な心を持ってお許しいただければ幸いです。
それでは、後編でお会いしましょう。

ｂｙ　七篠名無

ｔｈｅ　ｐｒｉｓｍ　#１　下（前書き）

どうも、七篠名無です。
「ロボが出ないなんてやってられないぜ！」などと言って前編をスキップしてしまった方も多いかと思われますが、そんな中、律儀にも前編を読んで後編にたどり着いた方々には熱い感激を……
さて、少し本編の話を。
後編になってやっと出てくるロボットなのですが、はっきり言ってチートです。自分が考えておいて何をほざくか、とお思いの方もいるでしょう。
ですが、読めばわかると思います。私ですら誤植のチェックの為に読み返して分かってしまいました。こりゃ酷いモンを創ってしまったな、と。
なんというか、某冥王様みたいな……
おっと、リリカルちゃいますぜ旦那、な○はは（たしか）魔王でっせ。
おっと、ネタバレらしいネタバレはここまで。続きは本編で。
それではｔｈｅ　ｐｒｉｓｍ後編をお楽しみください。

the prism #1 下

夢を見た。
麗一は1人、道路の端に立っていた。周りには建物以外、何も無い。
目の前には、5歳程の小さい男の子が1人。
俯いていたその子に、麗一はたまらず声を掛けた。
「どうしたの？」
その子は、顔を上げる。今にも泣きだしそうな表情だ。
「……お父さんと、お母さんが……死んじゃった……」
今にも零れそうな涙を健気に堪え、男の子は答えた。
麗一は、何も言えなかった。
男の子は、言葉を繋げる。
「……でもね、僕、お友達の家に今度から住むんだ」
「良かったじゃないか」
「でも……迷惑かけちゃうから、あまり、一緒にいたくないんだ」
「そんな事、無いと思うけどなぁ」
「……独りぼっちなんだ。僕は……」
その小さい男の子は、1人うずくまる。そして、さめざめと泣きだした。
「ううう……うう……ひぐっ……うえええん……」
「よし、よし」
麗一は、男の子が泣き止むまで、ずっと頭をさすってあげた。
やがて泣き止んで、静かになった男の子は、麗一に礼を言う。
「……ありがとう。お兄ちゃん」
「うん。どういたしまして」
麗一はにこやかに笑って返す。再び麗一が目を開けた時、その男の子は麗一に言った。
「お兄ちゃん……僕、もう独りぼっちじゃ、無いよね？」

「うん、君には、そのお友達が付いてる。1人じゃないよ」
ここで、ふいに後ろから、声が聞こえた。
「お～い、麗ちゃ～ん」
どこかで聞いた声だ。麗一は思った。
「あ、おばさんだ！」
男の子は言う。その『おばさん』もこっちに気付いたのか、手招きして男の子を誘う。
麗一もその人を見たが、逆光で顔はよく見えない。
「お兄ちゃん、またね！」
「うん、また。会えるかどうかは分からないけど」
「会えるよ」
男の子は、笑顔で言った。その笑顔は、太陽のように眩しかった―

「んん……」
麗一は目を覚ます。
なぜか不思議と懐かしさを感じさせられるような夢を見た気がした。回想にふけっていると、鼻先に何かくすぐったいものを感じた。鼻先を意識すると、途端にフローラルないい匂いが麗一の鼻孔を擽る。大輪を咲かせし向日葵の花のような、そんな感じの匂いだ。下を向くと、視界が銀色に染まる。それがカノンの髪である事を理解するのに、数秒かかった。
「……うええ！？」
麗一は、素っ頓狂な声を上げる。多分、麗一が目覚めての第一声で、ここまで間抜けな声を出したのはこれが初めてだろう。
カノンの髪が下を向いたら見えた。という事は、麗一がカノンを前でしっかりと抱き留めている態勢な訳である。まだそういった類の経験が無い麗一が、驚かない訳が無い。
カノンは、まだすやすやと眠っている。
麗一は、起さないように布団から這い出て、そっと毛布を掛けて

やると、そそくさと部屋を出て行った。

今日は土曜日。学校はお休みだ。

しかし、麗一の忙しい朝は変わらない。それどころか、カノンという新たな同居人も交え、一層こなす仕事が増えたようにも感じられる（というか実際増えている）。

はあ、と、肺の空気をすべて吐き出すかのような大きな溜息を吐き、麗一は逢坂家のソファへと倒れ込んだ。

順を追って彼の行動を書き連ねると、いつもの朝と同じように、彼は顔を洗い、着替え、ゴミを集積所へ捨て、それから朝食を作りに逢坂家へ行こうとした所でカノンの存在に気付き、彼女を起こし、顔を洗わせ、替えの服を着せようとしたが無かったのでその服装のままカノンを連れて逢坂家へ行き、逢坂家で4人分の朝食を作り、優歌と恋歌を起こしに行き、朝食を始め、食べ終わった皿を洗い、カノンの着替えを受け取り、カノンを着替えさせて今に至るわけなのだが――――

疲れた。

今の彼の心の中を満たす、たった1つの感情だ。

「そうですか……」

カノンはそう言うと、麗一の隣へと座る。

「あの麺類、確かカルボナーラ、と言いましたね。とても美味しかったですよ」

「それは良かったよ」

「ふふっ……」

ふっと、カノンが笑う。優歌の笑顔のようのその笑みに、麗一は気圧されかける。

……笑顔の似合う女性って、不思議な力でもあるんだろうか。

麗一は真剣にそう思った。

「麗一ィ！！」

丁度その時、リビングでくつろいでいた恋歌が、大声で麗一を呼

ぶ。
「どうしたの！？」
「……麗一……アレ……」
何事かと思い、麗一が恋歌の所まで行くと、恋歌はテレビを指差して口をパクパクさせていた。
麗一は、恋歌の指差したテレビの内容を見る。
『……繰り返しお伝え致します。小笠原諸島を突如包み込んだ光について速報が入ってきました。繰り返します……』
このキャスターの一言に、麗一は背筋に氷柱が打ち込まれたかのような、冷たい感覚を覚えた。
「カ、カノン！これって……！」
「はい。……まさか、もう来るとは……」
カノンが言った、異世界の侵略者は、もうこの世界を攻撃してきたのだ。現状を把握しつつ、麗一はニュースを見続ける。
『……新たな情報が入って参りました。光線としか表現できない光の放出によって、小笠原諸島のほぼ全域は壊滅状態になったようです。現在、国会は臨時集会を開き、この未曾有の事態にどう対応するのか、検討を……』
「……この国の政府は、比較的早めな対応ですね」
「で、でも、太刀打ちできないんでしょ！？」
カノンの冷めた反応に、恋歌が興奮した様子で問う。
「はい。そうです」
「じ、じゃあ、今すぐ行かないといけないんじゃ……」
「当たり前です」
麗一の問いに返答した後、カノンは麗一に向き直す。
そして、呟いた。
「麗一さん……覚悟の程は」
「……それは、怖いさ。できれば戦いたくない……だけど、僕がやらなきゃ、皆……無くなってしまうんだろう？なら、やってやる」
麗一は拳を握りしめ、続けて言った。

「……僕の気持ちは、変わってないよ」
「分かりました。……それでは、行きましょう」
麗一の度胸を試した後、カノンは麗一に手を差し出す。
「麗一さん、手を握って下さい。ワープしますので」
「え？……あ、うん。……分かった」
麗一は、覚悟を決めるかのように深呼吸した後、カノンの手を握った。その直後、２人の身体が光に包まれ始める。
「……恋歌」
「ふえっ！？……何？」
もう、その身体の半分は光に包まれて、見えなくなっている麗一が、恋歌に話しかけた。恋歌は、物怖じしつつも問い掛けに反応する。
「姉さんに、行ってくるって伝えといて」
「……うん、分かった」
「……じゃあ」
「あ、待って、麗一！」
２人の体が透け始めた。恋歌は焦りの余り早口になりながらも、麗一に一言告げた。
「……絶対に、帰って来なさいよね」
麗一には、絶対死んでほしくない。だが、面と向かって言うのは恥ずかしい。そんな恋歌が出した、精一杯のエールだった。
麗一は、恋歌が自分の身を案ずる発言をした事に驚きつつも、ふっとはにかんで恋歌に言葉を返した。
「……うん。約束する」
麗一が恋歌にそう告げた直後、一際強く麗一とカノンの身体が光ったかと思った次の瞬間、２人は消えていた。
ポツンと1人、さっきまで3人いた部屋に、恋歌のみが残された。
「……もう、麗一ったら……」
さっきの、ほんの一瞬のはにかんだ顔。その顔が恋歌の目に焼き付いて離れない。

……麗一は、大丈夫なんだろうか。
いや、麗一は必ず、帰ってくる筈。
なんたって、あいつは約束を破れない奴だから。
「……何たって、あたしが約束したんだからね」
胸に手を当て、恋歌は、大切な人のために武運を祈った。

麗一は、光に飲み込まれてから、真っ黒な空間に出た。
「……カノン、ここはどこだい？」
「……ゼロにして無限の空間……といった所でしょうか」
会話をする麗一とカノンの身体は、空中に浮いていた……否、空中に立っていた。
まるでそこが地面であるかのように、空中を歩いていた。麗一は、違和感を感じつつも麗一はカノンに付いて行く。
そうして歩いて行くうちに、前方に巨大な何かが見え始めた。
「……なっ！！」
思わず、麗一は叫びそうになった。何とかして言葉を飲み込むも、その驚きは隠せなかった。
５０ｍはあるであろうその機体は、他に何も無い空間に微動だにせず存在した。
目も鼻も口も無い、のっぺらぼうのような、無機質な頭部のデザイン。しかしながら圧倒的な存在感があった。
周りは黒いというのに、これは白と銀の塗装（若干黒いラインもあるが）である。そのせいもあってか、目移りしそうな迫力だった。
心臓を掴まれるような圧迫感を覚え、麗一は見入った。
「これが、私と麗一さんの機体……名を『アヴソリュート』と言います」
「アヴソリュート……『絶対』か」
麗一の言葉に、カノンはその名の通りの絶対的な力があると言う。
「この機体は、次元構造に干渉し、空間を操る機能があります。正式名称は、『次元境界干渉装置』です。私たちは短縮して『Ｄ（ディメンション）シス

テム』なんて洒落た名前で呼んでいますが」
「そっか……凄いんだな」
麗一はカノンの説明を聞いて、その科学力に感心していた。
自分たちの世界では、まだ等身大のロボットの2足歩行すらおぼつかないというのに、こんな大きいロボットを造ってしまえるなんて。
麗一が感心している間も、カノンの説明は続く。
「この機体の間接部位には、電圧によって硬度が変化する液体、『電磁流体』が使われています。それによって、この重量でありながらも滑らかな動きが可能となっています。」
「……」
「さらに、攻撃兵装には物質とは正反対の物質……『反物質（アンチ・マター）』を使用しています。これは、物質とぶつかれば、その物質を中和、存在を消滅させてしまいます。……鹿児島県北部を壊滅させたのは、恐らくこの原理を使用した広域破壊兵器の仕業でしょう。」
「反物質……」
そんな物を使ってまで、地球を侵略したいのか。
麗一は、心のどこかでカノンの仲間に対する嫌悪感を抱いた。
「……この機体にも、反物質による攻撃兵装が取り付けてあります。下部に近接エッジを取り付けた『反物質砲（アンチ・マター・ランチャー）』が腕部にそれぞれ2丁ずつと、大出力で敵機体を無力化し、広範囲の破壊も可能な『大出力反物質砲（アンチ・マター・カノン）』が1門、兵装として装備してあります。そして、背部にはこれらの武器の反動を相殺する高出力のブラスター・ユニットが備え付けられています。機体の稼働エネルギーは、外部の大気を機体内部に取り入れ、物質元素の改変作業をしてエネルギーに変換します。ですので、事実上エネルギーは無限大です」
「……」
「……どうかしました？」
ぽかんとした表情で絶句している麗一に、カノンが話しかける。
「……あ、いや……考えていた『機体』っていうのが、そこまで凄いとは思わなくってさ……」

麗一は、素直に思っている事を口にした。稼働エネルギーは無限大、武器は物質を消滅させる使用、５０ｍ以上はあろうその巨体―

全ての面において、麗一の想像を上回っていた。

「……麗一さん、私たちの科学力、侮ってもらっては困ります」

「ま、そうだよね……世界超えられるもんね……」

麗一は、頭をポリポリと掻いて、肯定した。

「……さて、もう無駄話をしている時間はありませんね。そろそろ乗りましょう」

「……分かった。……さて、遂にこの時が来ちゃったか……って、あ！カ、カノン！」

「どうしました？」

ここにきて、麗一は大変な事に気付いた。飛んできたカノンに、麗一は言う。

「……操縦方法、知らないんだけど……」

「ああ……」

カノンは、麗一と比べると殆ど、いや、全くもって驚いていなかった。余裕の表情を持って、麗一に言う。

「それでしたら、問題ありません。私の方から麗一さんの脳に直接操縦マニュアルを植え付けておきますので」

「……あ、そうなの」

焦りながらカノンを呼んだ自分が急に愚かしく思えた。

……全く、無知っていうのは、時として災難だよな……。

ソクラテスという大昔の学者の言葉に、『無知は罪である』という物があるのをふと思い出した。が、今は考える必要はないだろう。麗一はカノンのいう事に耳を傾けた。

「ちょっと待って下さい……現在、麗一さんの搭乗席のロックを外しています」

程無くして、２人の乗る機体『アヴソリュート』の胸部あたりから、バシュッ、という音と共が聞こえた。

「麗一さんの搭乗口は、機体胸部に内蔵されている球体です。私は、頭部の方の制御用搭乗口へワープされますので、ここでお別れです」
「え！？嘘でしょ！？僕1人かい！？」
「いえ、通信はできますから、アドバイスは私の方から出します。安心してください」
「あ、そうなんだ……」
話している2人の身体が、光に包まれる。空間転移の前兆だ。「アヴソリュートが呼んでる」と、カノンがポツリと呟いた。
「……それでは麗一さん、ご武運を」
「うん。一緒に頑張ろう、カノン」
「はい……」
そう言って、二人は別々の所へと飛ばされる。
「……ハッ」
気付けば、麗一は機体の胸部にいた。
ここだけでもかなり広い。バスケットの試合ぐらいはできるのではなかろうか。それぐらいの広さだった。
後ろを向いてみると、下に穴が開いていて、どうやらそこが入口らしい。
「……何か、本格的なコックピットって感じがするなぁ……」
中をのぞいた麗一は、そう呟いていた。
ゲームセンターなどに置かれている戦闘機のセットなどとは全く違う、本格的な機器が備え付けられている。麗一はゴクリと喉を鳴らした。
中に入り、シートに腰掛け、丁度手を置く位置にあった、拳銃の持ち手のようなグリップを握る。
その時、キィンとした感じの音が脳に響き始めた。それと同時に、脳に届くこそばゆい感覚。例えるならば、何かが流れ込んで来るかのような感じだ。
あ、そう言えばカノンが言ってたな、脳に直接操縦マニュアルを送るとかなんとか。

しばらくして、脳に来る、流れるような感覚は途切れた。その頃には、もう麗一は機体の使い方が手に取るように解かるようになっていた。
麗一は、覚えたての知識で機体の状態を確認する。
「うん、各部正常、っと……」
一通りの機体の点検が終わった所で、通信回線が開かれた。カノンからだ。
『麗一さん、点検ご苦労様です。これから、敵機体出現位置の小笠原諸島へと機体を転送します。……大丈夫かと思いますが、気分が悪くなったら言ってください。稼働を中止しますので……』
「うん、分かったよ。……行こう。カノン」
『……はい』
次の瞬間、周りの空間を巻き込んで、2人を乗せた白銀の巨人は姿を消した。
残ったのは、黒い空間。それのみである――――

3

その頃、小笠原諸島。
そこには、建物があった。森があった。山があった。そして、何よりも人がいた。
今は、何も無い。
まるで、そこの空間ごと齧り取られたかのように抉られている。
今から数十分前の事だ。
その上空に、オレンジ色の人型の起動兵器が突如出現。
その機体から放出された、眩いばかりの光の奔流。
これによって、かつてそこにあったものは、全て消えた。
町も、山も、人も、何もかも。残ったものは、その機体自身と、隕石でも落下したかのような巨大なクレーターのみだ。

そして、現在――――――

「……」

小笠原諸島の大地に立つ、人型の起動兵器。

鮮やかなオレンジ色のその機体は、何も無い大地に咲く、鋼鉄の花の様であった。

その頭部。バイザーのような部分の奥に、1人の女性が跪いている。

機体と同じような鮮やかな色の髪を持っているその女性は、精神統一をしているのか、跪いたままピクリともしない。だが、起動兵器の瞳の部分から見える景色を凛とした目線で見つめている。

「……」

終始無言だ。

しかし、何も感じていない訳では無い。その瞳は、好戦的な輝きを湛えていて、獲物を今か今かと待ち構えているような、期待感や獰猛な眼差しを孕んでいた。

ふいに、その女性の周りに、接近警報と書かれた、空間投影式パネルの表示が出る。

遂に来たか。とでも言わんばかりの勢いで、その女性は顔を上げる。

だが、データを更新してみれば、それはただの戦闘機だった。

女性は、溜息を吐き出す。どうやらお目当ての物では無かったようだ。

しかし彼女は、もうすぐこの星に降りたって8分が経つ。ちょうど退屈だと感じていたようだ。

「……少し、遊ばせてもらおうか」

そう呟くと、彼女は機体に命令を送る。

精神と機体をシンクロさせているので、考えるだけで機体は動く。

彼女の脳から発信された微弱な電波は、増幅されて、最終的に電磁流体に命令として送り込まれる。

それまで機体を支えるだけだったどす黒く固まったその流体は、電波が流れただけで、生き生きと命令通りに動き出す。
その機体は、空を飛び回る物――――日本から、アメリカ経由で命令を受けた、日本に駐留していたアメリカ軍の戦闘機に、踊るように襲いかかった。

「００から各機へ告ぐ、敵のデカ物が跳躍した！そのまま我々の編成のシッポを追いかけてきているぞ！最後尾の０８、詳細を報告せよ！」
『こちら０８！まこうにも追い付いてきやがります！各機散開を許可願います！繰り返します！各機散開を――――ぅうっ！！がああああ……』
「０８ッ！応答せよ！！０８ィッッ！！！」
『０７から００へ、０８の撃墜を確認！繰り返す！０８の……』
コールナンバー０７が、隊長の００へ、最後尾の撃墜を報告する。その報告の途中で、通信が途絶えた。
「……００から各機へ、旋回する」
そう００が告げた後、戦闘機軍は綺麗にターンした。下を眺めた００は、地面へと撃墜する０７の機体を眼下に捉えた。
『……０３より００へ、０７の撃墜を確認』
「００より全機へ、こちらも０７の撃墜を確認した……」
そう告げると、未だに最後尾の機体を追いかける、オレンジ色の巨人を忌々しそうに睨みつける。
政府からの出撃の命令で出撃したこの小隊だが、全員が全員、状況を全く掴めないでいた。

【小笠原諸島が閃光に包まれた。状況を確認し敵影が見えた場合、爆撃を許可する。】

これが与えられた命令だが、敵影が真後ろでは、爆撃もあったもの

ではない。というか、そもそも命令自体がどこかしらおかしいのだ。しかし、一介の軍兵に、作戦の立案理由やその背景が伝えられる事などはまず無い。そのような扱いには慣れていて、小隊全員は、敢えて口には出さなかった。
そのため、隊長をはじめこの小隊は、必然的に自分たちの頭で理由を考える事になる。
……あれは、一体何なんだ？
隊長がそう考える間にも、通信機からはノイズ交じりの悲痛な叫びが聞こえてくる。
『０５から００へ！０６がッ――――――ぐうッ！うわあああああ……』
『この野郎！バケモンが……なっ！！ぎゃあああああ……』
「落ち着け！００から各機へ！散開――――――」
『んなあっ！畜生ォおおおおお……』
「うるせえっ！！００から各機へ！今何人残っている！生きてんなら返事をしろォっ！」
隊長は、命令を全部言えなかった事に腹を立てつつも、残った仲間へ通信を送った。
「……」
おかしい。通信が帰って来ない。
理由は、考えるまでも無かった。ザアアアアア、と流れるノイズ音が全てを物語っていた。
「……」
機体背後に、オレンジの巨人が迫る。隊長は、散った仲間のために覚悟を決めた。
「……せめて、一矢報いるまでだ……」
そう言うと、隊長は上唇を軽く舐める。
その瞬間、戦闘機は急降下。アクロバティックさながらの動きだ。オレンジ色の起動兵器を操縦している女性も機体に命令を送り、戦闘機へと付いて行く。

叩き落とそうと急接近した時、その女性は目を見張った。
「うおおおおおおおおお！！！」
叫びながら戦闘機の機体を鋼鉄の巨人に向けると、戦闘機前部に備え付けてあるバルカン砲を連射する。
「くたばれぇえええええええ！！！」
バルカン砲の直撃を受けたオレンジの巨人。だが、砲弾が当たったところには、傷一つ見受けられない。
「な、なにィ！！」
隊長がそう叫んだ。その時、戦闘機はもの凄い衝撃に襲われる。戦闘機の羽を、巨人が思い切り殴りつけたのだ。
「っぐゥうううう！？」
片翼を失った戦闘機は地面に急降下する。人体には過酷すぎるGに見舞われて、隊長はどす黒い血を吐き出した。
「……ィ……ェス……キリ……ス……ト……」
喋るのも苦しい筈なのに、隊長は神の名前を呟く。そして、身体の前へ手で十字架を作り、最期の望みを呟いた。
「……オ……ォレ……を……天、国……ま、で……」
隊長が喋り終わり、目を瞑る。その直後、戦闘機は地面に叩きつけられて大破、炎上した。
その原形を留めていない戦闘機の上に、オレンジ色の巨人の足が乗る。ぐしゃり、と、スクラップになった戦闘機は情けない音を立てた。
「……この程度か」
暇潰しにすらならなかったのだろう。機体の搭乗者である女性は、鮮やかな髪をかき上げて、不満そうに息を漏らした。
その時、空間投影式パネルが何枚も彼女の周りに展開された。内容は、３００ｍ先に空間構造の変異を確認した。という物だった。
それの意味するものはというと。
「……来た」

彼女は、にやりと口元を歪ませると、そう言った。

小笠原諸島の空が、バチバチと音を立てて歪む。
景色は曲がり、黒くなってゆく。
やがて、黒い球体のような物体が、空へと現れた。
その球体は、内側から弾けた。
その中から、翼のようなユニットを広げた、白銀（はくぎん）の巨人が現れる。
先ほどの空間の歪みによってできた黒い球体とは、まるで正反対の色合いだ。
『……機体の転送、完了しました』
「ありがとう、カノン」
麗一はカノンに礼を告げた後、周りを見渡す。
「……これは、酷い……」
口から自然と感想が出た。
かつて、ここには建物があり、自然があり、人が生活していた。世に言う、『日常』という物がそこにあったのだろう。
今あるのは、黄土色の抉れた大地だけだ。そこにあったもの、全てが消えた。そういう事なのだろう。
『……これは、反物質攻撃の仕業です……』
通信機越しに、カノンの悲痛な声が届いた。
麗一は怒りと言うよりも、哀しみを感じた。
全てを消し去っての侵略。この光景は、かつて、日本に落ちた原子爆弾を連想させた。
あれのおかげで、広島と長崎は廃墟と化した。
しかし、ここには廃墟すら無い（・・・・・・）。
これが、反物質の力。ここに来る前、カノンが説明したそれがどれほど悍ましい物なのか、麗一は肌で感じた。
感傷にふけっていると、突然、数枚の空間投影式パネルが麗一に周りに展開される。いきなりだったので、麗一はびっくりした。気持ちを落ち着かせると、麗一は更新されたデータに目をやる。

内容は、３００ｍ先に機体反応。
なるほど、つまり、３００ｍ先に――――
「……って、えぇ！？」
やって来たばかりだというのに、もう敵と会うのか！？
麗一は、驚きを隠せないでいた。
『麗一さん……』
「うん……解かってる」
麗一は、前を向き直す。そこには、燃え盛る残骸から出る煙を背に、こちらを見据える鮮やかなオレンジ色の機体があった。
……綺麗だ。
麗一はそう思った。とても戦うための物とは思えない。中世ヨーロッパの館に飾られている、西洋甲冑を思わせられた。
『……橙色の『ヴァルキリー』と言う事は……』
カノンが、何か言いかけて、黙る。『ヴァルキリー』とは、相手が乗って来る機体の名前だそうだ。ここに転送される最中、カノンから聞いた。
それにしても、カノンの言いかけた事が気になる。麗一は通信をして、どうしたのか聞こうとした。
その途端、通信の回線が開かれた。カノンかな。と、思ったが違う。これは外部からのアクセスだ。つまり――――
『……私だ』
あの機体からの通信だ。音声と共に、搭乗者の顔も映し出される。そこには、カノンに似ているような、似ていないような、そんな顔を持つ人がいた。だけど、髪の色だけはカノンと全く異なっていた。
『……アランシア……』
カノンは、女性に向かって呟いた。どうやら、それが彼女の名前らしい。
『そこの男……貴様は誰だ？』
「え！？」
麗一は、敵機の搭乗者である女性――――アランシアに急に話

しかけられて、動揺した。
『？……何を怯えている、私は貴様に自己紹介を求めているだけだぞ？』
「え？ああ、ぼ、僕は……御咲麗一」
『ふん、そうか……貴様が主の……』
『アランシア、単刀直入に聞きますが……何が目的です？』
アランシアが何かを言おうとしたが、カノンの言葉で遮られた。
アランシアは、カノンの説明に答える。
『目的だと？……ふっ、笑わせるな。貴様自身もよく分かっているだろう。その機体、アヴソリュートを返してもらう』
『お断りです』
もの凄いハッキリと断った。このカノンの強気な態度に、麗一は驚いた。
『……今から戻れば、主もお許しになろう。……早く機体から降りて、投降しろ』
カノンの反論に、アランシアの台詞の語尾が凍て付く。
『……嫌だ、と言ったら……？』
カノンは、さらに挑発をするかのような発言を続ける。これを見たアランシアは、大きな溜息を吐いた後、小さくかぶりを振った。
『そう言うならば、それは勿論――――――』
すう、と、息を吸った後、アランシアは言い放った。
『貴様等を殺してでも、ミッションを達成する』
刹那、麗一は凍て付いた殺気が背中を撫でるのを感じた。
ぞわぞわと、気味の悪い感触。背筋が震える。
『……交渉は決裂ですね』
『ああ、そのようだな。では……お手合わせ願おうか』
そう言うと、アランシアの方から回線を切られた。それと同時に、彼女の機体、オレンジの『ヴァルキリー』が動き出す。
『来ます、麗一さん』
「わ、分かってるさ！」

相手は、両刃の近接ナイフを抜いて急接近してきた。麗一は、反物質砲に取り付けられた近接エッジで対抗する。
ガキン、と、鋼鉄がぶつかる音が空に響き渡る。
こうして、２機の戦闘は始まった。

「くっ……」
数十分戦闘が続けられていた。
オレンジのヴァルキリーを駆る女性、アランシアが呻く。
白銀の機体――――――アヴソリュートは、近距離射撃戦闘を重視した兵装をしている。
それならば、射撃の隙を与えず急接近し、格闘戦で行動不能にする。彼女はそう考え、機体を動かしている。
だが、間合いを詰めようにも、詰める事ができない。
理由は単純明快。
「Ｄシステム（ディメンション）……」
呟いたアランシアは苛立ちを覚えつつも、間合いを詰めるべく、再度急接近を試みる。
アヴソリュートに乗っているのは素人だ。操縦の方法ならカノンの事だからどうにか教え込んだのだろう。しかし、経験が足りない。
ヴァルキリーは、あっという間に間合いを詰める。
そのままアランシアは、ヴァルキリーの刃渡り１０ｍのナイフをアヴソリュートの腹部に突き刺そうとする。しかしその刹那、アヴソリュートが消えた。
「くっ……」
何度失敗しただろうか。本日何度目かも分からない索敵をする。
結果、５００ｍ先に機体反応。
彼女は、ヴァルキリーを振り向かせる。動作が終了した時、機体の周りに反物質砲が撃ち込まれた。
「クソッ」
彼女は素早く機体に命令を送り、反物質で構築された砲弾を回避

する。
この砲弾は厄介だ。どんなに頑丈な物質でも、当たれば塵どころか、原子すら残さずに消し飛ばしてしまう。回避の際は、ミスは許されない。まさに極限の状態だ。
だが、そんな状態に置かれていても、アランシアの判断は曇らない。瞬間加速を用いた再度の急接近を試みる。
今度は横から攻め入り、ナイフによる切り上げを試みたのだが、またしても失敗。アヴソリュートはまたも機体を転送し、距離を取った。
アランシアは軽く舌打ちしてから索敵し、結果を見る。
結果、６００ｍ先。ヴァルキリーは振り向く。その先には白銀の機体があった。後ろからの逆光で、アヴソリュートが神々しく見える。
思うように攻められない。彼女は苛立ちを隠せないでいた。
だが、彼女はそれとはまた別の感情も抱いていた。戦闘を続けるにあたっての、うしろめたい気持ちが、そこにあった。
「……カノンめ、無茶をする……」
アランシアは呟く。それは、言葉通りの意味。
だが、回想に耽っている暇は無い。急接近が駄目なら、別の戦略を立てるしかない。アランシアは考える。
その間にも、アヴソリュートからの砲撃。
アランシアは冷静に状況を分析し、ヴァルキリーを動かす。砲弾を回避、成功。
砲弾を回避したその後、アランシアはある戦略を思いつく。
これならば、いけるかもしれない。アランシアはにっと笑った。
『はあ……はあ……はあ……』
通信機越しに、カノンが息を弾ませる。麗一はそれに気付き、カノンに声を掛ける。
「カノン、どうかしたの！？」

『い、いえ……大丈夫、です……』
全然、大丈夫じゃなさそうだ。
「カノン……」
『私には構わずに……大丈夫ですから』
「そ、そうかい……」
これ以上話すと、敵の行動の対処ができなさそうだ。麗一は前へ向き直ろうとした。
その直後、鉄が地面に叩きつけられる音。麗一は何事かと急いで前を向いた。
見えた物は、相手のヴァルキリーが両刃のナイフを捨てる光景だった。
そして、高性能センサーが拾った、敵機から発せられる、ガチャリガチャリと機械の駆動するような音。何事か、と麗一は眺める。
ヴァルキリーの背中に装備してあった何かの機械が動き出す。その何かが、巨大な太刀であるという事を理解するのに、数秒かかった。
最終的に腰元まで移動したそれを、オレンジの巨人はゆっくりと鞘から引き抜いた。
自身の機体の全長の半分程はあるであろう大太刀（おおだち）を、ヴァルキリーは悠々と構える。
その大太刀の鞘が、再びヴァルキリーの背中まで移動した直後、オレンジ色の巨人は、瞬間加速でアヴソリュートに詰め寄った。
「なっ！？危ない！！」
麗一はとっさの判断でブースターを稼働させ、その場から遠のいた。
着地したアヴソリュートを建て直し、麗一はヴァルキリーを見る。
「！？」
麗一は目を見張った。
敵機の背中に装備されていたのは、太刀だけではなかった。ガシャン、と音を立て両肩から現れた、妙に太く、長い銃口。それが、

こちらに向けられていた。
『……いけません、あれは、広域破壊――――』
カノンが説明しかけたその刹那、アヴソリュートは光芒に飲み込まれた。

小笠原諸島の、その大半を消し飛ばした反物質式広域破壊兵器。
再び放たれたその一撃は、情け容赦無く再び大地を抉り始める。

相手の機体が転送され、距離を取った所を広域破壊兵器で足止めする。

これが、アランシアの考え付いた新たな戦術だった。
だが、アランシアに与えられている任務は、『アヴソリュートとカノン・ブレスタの奪還』である。
そして、反物質は、生命の有無にかかわらず、触れた物体を消し去ってしまう。
そんなものを叩き込んだら、機体は原形を留めてないのでは？アランシアは立案の際、一考した。
だが、あちらは『Dシステム』を持っている。この一撃を防ぐ、もとい、弱体化させる事など簡単だろう。
そう思い、実行に移したのだが。
「……」
目の前で起こっている、この光――――反物質の大爆発。これを見ていると、本当に大
丈夫なのだろうかと、不安を掻きたてられる。
――――もし消えてしまったら、『あの方』は怒るだろうか。
アランシアは考える。
……カノン。
最も、あの方に愛されていた。
だが、逃げ出した。

主は、苦しんでおられた。
なぜだ。
なぜ……？
……？
私は、カノンに……嫉妬しているのか？
自分でも、解からない。
彼女の胸の内に、淀んだ何かが溜まる。
気持ちが悪い。アランシアはそう思った。誰か、この心に溜まった何かを吐き出させてくれ。
その時、ビーッ、というけたたましい音が鳴り響いた。いや、気付く前から鳴っていたのかもしれないが、今は置いておく。アランシアはパネルを見た。
「！！？」
展開された空中投影式パネルには、『敵影接近』と書いてある。
前を向くとそこには、爆発している反物質をかき分け、銃剣を解放して突撃してくるアヴソリュートの姿があった。
完全に油断した。
いや、それよりも。
あの威力の一撃が、足止めにすらなっていない！？
アランシアは驚愕の余り、機体を動かすのを忘れていた。
戦場では、私情に流されず、気を抜かず、冷静でいなくてはならない。それができなければ――――――――死ぬだけだ。

アランシアは、はっと我に返り機体を動かそうとしたが、遅かった。
ドシュッ、という生々しい音。腹部の電磁流体が、アヴソリュートの銃剣の近接エッジが突き刺さっていた。
それだけなら、まだ良かったのかもしれない。

銃剣のエッジが刺さっている。それの意味する者とは、つまり――

――

ズドン、と、妙に小気味の良い音が耳に伝わった。
反物質砲による零距離射撃。
銃口がピタリと隣接しているため、回避は不可能。最良の選択だ――
――アランシアは心の中で呻いた。
反物質砲の零距離射撃は強力だった。胴体を吹き飛ばされたヴァルキリーは、胸部から上が千切れ飛び、宙を舞う。
地面に残されたヴァルキリーの下半身からは、どす黒い電磁流体がブシャッと噴き出し、やがて残留した電流では形状を保てなくなったのか、瓦解した。
吹き飛ばされた胸部から上はというと、くるくると宙を舞い、地面に叩き付けられた。
「きゃぁあああああ！！」
中に乗っているアランシアは、叩き付けられた際の衝撃で悲鳴を上げた。
「ぐっ……ぐうう……っつう……」
アランシアは、呻きながら体勢を立て直す。その際に走る激痛。脇腹がぬめっとして、血生臭い。どこかしらにぶつけたのだろうか。額からも血が出ていた。
ヴィン、と、アヴソリュートから通信回線が繋がった。アランシアは、もはや執念のみで身体を動かし、通信に応答した。

『……ん……な、なん、だ……』
「え、わっ……だ、大丈夫……ですか？」
通信に応答したアランシアを見て、麗一は小さい悲鳴を上げた。
『……ふ、呆れる……な……自分で、やっておいて……大丈夫か、などとは……』
「あ、あの……」

全くもって笑えないジョークを返されて、麗一は困惑した。
それは、大丈夫には見えないけど……。
これは、僕が……僕がやってしまったんだよな……。
額から血を流して応答をする彼女を見て、麗一は自己嫌悪に走った。
『……カノン……なんだ？どうせ、お前が、回線を、開い……たんだ、ろ？』
息も絶え絶え、アランシアはカノンに話しかける。
『……はい』
カノンも、かつての仲間が血みどろになって悲しみを覚えたのか、心なしか声が小さいようにも聞こえた。
『……死に間際の言葉くらいは、取って置こうと思いまして』
『ふん……そう、か……』
カノンの問いに、吐血しながらもアランシアは苦笑する。
『死に間際の、言葉か……特に無いな』
『そう、ですか……』
カノンは、アランシアのそっけない返事に返した後、麗一にこう言った。
『麗一さん……彼女の機体に大出力反物質砲（アンチ・マター・カノン）を』
「えっ……？」
麗一は驚いた。
大出力反物質砲を撃て、という事はすなわち、アランシアを消滅させろと言っているのと同義だ。情け深い麗一だからこそ、戸惑った。
「な、何も、そこまでしなくたって……」
『いいや……するんだ……』
麗一の言葉に口を挟んだのは、以外にもアランシアだった。
「え、ちょ……どうしてですか！あなたの事なのに……」
『だからこそ、だ……』
声を荒げた麗一の講義に、アランシアは口を挟む。

その直後、アランシアは吐血した。どす黒い血が、アランシアの口から吐き出される。
「……うっ……」
麗一は、思わず顔を背けた。
『……なぜ消さねばならないのか、簡単に説明します』
カノンは、喋れないアランシアに代わって説明を始めた。
『私たちの兵器は、麗一さんも知っての通り、この世界の科学の何十年かは先の代物です。そんなものを残しておけば、どうなるか解かりますね？』
「……いつかは見つかるよ」
『はい、そうです。それによって、この世界の科学は著しく発展するでしょう……』
「それのどこが悪いのさ……」
『……様々な世界がある。という事は、この世界と何らかの密接な関係がある世界が存在するという事も否定できません。『密接に繋がっている世界』は、2つとも進み具合が均等です。どちらかの世界の科学や歴史などが飛び抜けているなどという事は、有り得ません。……ですが、もしも、外部からの接触によって、片方の世界の何かが著しく変化してしまった場合……どうなると思いますか？』
「えっ……」
麗一は、急な質問に戸惑った。すぐさま、カノンの問いかけを考える。
「……？……分からない……」
『……正解は、『両方の世界とも消滅する』だ……』
「って、アランシアさん！？」
思わぬ方から回答が来た。麗一は仰天する。
『……彼女の言う通りです』
「だから……だからって……」
麗一は息を飲み込んでから、叫ぶ。
「僕には、人を殺せないよ！！」

麗一は半泣き状態だった。
それは仕方が無い。純粋無垢な人間が、人を殺せと言われたらこうなるだろう。
だが、アランシアはそんな麗一に、きつい発言を浴びせる。
『……ふん、アマちゃんだな……』
「何……だって……？」
『その優しさが……時に人を傷つけるのだ……！』
「え……」
麗一は驚いた。アランシアが泣いていたのだ。
はっと、麗一は気付いた。
彼女は、僕を馬鹿にするために言っているんじゃない。
『私は……このことあそこには戻れん……皆に顔見せできないからな……負け犬として生きるよりは、ここで散った方が良い……！』
自分自身のために言っているんだ！
『さあ、少年……早く、私を消せっ！……ぐふうぅっ……！！』
アランシアは、またも吐血する。
ここで助けた所で、何かしらの治療をしても手遅れだと、目に見えて分かった。
『……麗一さん』
カノンからの通信。彼女は、分かり易い一言を呟いた。
『……早く、楽にしてあげて下さい……』
「……うっ」
『……がはっ……早く、しろォッ！！』
『麗一さん……』
「うっ……ううっ……うううう……」
麗一は、泣いていた。
余りの哀しさに、知らずのうちに涙がぽろぽろと溢れてくる。
「アランシア、さん……」
『泣くな、男だろ？……ぐっ……なんだ？』
麗一は、詰まりそうになりながらも、一言告げた。

「……ごめんなさい」
『……発射準備、完了です。トリガーをどうぞ』
カノンが、頃合を見計らって麗一に告げた。麗一は涙を拭いつつ軽く頷く。
『……カノン、私は……先に、逝って、くる……いつか会おう』
『……死に間際の言葉、あったじゃないですか』
『ふっ……そうだな。……さあ、少年、早く、私を……楽に……』
アランシアは、呼吸もできなくなっていた。息も絶え絶え、麗一に言う。
「ごめんなさい……」
麗一は、涙を溢しながらそう呟いた後、トリガーを引き絞った。

「麗ちゃん、遅いなあ……」
洋菓子店ｒａｉｎｂｏｗ。その運営者にして現役看板娘の優歌は、退屈そうに溜息を吐き出した。
市役所に行って来た理由。それは、カノンの住民票を提出しに行ったのだ。
優歌の嫌いな、長ったらしくて堅苦しい手続きも済ませ、晴れてカノンは正式な一家の一員になったのだ。
優歌本人が話したので、恋歌は既に知っている。
早く麗一にも教えてあげたい。優歌はそう思って待っているのだが。
「……はあ」
なかなか帰って来ない。客もいないので、はっきり言って暇なのだ。
……ゲームでもしちゃおっかな。
優歌はそう思い、携帯ゲーム機を取り出そうと自分のポケットに指を忍ばせた。麗一の「ダメですよ、勤務中は」という声が聞こえてきそうだった。
その時、店内にカランカランと小気味の良い音が響く。ドアに取

り付けた鈴が鳴ったのだ。すなわち、お客が来たという事になる。
「あっ、いらっしゃいませ～」
営業スマイルでもこうはいかない、とびっきりの笑顔で優歌はお客をもてなす。
「……」
来た客は、扉を丁寧にしめると、カウンターに寄ってきて、並べられているケーキを眺める。
客は男だ。１８０ｃｍ以上はあろうその全身を、上下ともに真っ黒な、ぶかっとした服で包んでいて、それがとても様になっていた。優歌はその男の表情を窺ったが、深くフードをかぶっているので分からなかった。
その男は、１分ほどケーキの棚を凝視した後、優歌に話しかけた。
「あの……この苺のショートケーキを１ホール欲しいんだが……」
「あ、は～い。かしこまりました～。２０００円になりま～す」
「２０００円か、分かった……」
そう言ってその男は、ポケットから１枚の黒いカードを取り出して、優歌に渡す。
「クレジットですね～。しばらくお待ちくださ～い。……はい、ど～ぞ！お気をつけてお持ち帰りくださ～い」
心から楽しんでいる様子で接客をする優歌。男は、その手から差し出されたケーキの箱を優しく受け取ると、フードを取った。
「あっ……」
優歌は、つい声を出してしまった。
そこには、とても優しそうな、かつ凛々しい顔があった。今テレビでやってる話題の俳優よりもイケメンである。
優歌は、自分が赤面しているのがはっきり分かった。
「……」
黒い男は、優歌の手を優しく取った。
包み込むような男の手の温もりが、優歌に伝わる。その温もりに酔いしれたかのように、優歌はポーッとしてしまった。

優歌の心臓が、ドキドキと早鐘のように動いている。
このままじゃ壊れちゃいそう。優歌はそう思った。
その感覚の中で、優歌の脳になぜか麗一が思い浮かんだ。
……なぜだろう。
似ている、と言われれば似ているかもしれない。優歌は再び男の表情を見てそう思った。
でも、どうして。全く同じって訳ではないのに。優歌は少なからず混乱していた。
「……」
男は、優歌の手を何も言わずに、しかし名残惜しそうに離すと、店のドアへとひるがえす。
カランカラン、と扉に付けられていた鈴が鳴る。
その扉から出て行こうとした男は、ふと、何か思い出したかのように振り向いて、こう言った。
「……また来ます」

カランカラン。

男が扉を閉め、出て行った時の鈴の音が、妙に耳に残った。
まるで、これから訪れるであろう幸福を知らせる福音のように。

4

「……ここは……？」
転移してきた麗一は、カノンに場所を尋ねた。
「……麗一さんのお家の、すぐ近くかと……」
そこまで言って、カノンは態勢を崩す。
「カノン！？大丈夫！？」
「くっ……す、すみません……」

かなり苦しそうだ。麗一は彼女を抱え上げた。
「……やはり、使い過ぎてしまいましたか……」
「え？」
その際に、カノンがポツリともらした一言を、麗一は聞き逃さなかった。
「……カノン、使い過ぎたって、何の事？」
「え？……いえ、何でもないです。」
「……もしかして、Ｄシステムの事……？」
「う……」
どうやら図星のようだ。
「もしかして、アレを使い過ぎたら、カノンはこうなっちゃうの？」
「……」
カノンは答えない。それは、麗一に黙っていた罪悪感からか、それとも、ただ単に触れられたくない話なのか。麗一は分からなかった。
「……ごめんね、カノン」
「え……」
麗一に謝られて、カノンは驚いた。
「こうなるの、知らなくって……僕、かなりソレに頼ってたんだよ……無理させてたんだね……僕が、もっと上手に戦えてたら……ごめん、カノン」
「い、いえ……私がきちんと言っていなかっただけですから……」
カノンは、麗一の非を否定した。
少し置いて、カノンは語りだした。
「……麗一さんの言うとおり、Ｄシステムを稼働させすぎると、私に負担がかかるんです」
「……どうして？」
「それは……」
カノンは一瞬、話すべきか戸惑い、顔を伏せた。だが、すぐに顔を上げた。

決意に満ちた表情のカノンは、麗一に告げた。
「……それは、私がアヴソリュートの、一部だから……です……」
「え？……どういう、事？」
「……私は、Dシステムを発動させるためのカギ……いわゆる、生体部品なんです……」
「！！」
麗一は驚愕した。
「そのためだけに作られて、生かされていた存在……それが私です」
「そ、そんな……」
「私は、麗一さんに会って最初に言ってある筈です。あの台詞の意味は、そういう事です」
「あ……」
そういえば言っていた。『自分は人間かどうかすら危うい存在』だとか、『つまりは生きたコンピューター』だとか。
それでも、僕は――――
「……僕も、最初に言ったよ。だからって、君が人間じゃないなんて、言わせないって」
「え……」
「僕は……決めた。もう、君に無茶な事をさせたくない。自分なりに頑張るよ。だから、さ……そんな事、言わないでよ、カノン……」
「れ……麗、一……さん……」
麗一の名を告げるカノンの瞳から、大粒の涙が零れ落ちる。それから、ぷつっと何かが切れたかのように、彼女は目を瞑り、ぐでっとした。
気絶したのかと麗一は不安になったが、そうではなかった。単に疲れただけだったのか、すやすやとカノンは寝息を立て始めた。そんな姿を見ていると、こちらまで眠たくなってきた。自分も、かなりの疲労が溜まっているのだろう。
だが、路上で寝る訳にはいかない。麗一は、気力を振り絞って歩く事にした。幸いな事に、麗一の家はすぐそこだ。

麗一はカノンを抱えたまま、器用にドアを開けて家へと入った。
……そう言えば、初めて会った時もこんな感じだったな。
麗一は思い返してみる。
そとで雨に打たれ、濡れていたカノンをソファに寝かし、起きたカノンと少し喋って、そして――――
「……！！」
はっ、とした麗一は、回想を止めた。だが時既に遅く、麗一の顔は真っ赤に染まっていた。
――――そうか、キス、したのか。
麗一は自覚する。
こんな、小さくて、幼くて、そして綺麗な娘と。
僕が。
そう思いつつ、自分の抱いているその娘を見る。幼いながらも美しく整った顔。一定間おきに聞こえる寝息が妙に艶めかしい。
「う……」
数秒ほど、麗一は生々しい想像をした。この初めてキスしたまだ幼い相手と、甘い言葉を交わし、身体に触れ、唇を重ね、舌を絡め、指を絡め、肌を重ね、そして――――
「……いかん！危ない危ない！」
おかしい。
今の僕はどうかしている。
疲れすぎたのだろうか。
きっとそうだろう。
麗一はそう強引に解釈した。
無心の境地に達した麗一は、そのまま何も考える事無くリビングのソファへ彼女を横たわらせ、毛布を掛けた。
自分の部屋のベッドになんか連れて行ったら、またあの変な想像をしてしまいそうだから……おっといけない。
また何かしら考えそうになった麗一は、ぶんぶんと首を振って、また無心の境地へと戻っていく。

「……あ、そうだ。恋歌に帰って来たよって言わなきゃ……」
戦場に赴く際、「絶対に死ぬな」と言葉を掛けた恋歌。その恋歌にだけは、声を掛けておかなきゃ。麗一はそう思っていた。
疲れた体に鞭を打ち、麗一は家を出て洋菓子店へと歩く。
裏口から店へと上がり、逢坂家のリビングへと行く。
が、誰もいない。
2階か。そう思って、麗一は、上へあがった。
「恋歌〜？いるかい？」
「ふええ！？れ、麗一ィ！？」
「……うん」
恋歌の部屋のドアを開けつつ、麗一は答える。
「え〜っと、ど、どうしたの……」
「うん……」
いまいち思考がまとまらない。どうやら、疲労がピークのようだ。
あ、マズイ――――――
「……恋歌……ただい、ま……」
「へ？う、うわあああ！！麗一ィイイ！！」
帰宅を告げた後、ドサッ、と力無く倒れた麗一を目の当たりにして、恋歌は叫び声をあげた。

「……うう、う、ん……」
麗一は目を覚ました。
ここはどこだろう。辺りを確認する。
床の至る所にはゴミが散乱、本棚には漫画が満載、まず勉強していないと一瞥しただけで分かる机。
うん。麗一は解答を見つけ出した。
考えるまでも無い。
ここは、恋歌の部屋だ。
「……少しは片付けようよ……」
部屋を出る間際、呆れたように麗一は言った。

そして、下の階へと降りる。
「……」
リビングにあるテーブルの上を見て、麗一は絶句した。
そこにあったのは、『先に夕飯食べちゃった。てへっ？』という置き手紙（こんなのを書くのは姉さんぐらいだ）と、綺麗に食べられていたインスタントラーメンが、何故か４つ置いてあった。
カノンはこの家にはいない筈……。
「……って事は、あの人たち、１人で２つ食べたのか……？」
しかも、後片付けもしないまま。
「……あのねえ」
現在、午後１１時半。先に夕飯を食べた２人の気持ちもわかる。
僕も飯を待てとまでは言わない、だけど、だけどさ。
「自分たちで食べたんなら、後片付けぐらいやってくれてもいいんじゃないかな……？」
そう呟きつつ、麗一はゴミ箱へ空のカップ麺を捨てた。
「はあ……」
盛大な溜息。
「全くもう……恋歌～、姉さ～ん？」
麗一は、２人を呼んだ。後片付けくらいしてよ、と麗一は説教をするつもりでいた。
……？
返事が無い。
これはおかしい。麗一は不審に思った。
姉さんはともかく、恋歌はどこへ……？
麗一は２階に上がる。
「全く、どこへ行ったのさ……」
まずは、恋歌の部屋。
「……いない」
いつもなら、ダラリとした様子で寝ているのだが、姿が見受けられない。

こんな時間に、どこへ……？
そう思い、優歌の部屋を覗いた。
「2人とも～、いる？……」
麗一はそこまで言って、はっと口を噤んだ。
優歌と恋歌が2人、肩を寄せて寝ていた。
その光景に、麗一の頭脳から『説教をする』という当初の目的は欠落した。
そして、それを埋め尽くすかのような、暖かい気持ちが心を満たす。
それほどまでに、微笑ましい光景だったのだ。
「……お説教は、また今度だね……」
麗一はそう呟くと、彼女らを起さないように、そっと扉を閉めた。

自分の家に戻ってきた麗一は、カノンの元へと急いだ。
ソファに近づくと、案の定カノンは寝ていた。起きる気配は微塵も無い。
「……取り敢えず、運ぶか……」
麗一は、疲れ切った体に鞭を打って、カノンを2階のベッドへ連れて行こうと担ぎ上げた。
「うおわっ……」
寝ているがために、力が身体に入っていないからだろうか。路上から家まで運んだ時よりかは、重たく感じた。
落とさないようにそっと、彼女を運び上げた。
横たわらせ、毛布を駆けてやって、麗一は部屋を出た。

「はあ……」
疲れていると言うのに、自分は何をやっているのだろう。麗一は自問する。
麗一はスーパーから家へと帰る途中だった。特売をやっている事を思い出した麗一は、今日を逃してはならない、という衝動に駆られ、

近くのスーパーを訪れた。
目当ての大半（主に高級肉）は売り切れていたが、それでも残った物をなんとかかき集め、店を出たのだ。
「はあ……」
またも溜息を吐く。
……つい数時間前に、人を殺したとは思えないよ。
信じていた筈のカノンの話を、どこかフィルターを通して見ていた自分に、麗一は気が付く。余りに現実味が無いのだ。
ふと、麗一は自身の右手を見た。
そこには、何も無い。スーパーの買い物袋も左手に持っているので、当たり前の事だった。
だが、この手には、先の戦闘で握っていた物があった。
「……この手で、引き金を引いたのか」
大出力反物質砲（アンチ・マター・カノン）を発射する際のトリガー。それを引いた時のグリップの感触が、今も残っていた。
「……」
これ以上の構想に嫌気がさした麗一は、首をぶんぶんと振った後、その手を額に押し当て、目を閉じた。
……これ以上考えても、仕方が無いというのに。
「失礼……」
ふと、声が聞こえた、麗一は顔を上げる。
そこには、黒い衣服に身を包み、フードを浅くかぶった男が立っていた。麗一は「何でしょうか」と言った後、訝しげな様子で男を観察する。これ以上の無い警戒心の表し方だ。
男の方はそれに気づいたのか、まるで、ドラマでよくある銃を突き付けられた時の反応のように、両手を上げて、口端を吊り上げて見せる。そして、言った。
「おやおや、警戒させてしまったか、御咲麗一君。そう怖がらなくてもいい。私は君に何かをする気はない」
いや、警戒するなという方が無理だろう！

麗一は胸中でツッコミを入れる。
――――というか、この男、僕の名前を知ってる。
僕が会った事は無いのに。これはおかしい。
麗一は警戒を解く事は無かった。
「……そうか、君が――――」
男はそう呟いたが、それ以上言葉を紡ぐ事は無かった。なので、逆に麗一が聞いてしまった。
「……あの、何でしょうか？」
「……おお、そうだ。まだ本題に入っていなかった」
男はそういうと、手に持っていた袋を掲げてみせる。そこにプリントされていた文字は、麗一もよく知っている物だった。
「洋菓子店『ｒａｉｎｂｏｗ』……」
「そう。君の家族と呼べるべき人が住んでいる家なのだろう？そこの物を買ってね……。良ければ、君からあそこの店主に宜しくと伝えておいてくれるだろうか」
「は、はあ……」
何だろう、警戒している自分が馬鹿らしく思えてきた。
とにもかくにも、この男は危害を加えそうにない。麗一は警戒を解いた。
「……さて」
そこで、男の表情がキッと鋭くなる。
「……君には、護りたいものがあるかな？」
「……え？」
「無いのかね？」
「あ、いえ……」
無い訳では無い。麗一はそう言いたかった。だが、それが非常に曖昧なものであるのは、麗一自身が分かっていた。
口に出すべき物では無いだろう。麗一は沈黙を守る。
「……私にはある。……いや、あった、と言った方が正しいな」
「……」

この男は、何が言いたいのだろうか。麗一にはいまいち分からなかった。
「……君も、人生を生きる過程において見つける日が来る。その時は……それを守るんだ。……例え、世界を敵にしても、ね」
「……」
麗一は、黙って話を聞いていた。
「しかしながら、それを失う時もある。……だが、護りたいものというのはいつかまた見つかる。その時はいずれ来る」
「……」
熱弁を振るう男。なぜ、自分がこうも話にのめり込んでいるのか、麗一には解からない。
「……実はね、私も最近、またできたのさ。護りたいものがね」
「……！」
そこで麗一は、初めて驚愕を覚えた。なぜ共感しているのか。やはり、麗一には解からなかった。
「当然、私はそれを守りたい。が、そのものは今は神聖な場所にあってね、私の守護は必要としないらしい……ならば、私は全てが終わってから、そのものを迎えに上がるさ」
「……そう、ですか……」
麗一はやっと声を発した。
「……君とは、もしかしたらまた逢うかも知れないな」
「……奇遇ですね。僕もそう思います」
「はは……そうか、ならば、君に私の名前を教えておくよ」
男は、一呼吸置いてから、名を告げた。
「私の名前は……ゼロン、だ」
男の口から出た名前に、麗一はなぜか脳内にクエスチョンマークを浮かべた。
直感的に麗一は、この男と自分とは、なにかの関係がある、と思ったのだ。
「それではな、御咲麗一君。……また会えるならば、その日まで」

「はい。……さようなら」
不思議な感情を抱きつつ、麗一は帰宅した。
途端に、どっと疲れがあふれ出す。冷蔵庫に買った品物を収めて、麗一は心からの呟きを漏らす。
「……お風呂に入ろう」
麗一は、ひとまず入浴をすることにした。

ちゃぷん、と、閉め切った部屋に水の落ちる音がこだまする。
「……はあ」
麗一は溜息を吐き出した。
昨日今日と、いろいろあったなあ。1つ1つ思い出してみる。
まず、カノンと会った。
いろいろあって、結局ロボットに乗って戦った。
……アランシアさん、助けられなくて、ごめんなさい。
それで、あの不思議な男の人――――ゼロンさん。
結局、何だったのだろうか。麗一は疑問を募らせる。
が、それを振り払い、麗一はまたも考え始める。
カノンがやってきて、新たな同居人が増えた。これは良い事だと思う。
だけど、その代償が、小笠原諸島の消滅。そして、僕の日常の崩壊――――
「……」
麗一は、一昨日まで流れていた『日常』を思い出す。
恋歌がいて、姉さんがいて、有無がいて、瑠璃さんがいて――――

――――
……果たして、今まで通りに過ごせるのだろうか？
いつやって来るかも分からない敵に備えながら。
「……難しく考えすぎかな？」
麗一は1人呟いた。狭い浴槽の中で、言った言葉が反響する。
……取り敢えず、今はカノンに付いて行くしかない。

全てが終われば、日常は戻って来るのか？
それは分からない。
だけれども、それで僕の生きていた証が見つけられるのならば。
「……やるしかない」
麗一は、１人拳を握りしめた。

漆黒の空間に浮かんでいる、大きな船のような物体。
そこの上に、光の波と共に１人の男が現れた。
長身のその男は、黒いぶかっとした服に身を包んでいて、それが様になっていた。
その男の手の上には、四角い箱があった。見た感じ、お菓子の箱の様だ。
「ただいま帰った……」
黒い男は、カードキーのような黒いカードを機械に掛ける。すると、男を遮っていたドアが開く。
ぷしゅう、と空気の抜けるような独特の音がして開いたそのドアを、男はくぐった。
その瞬間、近くに何人かの人が寄ってくる。
「おかえりなさいませ」
「おかえりなさ～い」
「……おかえり」
「おかえり！」
「お、おかえり、なさい……」
「おかえりなさい！」
そこにいる全部で６人の人は、全てが女性だった。それぞれがバラバラに返事を返したが、中には声を揃える２人組もいた。
「……おや、アランシアの姿が見えないけど……？」
「「「「「「あ」」」」」」
男の一言に、全員の声がハモる。そこから、皆黙り込んだ。
「……まさか、アランシアは……」

男が、沈黙を破ってポツリと呟いた。
「……機体が戻っていませんから、恐らく……」
紫の髪を持った、この女性たちの長かと思われる人物は、男に向かって言った。
またも、静かになってしまう。
「……そうか」
またしても沈黙を破った男は、間を置いてこう言った。
「……哀しみを穿り返すようなマネをしてすまない。それより実はケーキを買って来たんだがな、このままだと1人分余ってしまうな」
なんとか話題を変えようとする男。その男の意図を汲み取ってか、紫髪の女性は、手を叩いて皆に呼びかけた。
「け、ケーキとは、それはまた美味しそうですね。……さあ、皆、テーブルの用意をしましょうか！」
「あ、は～い！」
「わ、私、イスをお出ししますね……」
がやがやと、女性たちは椅子やテーブルを取り出す。あっという間に家庭によくある
家族皆の集まり、と言うのができあがった。
もっとも、1人は死んだのだが。
「……ケーキは切り分けてあるから、皆で食べてくれ……」
「あれ、いらなんですか？」
「……ああ。皆で食べていてくれ。……仲良くな」
「わかっておりますわ。さあ、座って食べましょう」
「は～い！」
「……了解」
「いただきまーす！」
6人の女性たちは、ちまりちまりとケーキを食べ始める。それを見た男は、1人、部屋を出て行った。
廊下を歩いて行き、エレベーターの前に立った男は、最下部へと通ずるボタンを押した。そのあと、カードキーを再び取り出し、読

み込ませる。
程なくして登場許可が下り、エレベーターへの扉が開いた。
男はエレベーターに乗り込んだ。扉が閉じて動き出す。
体が下へ落ちる妙な感覚を感じながら、見える景色を眺めた。
男の眼下には、それぞれカラーリングが違う機体が６つ、置いてある。
本来は、ここに７つ並ぶ筈だった。
「……すまない、アランシア……」
男は、本当に申し訳なさそうに呟いた。それと同時にエレベーターが止まり、扉が開く。
男は、エレベーターから出て、真っ直ぐ歩き、その最奥にある部屋の前まで行くと、扉の電子ロックにパスワードを打ち込み、カードキーを読み込ませた。
ずずずず、と重たげな音を立てながら、扉が開く。
そこにあったのは、巨大なシリンダー。
シリンダーは、薄く朱に染まっている液体で満たされていた。その中に――――

女性が１人、浸けられている。
生まれたままの姿の女性は、眠っているように、目を固く閉じている。男は、軽くシリンダーのガラスに手を触れた。
「これで、９人目か……」
そのシリンダーに浸けられている女性をまじまじと眺めながら、男は呟く。
「……カノン……」
男は、寂しげに俯いた。
その男を見上げるかのように、黒い巨人が、もとい、真っ黒なカラーリングをしている機体が、そこにあった。男は、それを見つめ直す。
「……アヴソリュートが失われた今、これを完成させねば……」

男はそう言うと、キーボードに手を伸ばし、打ち込み始める。
かたかたとキーボードを叩く音が室内に響いた。
日付が変わっていても、男は休む事無くキーボードを打ち続けた。

世界は、今まさに朝を迎えていた。

ジリリリリリリリリリ……
目覚まし時計の音が耳に届く。
「……ふぅぁあぁぁ……あふ」
体の関節を鳴らした後、麗一はアラームの機能を切った。
「……6時半、か」
いつも通り。麗一はそう思い、横を見る。
目線の先には、カノンがまだすうすうと寝息を立てて寝ていた。
「……ふふっ」
麗一は微笑むと、顔を洗うため下へと降りて行った。

「姉さ～ん、起きて下さいよ～」
苦労人、御咲麗一。今日も彼は保護者代理人を起こしにかかる。
だが、いつもとは少し勝手が違った。
いつも優歌はテーブルに突っ伏して寝ている筈なのに、今日に限って布団に入って寝ているのだ。それも、恋歌と共に。
昨日は微笑ましい事この上なかったが、いつもと勝手が違うのか、なかなか起きない。
「……恋歌から起こそうかな……」
麗一は、目標を変更。恋歌を起こしにかかった。
「それにしても、2人とも寝相が悪いな……」
性格は全然違うけど、やっぱり姉妹なんだな……。麗一はつくづくそう思った。
「……んんん……」
「あ、起きた」

「……何よぉ、麗一ィ……あれ？ここって……」
「そうだよ、姉さんの部屋だよ」
「むにゃぁあぁ！？」
「うえっ！？」
麗一が現在地を恋歌に言ったところ、恋歌は奇声をあげてよろめいた。
「どうしたのさ？」
「いや、姉さんと一緒に寝るなんて、やっぱり恥ずかし……」
「……んん、ふわぁあぁ……恋歌ちゃん、どうしたのぉ……？うるさい……」
恋歌の叫び声で、優歌が起きた。恋歌は申し訳無さそうにしているが、麗一にとってみれば、起す手間が省けたので、これほど良い展開は無い。
「姉さん、丁度良かった。早く起きて下さい。今日は布団を干しますから」
「……んむ～……まだ眠たい……」
「お姉ちゃん、寝ちゃダメぇ～……ぐう」
「……2人とも、ちゃんと起きて！」
まるでコントでもしているかのようにじゃれあっている2人を、麗一は洗面台まで搬送。顔を洗わせた。
ばしゃばしゃと水が荒々しく跳ねる音が響く。
「……んぶはぁあっ！お姉ちゃん、目が醒めました！」
「早く顔を拭いてください」
高々と覚醒を宣言した優歌に向かって、麗一は言う。
「……うんにゃ……後ろが問えてるんだから、早、く……ぐう」
「恋歌、寝ちゃダメだよ！」
全くもう……。麗一は溜息を吐いた。
しかし、この雰囲気を麗一は懐かしく思っていた。
この家族同然の2人と織りなされる慌ただしい日々。それを麗一は、まるで自分が捨てた日常の欠片のように思えた。

そして――――――――

「……麗一さん」

カノンが、歩いて来る。

この少女が、僕の捨てたものの代わりに得た物。

そう思うと、麗一は、この少女を大切にしようと思った。自分が捨てたもの――――――――かけがえのない『日常』と、同じくらいに。

「……麗一さん？」

「え？あ、何かな？」

「……お腹が空きました」

「あ、そう。じゃあ、今すぐ朝食にしようか。……ほら、姉さん、恋歌、ご飯食べますよ？」

「はいはい、ごはんごはーん！！」

「姉さん、廊下は走らないで下さい！」

「お姉ちゃん、はしたないよぉ」

そう言いつつ皆が食卓に着く。

「はいじゃあ、麗ちゃん、号令！」

「はいはい。いただきます」

僕の号令で、皆が食べ始める。

いつもは、3人だった。

けれども、今は4人。僕の日常の代償として、ここに住まう事となった少女、カノン。

そして、この4人で、新たな生活、ひいては、『新たな日常』を紡いでいくんだ。

窓から暖かい日差しが降り注ぐ。

まだ今日という日は始まったばかり。今日も麗一の忙しい日々が始まるのであった。

the prism #1 下（後書き）

どうも、七篠名無です。
まずは時間を割いてこの小説を閲覧して下さった事に、お礼申し上げたいと思います。
ここまで読んで下さった方々なら、いろいろと言いたい事はあると思います。
誤植が多い、分かり辛い、最後の黒ずくめは何なんだ、カノンは俺の嫁、ｅｃｔ……
色々あると思いますが、前編のあとがきで申し上げた通り、お目こぼしを願えれば幸いです。
私の方としても、読みやすく分かり易い文章を的確に伝え、皆様のハートをキャッチしたいところではありますが、文章構成力に乏しい私にはこれが限界でございます。申し訳ございません。
さて、本編のお話を。
次こそは４０００文字以内にまとめたいと思います（棒）
あと、前編を飛ばしてしまった方々には非常に心苦しいのですが、#2にはロボを出す予定はございません。ですが、そこを飛ばしてしまうと#3以降程から出ているであろう新キャラが分からなくなると思いますので、見ていただければ幸いです。
それでは、#2でまたお会いしましょう。

ｂｙ　七篠名無

the prism #2（前書き）

どうも、七篠名無です。
#1を上下とも読んでここを訪れた方には、いろいろと言いたい事があると思います。
誤植云々は置いておいて……下のあとがきまで読んで下さった方なら「なぜロボットを出さない」と思っていらしゃる――――人によっては、激怒している方がおられるかとは思います。
しかし、その代わりと言っては何ですが、新キャラを出しました。
そしてその新キャラは、有無クンとただならぬ関係のようですが……
……今思えば、有無の苗字と、私、名無の苗字が一緒でありますね。
スミマセン、この苗字、結構気に入っているんです。申し訳ありませんが、ごっちゃにならないように気を付けてご覧下さい。
それでは、#2をお楽しみください。

the prism #2

プロローグ

私は、仲間に楽をさせたい。そのためだけにここに来た。
だが、仲間の1人が逃げた。
私を嫌ったのだろうか。
それとも、私の心を代弁しての行動なのだろうか。
……解からない。
私が旅に出てから、新しく得た仲間だというのに。
私自身彼女をとても気に入っていて、彼女も私の事を気に入っていたのに。
なぜ？
……。
やはり、解からなかった。
私は、彼女を取り戻したかった。
だから、命じるのは好きでは無かったが、仕方なく仲間の1人に命じた。
失ったものを、取り返して来て欲しい。と。
結果、その仲間を失った。
……すまない。
私が身勝手な事を言ったばかりに。
他の仲間も、悲しがっていた。
私は、悲しむ仲間を見たくなかった。
だから、私は折角来た世界で、何かをしておこうと思ったのだ。
何でもいい。
そこで、私は見つけた。
「……ｒａｉｎｂｏｗ」
私は呟く。探し求めていた物を。

かつて、失ったものの欠片――――――
心の、よりどころ。
「母上……」
またも私は呟く。それによって、心の穴は広がるばかりだ。
しかし、それ以上に、新たな感情が沸き起こる。
「……逢坂、優歌か……」
いつか、迎えにあがりたい。
全てが終わった、その時に――――――

1

「……はあ」
麗一は、玄関で靴を履きつつ溜息を吐き出した。
「また溜息……幸せが逃げるよぉ？」
優歌が、麗一に話しかける。麗一はその問いに、「大丈夫です」と短く答えた。
「だといいんだけど……悩みがあるなら、相談に乗るよぉ？」
「……いや、本当に大丈夫ですよ」
「だといいんだけどねえ……」
麗一がそう言った直後、階段から降りてきた恋歌が麗一に言う。
「ここ最近、ずっと溜息じゃない……心配しちゃうよ」
「大丈夫だよ……。それよりも、もうすぐ行かないと。恋歌、靴履いて」
「分かってるわよ」
恋歌が続けて行った言葉に、麗一はぎこちない笑みを浮かべた後、恋歌に靴を履くように促した。
「……それじゃあ、姉さん、行ってきます」
「行ってきま～す」
「は～い！いってらっしゃ～い！」
優歌は、２人の後ろ姿に向かって、ぶんぶんと元気良く手を振っ

た。
　そのまま2人は、話す事も無く学校に向かって歩き出す。ちょっと歩いた所で、だんまりはごめんだ、とばかりに恋歌が声を発した。
「……さて、今日は金曜日だぁね！」
「うん、そうだね……」
「テンションが低い！」
　麗一の暗い声の返答を、恋歌は一喝した。
「……恋歌が高いだけだと思うよ？」
「？っ……まあ、そうかもだけど……」
「……で？金曜日がどうかしたの？」
　無慈悲な返答で若干気が沈んだ恋歌に向かって、麗一は話しかけた。その問いに、恋歌は自信満々の様子でこう言い放った。
「明日は休みっ！」
　……。
「……アレ？」
　呆れたように黙り込んだ麗一に、恋歌は疑問の声を上げた。
　……そりゃあ、当たり前でしょうよ。
　まあ、僕だって明日が休みだという事に対する幸福な感情が無い訳ではないけど……
「その呑気さに呆れた麗一であった……」
「うんうん、流石にねぇ……って、有無！？」
　いつの間にか現れ、麗一の心を見透かしたような補足を述べた有無に、麗一は驚く。
「相変わらず神出鬼没ねぇ……で？何が呆れただって？」
「いでででで！！れ、恋歌さぁん！？私はですね、麗一の心を代弁しただけであって……」
「ふんっ！！」
「うぎゃぁあああああ！！」
　痛みの余り叫び声をあげた有無の腕を、そのまま捻り上げる恋歌。
「す、すみませぇん！！もう言わない、もう言わないから、っでで

でで！！ギブギブ！ギブ！！」
「……ふう、まあいいわ」
激痛に悶え苦しみ、降参の意思表示をした有無を、恋歌は解放してやった。
拷問（では無いだろうが、そうとしか表現できない物）から抜け出し、いまだに痛そうに手首をさすっている有無を見て、麗一は恋歌をからかうのは絶対にしてはいけない事だと改めて肝に銘じておいた。

朝の学校の中は賑やかだ。
教室内で話す者もいれば1人静かに席へついている者もいる。
麗一は後者の方だ。
しかし、最近はいつもと勝手が違った。
いつもなら本を読んでいるか、恋歌か有無と会話をしている麗一なのだが、独り机に突っ伏して、考え事をしている。周囲の麗一をよく知る者から見たら、かなり異質な光景だった。
麗一の考えている事は、もちろん起動兵器――――『アヴソリュート』の事。そして、カノンを追いかけてきた刺客で、オレンジ色の『ヴァルキリー』を駆る女性――――アランシアの事だった。

僕が、殺してしまった。

麗一が溜息を吐きまくる理由である。
人は過ちを犯してしまった時は落ち込む。しかし、いつかは立ち直る。
だが、戦闘をして、既に1ヶ月が過ぎているのだ。なぜ陰鬱のままなのか。
理由は単純明快。テレビが、小笠原諸島が消滅したニュースを報道するからだ。
流石に起動兵器を暗喩するような情報は無いが、テレビはつける

度に同じような事を繰り返し報道する。
それはそうだ、報道すべきものは報道するのが会社だし、見るものに知識欲を餌付けするのは各局が競り合うのには格好の物だ。
それは仕方の無い事だ。と麗一は嘆息する。
そう言い聞かせても、ただでさえ弱いメンタル面の麗一には焼け石に水の状態だ。

僕が、殺した。
消してしまった。
助けられなかった。

このような負の感情が、麗一に心を痛めつけているのだ。
その落ち込み様は、周りの人を寄せ付けないレベルの物となっていた。なので、周囲のクラスメイトは本人に理由を聞く事も叶わず、ひそひそと思考をめぐらしている。

『なあ、麗一って、ここ最近スゲェ暗くね？』
『小笠原諸島の変な事件があってからだよね……家族が死んだとか？』
『バカ、アイツの家族はとうの昔に三途の川を渡ってら。だから恋歌の家に居候してんだろ』
『う～ん……じゃあ、親戚かね……？』
『さあ……詳しい事は本人に聞かなきゃ解からんだろ。お前、ちょっと聞いてこいや』
『いや、無理だって、流石に麗一相手に聞き出すのは……』

クラスメイトが頭の中に抱えている疑問符は数を増やすばかり。
その時だ。
がたり、と音を立てて椅子を引き、立ち上がった1人の女子生徒。
その女生徒は、しゃなりしゃなりと麗一の近くまで歩いて行く。

背は恋歌よりも2回りほど小さく、整った顔立ちと綺麗にそろっている前髪を持った女生徒――――――式園瑠璃は、麗一の方に歩いて行った。
その気品あふれた顔は、周囲の目線を気にしてか滑稽な程赤く染まっていた。
そののしかかる緊張をほぐすかのように、深呼吸をしてから、麗一に向かって言った。
「み、御咲君……おはようございます」
「……ん？あ、式園さん、おはよう」
麗一は心配をさせないように笑顔を作って言った。だが、これが作り物であることは誰が見ても明らかだった。
「……あの、御咲君……」
「え？なに、かな？」
いつもならここで真っ赤になって引き返してしまう瑠璃が、しっかりとした意思を持った口調で話しかけてきた事に麗一は驚く。そして、その対象である瑠璃は、やんわりと、しかし意志のこもった口調でこう告げた。
「その……私、かねてからお尋ねしたかった事があるのですが……何か、悩み事でもおありなのですか？」
「え……？」
馬鹿丁寧な口調で質問する瑠璃に、麗一は聞き返す。瑠璃は、はっとすると慌てて言葉を紡いだ。
「えっと、私……御咲君がそんな顔をしているのを見ると、不安になってしまって、その……困っているなら、力になりたいんです」
「いや……大丈夫だから」
「そうもいきません！」
瑠璃は若干声を荒げると、麗一の腕をがしっと掴む。
「私……一ヶ月ほど御咲君を見ていました。そして麗一君は、ずっと何かを思いつめたような顔をしていらっしゃいました。私、そんな御咲君に、事情をお伺いしたかったのを、ずっと堪えていたんで

す。ですが、もう辛抱できません……」
「う……いや、本当に大丈夫だから……」
「いや、大丈夫じゃないね」
話している2人に割って入った男の声。振り向くと、そこには有無がいた。
「お前よ、そう言ってるけど、周囲にゃバレバレだぞ？心配する人も出てくるのは当たり前だ。……大方、小さい事で悩んでんだろうが」
「いや……小さい訳じゃない、けど……」
「ほお……」
有無の問いに小さく答えた麗一を見て、有無は顎に手を当てて何かを考え始めた。
やがて、何やらひらめいたのか顎から手を放して、こう言った。
「……子供でもできたか？」
「な……！！」
どうしてそうなった！？
思わず絶句する麗一。
「お？図星か？」
「そんな訳ないでしょ！！」
否定する麗一。
それを、有無は「まあまあ」といって諌めた後、口を開いた。
「……なんで落ち込んでんだ？麗一？」
「う……」
どうしよう。麗一は一考する。
流石にカノンの了承も無いままアヴソリュートの事などを話すのはまずい。それに、もし仮に話したとしても、信じてくれるかどうかさえ危うい。
恋歌はカノンの事は知っているが、話に踏み込んだ所で的確な援護射撃は望めそうにない。
ここは、シラを切り通すしかない。

達した結論に罪悪感を感じる麗一だった。
「……まあ、別に話したくない事までは聞かないが……それならば、こうしようじゃないか」
沈黙した麗一に向けて、有無が話を切り出した。
「……なに？」
「我が友人が悩んでいるというのに、なにもできないのは心苦しい。ならば、責めて気持ちだけでも和らげてやらねば、俺の名がすたるという物だ」
「どうすんのよ」
麗一の問いに熱弁をふるっていた有無に、恋歌が切り込んだ。
「ふふふ、それはだな、明日――――」
「は～い、席についてね～！」
「――――時間切れですとぉ！？」
がらりがらりと音を立てて教室に入って来た担任の穹の号令に、有無が声を上げた。
「ほらほら、さっさと戻んなさい」
「……へいへい」
有無はぶっきらぼうにそう言うと、麗一と恋歌と瑠璃の３人組に、「話の続きは昼にな」と言って戻って行った。
……何をするつもりなのだろうか？
麗一もまた、先ほどまでのクラスメイトと同じように頭に疑問符を抱えつつ、席に戻った。

「さて……」
勿体ぶる時の決まり文句を発する１人の男。
私立巴咲学園、屋上。
日本は今、昼だ。現に、屋上には４人の少年少女が食事をしようとそこにいる。
その４人は昼食を食べつつ、その１人の男――――七篠有無の話を聞いている。

「俺が考えた麗一の気分をやわらげるプラン……それは！」
「なによ」
恋歌が有無に尋ねる。有無はふふんと鼻を鳴らした後、自信満々でこう告げた。
「明日、遊びに行くぞ！」
……。
「……アレ？」
呆れたように黙り込んだ3人に、有無は疑問の声を上げた。
「な～んか、デジャヴ……」
朝のそれを思い出してか、恋歌が呟く。
「み、御咲君はそんな単純な人じゃないと思います……」
「いや、結構大事な事だぞ？気分転換はな」
瑠璃の一言を、有無は受け流すようにして答えた。それに続けて、有無は謎めいた言葉を言う。
「大体な、お前らは本来、俺に感謝しなければならない所なんだぞォ？」
「……？」
「はァ？どうしてよ？」
その台詞に、瑠璃は小首を傾げ、恋歌は「わけがわからない」とばかりに声を上げた。
「ふっふっふ。まあ、耳を貸しなはれ」
「？」
「何よ……全く」
麗一も何事かと思い、話を聞こうとしたが、有無に止められてしまった。どうやら、僕は聞いてはいけない事らしい。……何の事だろうか？
考えるも、何も思い浮かばない。故に、麗一は会話が終わるまで待っているしかないのだ。麗一は、暇を持て余すかのように、ゆっくりと息を吐き出した。

「……で？なんでアンタに感謝しなきゃいけないのよ？」
開口一番、恋歌の口から疑問が飛び出た。
「まあまあ、まずは確認だが、俺の言った言葉の意味は解かるな？……俺は、『明日皆で遊びに行く』と言ったんだぞ？」
「……は、はい。それは、わかります」
有無は恋歌を宥めた後、２人の理解度を確認する。瑠璃が律儀にもそれに答えた後、有無は続けた。
「つまりだ。……連れはいるが、明日１日麗一と遊べるって事だぞ？」
有無は若干勿体ぶるも、事も無げに告げた。だが、それは目の前の女子２人には超弩級の爆弾だった。
「「えぇえええええええええええええええええええええええええ！！！」」
２人の叫び声が昼下がりの空を引き裂いた。
「だあぁ、うっせえ。落ち着け。麗一にバレたらどーすんだ？」
「「ぁぅ」」
有無が差した釘に、２人は黙り込む。そして、ギギギギと軋む音が出そうな感じで、２人は麗一の方を向いた。
こういう事になると、合わせてもいないのにコイツらは息ピッタリじゃねえか。
有無は心の中でそう思いつつ、苦笑する。
「ほら、見てみろよ、『どうしたんだアイツら』みてーな感じの顔してんじゃねえか」
「……あれはどう見ても『また有無か』って感じの顔ね」
「へっ、よーく分かんだなぁ。流石、一緒に暮らしてるだけの事は痛い！痛いです！！」
「か、ら、か、う、な！！」
「サーセン！すいませんでした！！」
有無はそう言いつつ、臨死体験を覚悟していた。どうせまた捻り倒されるんだ……。そう思っていたのが。

「……まあいいわ」
「およ……？」
今回は、恋歌はやけにあっさりと有無から手を放した。いつもなら、痕が付く程捻り上げていたのに……。
それほど機嫌がいい証拠なのだろうか。有無は首を捻った。
「ふん、まあいいわ。アンタにしては、なかなか気の利いたサプライズじゃない……ねえ、ルリちゃん？」
「……ふぇ！？な、なんですか？」
ぽそっとこぼれるかのように恋歌が話しかけたのだが、瑠璃はびくっと身体を震わせるくらいに驚いた。
「……何ボーっとしてんだ？式園さんよォ」
「い、いえ……何でもないです！大丈夫です！」
照れ隠しの混ざった、眩しい笑顔で瑠璃が言う。
……麗一め。
有無は憤慨にも似た感情を覚えた。
こんな娘に惚れられちまって、それに気付いてないなんて――
「……全く、罪作りな奴だぜ」
口から感情がこぼれた。その呟きはとても小さかったので周りに響く事は無かったが、有無自身のその意識を強めるには十分だった。
「だと良いんだけどね……それじゃあ、戻りましょっか」
それに気付いていない様子で、恋歌が言う。
「……そだな」
恋歌の言葉に有無は喉を鳴らすかのようにボソリと返すと、麗一の元に戻って行った。

「どうしたのさ、いきなり叫ぶなんて……」
麗一は帰ってきた3人に、1番気になった事を聞いた。
「いンや、別に何でも」
「有無がなにかしら言ったんでしょう？」
「いや、そんな事は無いぞ？」

自信のデフォルト顔であるポーカーフェイスでさらりと言ってのける有無。
その独特の表情を出されては、さしもの麗一でも何も読み取れない。麗一はおとなしく引き下がった。
「ま、まあ、明日はお出かけって事で。ね？」
「うん……別にいいけど」
「よし、決定な」
かくして、明日の予定は皆で遊ぶことに決定したのであった。

2

「……はあ」
麗一は、今日の授業の復習の手を止めて、溜息を吐き出した。
「……遊び、か……」
もう長らく行ってない気がする。それはそれで楽しみだった。
だが、今さっきまで麗一の考えていた事とは、少し違っていた。
恋歌、有無、瑠璃。
麗一の新しい日常で、変わる事無く残っていたもの。
彼らもまた、失ったものの欠片だったのだ。
麗一が思っていたほど、失った日常という物は多くは無かった。
それを自覚し、ちょっぴり嬉しい気分になった麗一。
「……麗一さん、入ります」
「ん？何？カノン」
丁度そこに、カノンがやって来た。
カノンとの、不可思議な同居生活も早1ヶ月。最初こそぎこちなかったが、すぐに慣れてしまった。最近はカノンの堅さも取れて、まるで兄妹のように振る舞えている。不思議なものだ、と麗一は思う。
「……あの、優歌さんが、ケーキの材料を買っておいてくれないか、と……」

「え？ああ、分かった。今行くよ」
用件を伝えられて、麗一は出かけようと下に降りた。
「じゃあ、行ってきます、カノン」
「……」
「……カノン？」
いつもなら「いってらっしゃい」と言って送り出す筈なのに、今日は黙り込んだままだ。
「えっと……どうしたの？」
「……いきたい」
「……え？」
麗一の問いに、カノンはポツリと何かを洩らした。
「……私も、たまには、麗一さんと一緒に、お外に行きたいです……」
カノンは律儀にも丁寧に言い直す。麗一はカノンのこの発言に少々面食らったが、すぐに笑顔になる。
「そっか。じゃあ、行こう」
「……はい」
麗一の了承に、カノンは心なしか嬉しそうに返事をした。
カノンは靴を履くと、麗一に手を出す。
「？……何？」
「……手を、繋ぎたい、です……」
頬をほんのりと朱に染めて、カノンは消え入るようにして呟いた。
「はいはい」
「……」
麗一は、無言のカノンの手を掴む。
ほんのりとした温かい手だった。

「……あの」
道を歩き始めて数分、カノンが口を開いた。
「……れ、麗一さんの好みの女性って、どういった感じの人なんで

すか？」
「……いきなりどうしたの？」
麗一は聞き返した。カノンはあたふたとなりながらも言葉を続ける。
「い、いや、あの……やはり、一緒に、住んでいますから、お互いの事は知っておいた方が良いと思うんです。より好みに近づけた方が、信頼も増しますから……」
「なるほど……ん～、好みの女性、ねぇ……」
いままでそんな事、考えた事も無かったな。麗一は空いていた手を頭に当てて考えた。
……何も出て来ない。
麗一とてお年頃の男子だ。異性に全く興味が無い訳では無い。だが、『こんな女性がいい』という思いが、全くもって浮かんでこないのだ。麗一の生まれつきの性格『自分よりも他人』という物が、こんな形であだとなるとは……。
「……ごめん、答えられそうにも無い」
「……いえ、その……思った事を言ってくだされば良いんです」
「いや、そうじゃなくて……自分でも分からないんだ。その……好みのタイプ、が」
申し訳なさそうに苦笑する麗一を見て、カノンは不思議そうな表情を浮かべた。
それと同時に、カノンの頭の中に、麗一に対してのささやかな疑問が生まれた。
「……麗一さん」
「何？」
「もしかして、同性愛者……」
「え！？い、いや、違うよ！！あの、さっきのアレは、そういう意味じゃなくて、その、ただ単に、見た目とかで選別したくないっていう感じの意味で……」
「あ、そうですか」

「う、うん……」
麗一の弁解に、納得した様子のカノン。その姿を見て、麗一は口を開いた。
「……まあ、強いて言うならだけど……」
「……？」
カノンは、麗一を見上げる。
「僕は……自分を見捨てないで、ずっと愛してくれるような女性が良いな」
「……麗一さんを？」
「うん。……勿論、僕も同じくらいその人の事を愛すよ。僕を見捨てない人を、僕は見捨てない。……いや、見捨てたくない。見捨てるなんてできないよ」
「……」
カノンは、何も言わず、意味ありげに微笑んだ。
「あ、ここだよ。スーパー」
麗一は、カノンの意味ありげな表情には気付かず、目的地に着いた事を知らせる。
「あ、はい。……それじゃあ、買い物をしましょう」
「うん」
2人は、手を繋いだままスーパーマーケットに入った。

お目当ての物を見つけると、2人は会計を済まして、そのスーパーを出た。荷物はというと。
「うにゅ……ぅ……」
「お、重いかな？」
「だ、大丈夫、です……」
荷物を1つ持ったカノンは、顔を真っ赤にして答えた。
買った物を全て持って、重そうにしている麗一に、カノンは「自分も持つ」と進言した。それまでは良かったのだ。
一番軽い物を持たせて御覧の有様なのだ。

やっぱり無理があったかな……。麗一は心の中で呟いた。
「……やっぱり僕が全部持つよ」
「……は、はい……すみません」
そう言ったカノンは、麗一に荷物を渡す。
「……ごめんなさい」
「いや、謝る必要なんか無いよ。本来は僕だけの仕事だしね」
そう言って、麗一は歩き出した。カノンも麗一に付いて行く。
しかし、曲がり角を曲がろうとした時。思いがけない人物に出会った。

ボスッ！

「うわっと！」
「わっ、ごめんなさい！！」
「いや、大丈夫っす……ん？……って、麗一ィ？」
「あ……有無？」
荷物で前がよく見えなかった麗一は、曲がり角にいた人とぶつかった。その人物は、麗一の友人、有無だった。
「こんな所で会っちまうとはな。……それにしたって、凄ぇ荷物だな」
「あはは……さっきはごめんね」
「いや、いいって。……それより、そんなん1人で持って帰んのは大変だろ、1つ持つぜ」
有無は、麗一の荷物を持とうとする。それを麗一は片手で止めた。流石に悪いと思ったからだ。
「気遣いは無用だぜ。ただの散歩だし、特に用事もあって出かけてる訳じゃねえ」
「いや、でも……」
「親切は受け取っとけ。……よっこいしょっと……何だよ、結構軽ィじゃねえか。もう何個かはいけるぜ」

有無は半ば強引に麗一の荷物を持った。結局、麗一は有無にほぼすべての荷物を持たせるという構図になってしまった。
「……ごめんね」
「何がだ？」
「いや……荷物を持ってもらっちゃって」
「だから、いいッ言ッてんだろうが。……それよりも」
有無は、後ろについて歩いている麗一に、こう言った。
「Ｗｈｏ ｉｓ ｓｈｅ？」
「え？」
「だから、その娘は誰だ、って聞いてんだ」
それだ、というニュアンスで、有無は顎でカノンを差す。
そう言えば、有無はカノンの事を知らなかった。麗一は、有無にカノンを紹介した。
「……ほお」
カノンの事を聞いた有無は、目をそらして眉を顰める。やがて、悟ったかのように微弱に目を見開かせた。
「……麗一、俺は朝の事を冗談で言ったつもりだったんだが、まさか、実際に……」
「へ！？い、いや、どうしてそうなるのさ！！」
「……どーだか。お前にも恋歌にも妹はいない。親戚にしたって銀髪の娘はそうはいないだろォ。降って湧いたんじゃあるまいしィ～……」
そこまで言うと、有無はすっと目を細める。今まで麗一には見せた事の無い、真剣な顔つきだった。
「……お前さ、隠し事してるだろ。多分その娘がらみの。塞ぎ込んでたのにも関係があるんだろ」
その言葉には、若干のトゲがあった。しかし、陥れるためのような物では無い。麗一を心から心配する気持ちから来る焦りの表れ――
――そう言った方が正しい。
麗一は黙ったままだ。カノンはというと、有無が現れてから全く

もって口を開かずに麗一の背後にいる。
その手は、しっかりと麗一の手を握ったままだ。
「……お前が言わないんなら、そのチビッ娘に聞くさ」
そう言うと、有無は荷物を置き、身を屈ませた。
「なあ、カノンちゃんとやら、俺は麗一の友達の、七篠有無っていうんだけどさ、最近、麗一が暗いのな、理由、知らないかい？」
「……」
カノンは黙ったまま、逃げるようにして麗一の脚の陰に隠れる。
有無におびえているようだ。
「そんなに怖がんなよ、チビちゃん」
有無ははにかんで見せた。だが、その瞳は全く笑っていなかった。
「……いいから話してくれよ。誰にも言わないからさ。絶対に秘密にするから」
流石に焦りが出てきたのか、有無はカノンに向かって手を伸ばす。
カノンは、その手を凝視したまま動こうとしない。このままでは―

「もう止めてくれ！！」
刹那、麗一が声を荒げた。周りには他の通行人の姿は無く、よって喧噪も無いので、その声は辺りによく響いた。
「……ごめん、大声出して。でも、これ以上カノンには何もしないでくれ」
「……へいへい、分ーったよ。……でもよ、詳しい事教えてくれないと、こっちだって引き下がれねえぜ？」
麗一は軽く頷くと、カノンを見据える。
「……言っていいね？アヴソリュートの事とか」
麗一はカノンに言った。
程なくして、カノンの「はい」という擦れた声が耳に届いた。
「ふん……さっきお前が言った『アヴソリュート』とやらが何だか知らねえが、きちんと取り調べさせてもらうからな？」
急に鋭い目付きを緩ませ、いつも通りの声のトーンに戻った有無。

その発言に、麗一は「はいはい」とだけ答え、話し出した。
麗一の日常が崩れて無くなった、あの日の事を――――

「……その話がホントだったら、大変だな」
麗一の話を聞き終えた有無の第一声がこれだ。
そのまま、有無は壁にもたれかかる。その瞳は先程と違い、思考の海を漂っていた。
「無理な話かもしれないけど……信じてほしい。僕は、嘘なんかついてない。……もし、信じられないなら、今聞いた事は全部忘れてほしい」
「……」
「あ、あの……」
黙っている有無に、先程から口すら開かなかったカノンがふいに話しかける。
「……お願いします、信じてあげて下さい。……麗一さんを、嘘つきにしないで下さい」
それだけ言って、カノンは再び麗一の脚元に隠れる。彼女のできる、精一杯の援護射撃だった。
「……まあ、いいや」
ふいに、有無は壁にもたれかかっていた身体をしっかりと立たせると、こう言った。
「信じてやるぜ。お前の話をよ」
一瞬、麗一は耳を疑った。思わず「えっ」と言って聞き返してしまった。
「なんだよ、信じてほしくないのか？だったら忘れるぜ？」
「い、いや、それは……信じてほしい、けど……」
「だったらもっと嬉しそうな顔をしろよ、麗一ィ」
にやりにやりと、いつもと全く変わらない調子で言う有無。その顔を見て、麗一は少し救われた気分になった。
「まあ、人を死なせちまって落ち込んだのも分かるけんどもな、そ

のチビッ子が言うには、これからまだまだそういう事がある筈だ。
いちいち落ち込んでたらキリが無いぜ？」
「う、うん……」
「……まあ、頑張れや。この世界の救世主さんよ」
にっと笑う有無。それにつられて、麗一の頬も吊り上った。
「僕が救う訳じゃ無いんだけどね……救世主は、カノンだよ」
「ああ、そういやそうか……頼むぜ、カノンちゃん」
「……言われなくても、そのつもりです」
カノンも、有無の言う事に少しずつ反応するようになった。
こうやって、仲良くなっていってほしいな。と、麗一は温かい眼差しでカノンを見つめた。
「……所でよ、さっさと行かねえと、もうじき日が暮れるぜ？」
「え？あ、本当だ！急ごう」
「おうよ」
そう言って、有無は荷物を担ぎ上げる。その動作が終わり、歩き出し始めた頃、麗一は有無にこう告げた。
「……ありがとう。有無。ちょっと……いや、かなり気が楽になったよ」
「……そうか、そいつは何よりだ」
有無は難しい顔でそう言った。

「有無君、ホンットに、ありがとね～」
「いやいや優歌さん、こんなん例にも及びませんぜ」
こちら、洋菓子店ｒａｉｎｂｏｗ裏口。
有無が頼んだ荷物を担いで持ってきたと知った優歌は、有無に深々と頭を下げる。
「お礼にね、このショートケーキあげる！２つもあげる！」
「いや、いいっすよ。流石に悪いっす」
やんわりと断る有無。それを聞いたカノンが徐（おもむろ）に口を開く。
「……『親切は受け取っとけ』、は？」

「うぐ……それを言われると立つ瀬がねえじゃねえか、チビちゃん」
「……カノンです」
そんな様子を見て、麗一は思わず顔を綻ばせる。
カノン、有無と打ち解けてきている。最初は怯えに怯えていたのに。麗一は安堵する。
「……んじゃ、お邪魔でしょうからそろそろお暇しまっせ。ケーキはありがたく頂戴しますぅ」
「また来てね～」
「じゃあね、有無」
「おうよ。……カノンちゃんにいろいろ教えてやれよぉ～」
有無が去り際にそう言ってやると、麗一は「それ、どういう意味？」と、苦笑しながら呟いて家に戻った。
「……」
有無は、帰りを急ぐ。
……と言っても、誰も家にはいないんだがな。
有無は心の中で、そう自嘲的に呟いてから、麗一の家族を思い浮かべる。
優歌、恋歌と共に暮らす麗一。
そこに、新たにカノンと言う存在も確認できた。
……暖かそうだな。
手に持っている、優歌から渡されたケーキの箱が、まるで自分の事を映しているかのように冷たくて、つい「羨ましいぜ、畜生……」とぼやいてしまった。
自分の家には他に人は居ない。
それなのに、麗一の所には異世界から人がやってくる。
なんつうか、不公平だ……。
家族と言う点で、一種の劣等感を感じてしまった有無。そのせいか、いつものポーカーフェイスをぐにゃりと歪め、何とも表現のし難い表情になっていた。
その顔のまま、有無は人気の無い路地へと入って言って、呟いた。

「出て来いよ（・・・・・）、分かってるんだぜ（・・・・・・・・・）」
その言葉が終わるか否かと言う所で、有無の背後の電柱から、ぬっと人が現れた。
その人物は女性だった。背が高く、腰まで届く、流れるような黒髪を持っていた。その髪と同じくらい黒い服に身を包み、その表情からは、意志の強さが見て取れた。
「お前よォ……ストーカーみたいな事はやめろって何回言ったら……」
「……いつから気が付いていた」
その女は有無の注意を無視して、むすっとふてくされた様子で有無に質問を浴びせた。どうやら女性は、有無に気付かれたのが相当気に入らなかったようだ。
有無は頭を掻きつつ、その質問に答える。
「俺がスーパー前で麗……ダチの男子学生にぶつかって、その荷物を持ってやった時からだ」
「……そうか」
有無の返答を聞いて、女性はこめかみあたりに指を当ててぼやく。
「……貴様には敵わないな」
「よせやい。……こちとら折角いい情報が手に入った（・・・・・・・・・）っていうのに、テメエに自慢できなくなっちまったじゃねえか……まあ、説明する手間が省けたのはいいんだが……」
「ふん……あの少年と、少女の事か。私もしっかりと聞いていたぞ。……自慢できなくて残念だったな」
そう言った後、女性の顔付きがさっきにも増してキッと凛々しくなる。その表情は、まさに真剣そのものだ。
「ああ……まさか、あいつが関わりを持っちまうたぁな……」
「……ユウ（・・）、解かってはいると思うが……」
ふいに、女性の声が柔らかみを帯びる。有無は彼女の心情を知ってか知らずか、こう言ってのけた。

「ああ、言われるまでもねえ。『私情を持ち込むな』って事だろ」
そう答えた有無を見て、女性は口元を緩ませ、頷く。
「分かっているならば、よい」
「へいへい……あ、そだ」
「なんだ？」
「いンや、これは、別にそっちの話じゃないんだけっどもな」
そう言ってから、有無は咳払いをしてから、続けた。
「……俺の友達……ッ言ッても、さっきの少年クンなんだがな、こいつ、3人の女に好かれてんのに、全く気が付かない鈍感野郎でよ、好意を気付かせるにはどうしたら良えかね……？」
「……その話は前にも聞いたような……いや、人数が増えているな……」
「うむ……どーすりゃええかね？」
相談……と言えるかどうかわからないが、持ちかけられた物を、女性は一応考えてみる。
「……貴様が色々と助言する他に無いな」
「……そうかい」
やっぱりか、と言わんばかりの表情で有無はうなだれる。
「……面倒っちィんだよなぁ……」
「……自分で持ちかけておいて、それは無いだろう」
「ほいさ。善処しま～っす」
わざとらしくびしっと敬礼をする有無を、呆れたような目付きで見る女性。
「まあいい……貴様のご友人とやらの監視を怠るなよ。……ああ、それと、私が見聞きした事は、きちんと報告書にまとめておくが、異論は無いな？」
「ん？ああ、特にねえけど……『起動兵器出撃命令』の発令だけは避けろよ」
まるで、世間話でもしているかのように語る2人。だが、その話の内容は打って変わって、常人が理解できるような物では無かった。

「……それぱかりは、私の手には負えん約束だな。命令を下すのは上官だ」
女性は有無の注文に、厳しい表情でそう言った。
しかし、次の瞬間に、ふっと表情を緩ませる。
「だが、善処はする。任せておけ……報告書の偽装は規律違反だが、今に始まった事ではないからな」
やれやれだ、と女性は言葉を続けた。
「頼りにしてますぜぇ、姐さん」
「ばっ……ゆ、ユウのせいで私まで規律違反をする羽目になっているんだ！少しは自覚をしろ！」
頬を赤らめて一喝する女性。それに有無は「へいへい」と軽く答えた。
「わ、私からはもう何も無い。……それではな」
そう言って、女性は有無に背を向けて歩き出そうとした。
が。
「あ、ちょっと待ってくれ」
「……なんだ？」
有無に呼び止められたその女性は、くるりと振り返る。その瞳に映ったのは、さっきまで手に持っていた包みを開いている有無の姿だった。
「ほい、これ、やるよ」
差し出された有無の手には、結構な大きさのあるショートケーキが1つのっかっていた。
「これを……私に？……ほ、本当に、貰っていいのか？」
「なんだ？要らねえなら俺が食うからそれでも良いぜ？」
「い、いや、その必要は無い！！」
その女性は凛とした声で有無の発言を否定した。そして、大事そうにそのケーキを貰って、呟く。
「お前からの贈り物だ……受け取らぬ訳が無い……」
「おう、そうか。助かったぜ。いくら俺でも、そんなドデカいショ

ートケーキの2人前を食う気にはなれないしな、でも、太らねえか？気ィ付けとけよ？」
何の緊張感も無く、有無は言う。
女性は、その様に少々面食らったかのように目を見開くと、やがて長々と溜息を吐いた。
「……何が鈍感野郎だ。それは貴様の事だ、馬鹿者……」
「おい、レイ、なんか言ったか？」
「ッ！……何でも無い！！」
「？」
絶対、何か言った……。
有無はその女性――――レイに対してそう思った。
「……じゃあな……ケーキ、ありがとう」
「おう、じゃあな、レイ」
「……ああ」
レイと呼ばれた女性は、そのまま決して振り返らずに歩いて行った。
「……全く、アイツは反則だ……」
去り際にレイが言い放った言葉は、有無の耳には届かなかった。

3

日付が変わり、その日の午前6時。
麗一は、途方に暮れていた。
「……むむむ……」
遊びに行く。という約束があって、いつもより早めに起きた。それは良かった。
しかし。
「……」
すうすう、とリズムの良い呼吸が聞こえる。麗一の耳元で（・・・・・・）。

「……カノン……」
「……」
麗一もまた、カノンの耳元に呼びかけるが、うんともすんとも言わない。
先ほどから、カノンの女性特有なフローラルな匂いが麗一の鼻孔をまるで突き刺すかのように通り続けていた。
正直言って、胸焼けしそうだ。
だからこそ、失礼かもしれないが、麗一は上に乗っかっているカノンを引き剥がしたいのだ。
だが現在、カノンは麗一の身体の上に乗っかっている状態だ。両手の自由は効くのだが、引き剥がそうにも、カノンの白くて華奢な身体に、どこか痕でもついたらどうしてくれよう。そう思ってしまい行動を起こせない。
幸い近くにある耳元に話しかけて起こす事も考えたが、カノンはまるでこの世に舞い降りた天使のような表情で眠りこけているのだ。起こす事も憚られるようで、麗一はどうすれば良いのか分からなかった。
むむむ……。と数秒唸って、麗一は結論を出す。
「……うううう……心苦しいけれども……」
ゴメンね、カノン。
寝耳に水、という諺がある。
この諺の意味は『突然の事で、まさに寝ている時に耳に水を入れられるくらいびっくりする』という意味だ。
言葉で言われただけではなかなかピンと来ないかもしれないが、実際やられるとどうなるんだろうか。麗一は、長年気になっていた。
まさか水をかける訳にはいかないので、かわりに息でもかけてやろう。麗一のささやかなイタズラ心がはたらいてしまった。
麗一はカノンの耳に、そっと息を送り込む。
「……んっ」
それに、カノンは起きこそはしなかったものの、甘い声を出して

呻いた。
……可愛い。
もう1回あの声が聴きたい……。麗一は無性にそう思った。
そして麗一は、流れるようにもう1度カノンの耳へ息を送り込もうとする。
ここまでしちゃうと、悪戯心じゃなくってサディストの域かも……。麗一は頭をよぎったそんな考えを振り払って、カノンに向かって息を吐いた。
「……ひゃ……んん……ん……」
ぴくぴくと身体を震わせながら、カノンが甘い声を出して身悶えする。
もう1回やろうかな、などと麗一は考えていたが、流石に耳への刺激に耐え兼ねたのか、カノンがうっすらと瞳を開けた。
「……あ……麗一さん、おはよう、ございます……」
「……うん。おはよう」
カノンが朝の挨拶を告げる。麗一もそれを返した後、手短に用件を伝えた。
「あのね、カノン……お願いがあるんだけど……僕の上から離れてくれないかな？」
「え……？」
カノンは、じっと下を見る、その直後、ぶわっと顔を赤くして、麗一の上からどいた。
言っては悪いが、いつもふわりふわりとした感じのカノンらしくない、素早い動きだった。
「そ、その……すみません」
カノンが正式に家族として迎え入れられたその翌日、逢坂家の皆で買いに行ったカノン用の衣類。その1つである、今まさしく彼女の着ているパジャマの裾を、カノンはもそもそと弄びながら言った。
「ああ、いや……いいよ、謝らなくて。……それよりも、こんな事で起こしちゃった僕の方が謝らなきゃ」

「い、いえっ……そんな事は……」
ぽっと頬に赤みを宿したまま、カノンはそんな事を言った。
「そ、それよりも……お出かけの支度はよろしいのですか？」
「あ、そうだそうだ、姉さんの昼食を作っておかないと……行こう、カノン」
「はい……」
２人は、ベッドから這い出た。

麗一は逢坂家で一息ついた後、改めて自分の格好を確認する。
今日は皆で気晴らしに行こう。という事になっている。
下手な格好はできないな。麗一はそう思いつつ、改めて鏡の前に立つ。
麗一は、黒のズボンに、白いシャツを着用している。麗一は、大体いつもこのような感じの服を着ているのだが、前に有無に「なんつうか、制服っぽい」と言われた事があった。それを気にしていたのだが……。
「うん。やっぱり、これが一番だね」
久しぶりに出かけるのだから、気に入っている服装で行きたい。
麗一はそう思うのだ。
「カノン、ちょっといいかな？」
「……何でしょう」
「どうかな？変じゃないかな？」
麗一は、カノンに意見を求めた。カノンは、すっと目を細める。
「……なんというか、学校に行くときの服装みたいです」
「そ、そうかい……」
それはつまり、制服みたいって事じゃないか。
「いや、あの、べ、別に……似合っていないと言った訳じゃ無いですよ？」
「……そうなの？」
「は、はい……むしろ、麗一さんに似合っていると思います」

カノンは、麗一の服装を純粋に評価した。麗一は「そう、よかった」と一言告げた後、優歌に声を掛ける。
「姉さん、行ってきます」
「は～い！気を付けるんだよぉ？」
「分かってますよ」
「ん～、よしよしよし……恋歌ちゃ～ん、麗ちゃんが行くってぇ！」
優歌が階段近くまで行って、大きな声で優歌を呼んだ。
「……むあー！待って待って待って待って待ってぇ！！」
「……待ってるよ」
急ぎ足で階段を下りてきた恋歌に、麗一は呆れたように声を掛ける。
「それじゃあ、行ってらっしゃい！気を付けてね～！」
「……行ってらっしゃい」
「いってきま～す」
「行ってくるね、カノン」
送り出す者と送り出される者。それぞれが会話を交える。
今日も1日が紡ぎ出される。

恋歌と麗一は道路を歩いていた。
「それで？どこに集合だって？メールが来たんでしょ？」
麗一は恋歌に聞いた。麗一は携帯電話を所有していないので、こういった事は恋歌に聞かなければ分からない。
「あ、うん。えっとね、9時半に七橋駅前に集合だって」
恋歌は麗一に告げた。
七橋駅とは、虹乃町に住んでいる人の最寄りの駅である。
その駅前には商店街があり、色々な店があって、とても賑やかな所だ。
治安もそこそこ良く、落ちているゴミもあまり見かけなければ、柄の悪い人間の屯（たむろ）している事もまず無い。とても綺麗な、憩（いこい）の場所でもある。

そんな場所なので、待ち合わせにはうってつけなのだが、麗一には、それ以前に心配している事があった。
「……恋歌、今何時？」
「えっと……9時２６分だよ」
９時２６分。
つまり……。
「……あと4分で駅に行かなきゃ間に合わないじゃないか！」
「ええっ！？……麗一、走るよ！」
「あ、うん！」
よりにもよってここから駅までは徒歩5分以上の距離がある。走ったところで間に合うだろうか……？
「麗一、遅い！」
「ちょ、ちがっ……恋歌が早いんだよ！」
「どっちでもいいわよ！急がなきゃ！」
「分かってる！」
考え事をしながら走る麗一だったが、いかんせん恋歌とは運動神経が雲泥の差だ。男ながら情けない……。麗一はぜえぜえと息を上げながら思った。
どたばたとしながらも、なんとか時間ギリギリに麗一と恋歌は滑り込む事ができた。
「遅いぜ、２人とも」
先に来ていたらしい有無が言う。
有無の服装は、薄い青色のジーンズ（ジーンズだから青いのは当たり前だが）に白いシャツ、その上に黒色のジャケットのような上着を着ていた。
今はもう春を通り越して、初夏になりつつある。熱くないのだろうか？と麗一は有無の服装に対して疑念を抱いた。
「まあ、お前らは遅れてないからいいか。問題は式園なんだよなぁ……」
そう言って、有無は空を仰ぎ見た。

麗一ははたと気づく。そういえば、式園さんの私服姿って、見た事が無いな。
どんな服装なのだろうか？
積もる麗一の期待を焦らすかのように、風が流れて行く。
その風が一旦止まった直後、有無と恋歌が「何だあれ？」と声を上げた。
麗一も、声のした方向を向いた後、2人の見ている方を向く。

……リムジンがあった。

黒塗りの一台のリムジン。場違いなソレはかなりの存在感があった。
それが、麗一たち3人組の前に止まる。
停車して数秒もしないうちに扉が開き、中から1人の少女が現れた。
「ご、ごめんなさい。待たせちゃいました？」
リムジンで登場した事などさほど気にも留めていない様子で、瑠璃は3人に告げる。
「恥ずかしいからそんな登場の仕方はやめてくれよな……」
珍しく赤面している有無が瑠璃に告げる。その一言は、麗一と恋歌の心を代弁した物だった。先程から、周りの人々は何事かとこちらを覗き込んでいる。その様子を見て、瑠璃はぶわっと顔を赤くした後に「すみません」と一言告げた。
そんな瑠璃は、半袖で、小さいピンクのハートマークが左の胸元にプリントされたブルーのシャツと、ひらひらとした物（フリルというんだろうか）が付いた短めのスカートを身に付けていた。こう言ってはなんだが、普段の彼女から考えたら、この活発そうな服装はちょっと意外だった。
「……まあ、その話は置いといて、さっさとここからお暇しようや。目線がキツイぜ」

「うん、そうだね」
そう言って、周囲の目線を避けるように、４人は歩き出した。
その頃には、リムジンの姿はもうそこには無かった。

「それでさ、有無、これからどうするの？」
「……ん」
少し歩いて、麗一は有無に尋ねた。
そういえば、麗一は何をして過ごすか、全く聞いていなかった。
そこらへんは主催の有無が考えているのだろう。
「……ボウリング、なんてどうだ？」
「ちょっと待って、何なの、その、今決めました、みたいな言い草」
「なんだよ、じゃあ麗一、お前どこ行きたいんだ？」
「え？い、いや、別に……」
「なら決まりだな」
なんでも、有無が気晴らしによく行くボウリング場があるらしく、そこまで歩く事になった。
「……あの、御咲君」
歩いている途中、瑠璃が口を開く。
「この服、似合ってますか？」
「あ……うん。とってもいいと思うよ。特に、その小さいハートマークが可愛らしいね」
「か、可愛いなんて……ありがとうございます……」
そう言いつつ、瑠璃は顔を下に向ける。その様子は、照れているようでちょっと可愛らしい。
「麗一、あたしも似合ってるかな？」
「恋歌はいつも通りだね」
「……あ、そう」
麗一の一言に、一瞬で水晶体が割れたかのように虚ろな目になってしまった恋歌。その様を見て、瑠璃が口を挟んだ。
「御咲君……そこはお世辞でも褒める所ですよ」

「あ、うん……ごめん」
「いいわよいいわよ……どうせあたしは見映えしないわよ……」
かなりの重傷だ。
言葉というのは使い方を間違えれば他者を傷つける。そのよく分かる実例だった。
「おいおい恋歌ァ、そのポーズは負けた時のポーズだろォ？……あ、そうだ、あん時の貸し……まだ清算してねえじゃん、いい機会だから、俺と一騎打ちしねえか？恋歌」
「……うえ？」
「だから……前ン時のアレだよ、アレ。……まさか、忘れたとは言わせねえぜ？」
「あっ……むう……嫌な事を思い出させてくれるじゃない……いいわ、タッグマッチで勝負してやるわよ！」
有無の一言に、恋歌の表情はくるりと変わる。その瞳は輝きを取り戻し、対抗心を顕にしていた。
そういえば、恋歌は昔、有無とボウリング勝負をして、ボロ負けした事があったっけ。麗一は思い出す。
その時、有無は恋歌に対して「歴史的大敗」とコメントしていた。もっとも、その台詞を言った後、有無は脱臼寸前まで肩を極められたのだが……。
それはさておき、恋歌の調子を元に戻した有無は称賛に値する。後でお礼でも言っておこう。麗一は思った。
「……さぁて、ココだぜ。俺の行き付け……かどうかは分からんが、ボウリング場だ」
そう言って有無は高々と手を上げる。どうやら着いたらしい。駅から案外近い場所にあったようだ。
「さてと、中に入るか……げっ」
麗一たちを急かし前方を振り向いた有無が、呻き声を漏らす。
「どうしたの？有無」
「なんかあったの～？」

「どうしたんですか？」
麗一、恋歌、瑠璃が有無に問いかける。
「ああいや、なんでもない。俺は何も見なかったんだ。さ、早く中に入ろ……」
「おや？ユウではないか」
「……うげ」
誰かに呼び止められた有無が、苦悶の表情を浮かべる。麗一たちは、その声のした方向へ振り向いた。
そこには、漆黒と呼べる衣服に身を包んだ女性が立っていた。背が高く、その服と同じくらい黒く、腰まで届く流れるような髪。そしてその凛々しげな表情。その全ての観点から言って、そこいらの雑誌に載っているようなモデルよりも美しかった。
――――――綺麗だ。
麗一の素直な感想だ。
それは、恋歌と瑠璃も同じ考えなのだろう。２人ともその黒服の女性に見とれ、ほっ、と溜息を漏らしていた。
３人が見とれている間、有無は考える人よろしく重々しい表情で額に手を当てた後、その女性にずかずかと近づいていった。
「……おいレイ、お前よ、なんでこんな所にいるんだ！？」
「それはこちらの台詞だ。なぜ貴様がこんな所にいる？」
「質問してんのはこっちだろうが。まず俺の質問に答えやがれ」
「何だと！？ユウ、私は礼儀作法には気を付けろとしっかり言って――――――」
そこまで言って、レイと呼ばれた女性は自身が注目されている事に気付いたのか、「んんっ」と軽く咳払いをすると、麗一たちの方へと歩いて行った。
「……すまない。はしたない所を見せてしまった様だな。許すがいい」
「あ、い、いえ、そんな事は……」
いきなり声を掛けられて、緊張してしまった麗一。

「麗一ィ、緊張しなくってもいいかンな？こいつこう見えて結構……」
「黙れユウ」
野暮な横やりを入れる有無を、女性は凛とした声で一蹴した。
そして、麗一に向かって手を伸ばす。その手が握手のための手だという事を理解するのに数秒程かかった。
「初めまして、御咲麗一君」
「は、はあ……初めまして……」
麗一はワンテンポ遅れてこう言った後、差し出された手を握る。
その過程で、麗一はふと疑問に思った。
……僕、自分の名前、言ったかな？
「ああ、君たちの事は有無から聞いているよ」
「そ、そうですか……」
……僕、今何か言ったかな？
新たな疑問符が浮かぶ麗一。
「あ、あの……！」
「……なんだ？」
麗一の疑問が増えている間に、瑠璃と恋歌がレイと呼ばれた女性に詰め寄っていた。
「な、七篠君とはどんな関係なんですか？」
瑠璃は、レイと呼ばれた女性に尋ねる。それに、女性は「えっ」と声を上げた後に若干頬を朱くして目を逸らした。妙な反応だ。
「あ～、そいつは俺の……従妹（いとこ）みたいなモンだ」
レイと呼ばれた女性に変わって、有無が答える。その回答に、麗一たち3人は驚愕に目を見開いた。
「ま、まさか……有無にこんな美人な従妹さんがいたとはね～……」
「本当、びっくりですぅ……」
恋歌と瑠璃は、お互い目を合わせて頷きあう。麗一は、レイと呼ばれた女性に質問した。
「そ、その……失礼かとは思いますが、お名前を……」

「……ああ、そう言えば、まだ名乗っていなかったな。これは失礼をした」
「いえ、失礼なんて……」
僕の方が失礼ですよ……。麗一は胸中で呟いた。
女性は麗一の返答を待たずしてやうやうしく頭を下げると、一呼吸置いてから口を開いた。
「私の名は、七篠零無（ななしのれいむ）だ。レイ、と呼んでもらっても構わない」
「はあ、零無さん、ですね。改めて宜しくお願いします」
ぎこちない笑みを浮かべて再び握手を求めた麗一を見て、零無は苦笑を浮かべながらこう言った。
「御咲君……いや、麗一。私たちはもう友達だ。そんな堅苦しい事はしないでいい」
「あ、そうですか……」
「だが」
短く言った零無は、流れるような動作で麗一の下げかけた手を掴む。そして、口を開いた。
「……そう言った誠実なトコは、私は大好きだ」
「……え？……な……」
不意に発せられた「好きだ」という言葉に、不覚にも顔を朱く染めてしまった麗一。それが、限りなく愚かしい行為だった事に、麗一は気付いていなかった。
「うう、御咲くぅん……」
「え？あれ？式園さん？どうしたの……」
ふるふる、と目に涙を溜めている瑠璃に、麗一が近寄ろうとした途端、がっ、と肩を掴まれた。掴んだ人物は、勿論恋歌だ。
「……麗一ィ……」
どす黒い空気を纏った恋歌が、まるで万力のような力で麗一の肩を掴む。
今にもねじ取れそうだ……。麗一は冗談抜きでそう思った。
「え、ちょ、恋歌、さん？ねえ、まずは落ち着いて……」

「…………ふ」
「え？」
「ふざけないでよぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」
恋歌の咆哮と共に、麗一の肩が極められた。痛みの余りなにも言えない麗一。
その2、3秒後、ゴキリ、となにかが外れたような鈍い音が聞こえた気がした。
「いぇぁああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」
初夏の空に、絶叫が響き渡る。
麗一が気絶する寸前、「ユウの言った通り、鈍感の陶片朴だな……」という、零無の呆れかえったような声が聞こえた気がした。

麗一は、意識を取り戻した途端、アナウンスの劈くような音声が鼓膜を震わせるのを感じた。
体中が痛い。そう感じつつ麗一は身を起こす。
……攻撃されたのは肩だけの筈なのに、どうして体中が痛いのだろうか？
麗一は何をされたのか分からない身体を、異常は無いか確認する。
「お、麗一、生き返ったか」
その最中に、有無が話しかけて来た。
「あ、うん。辛うじてね……それで、ボウリング、するんでしょ？」
「おう」
麗一の問いかけに、有無は頷いた。そして、こう続ける。
「なんたって、大会だぜ？大会。景品が懸かってるかんな。たった今、生死の境を彷徨って来た麗一クンには酷かもしれんが、死ぬ気でやるぜぇ？」
……は？
麗一は己の耳を疑った。

「……え？ちょっと待って、大会なんてやってるの？」
「おうよ。それでよ、その優勝チームの景品が、なんとなんと、スキー旅行券が人数分配られるらしいんだ。……クウゥッ！！血が騒ぐぜぇえええええ！！」
「有無、うるさいわよ！迷惑でしょ！」
そこに、どこかに行っていたのか通路から顔を出した恋歌が注意する。その隣には瑠璃もいた。
瑠璃は、麗一を見て、はっと目を見開いたかと思うと、ささっ、と駆け寄って来た。
「……み、御咲君、起きられましたか」
「うん……おかげさまでね。全く、誰がやったんだか……」
「はいはい。悪かったですゥ～っと」
恋歌はさほど気にした様子も無く、麗一にビラのような物を渡した。
「ハイ、今から出る大会のルール。麗一、気になるだろうから渡しておくわね」
「あ……うん。一応目を通しておくよ」
そう言って、麗一は受け取った紙に目を通した。その数秒後、バッと顔を上げる。
「……あのさ、有無」
「おん？なんだ？」
「……この大会さ、1チーム5人だよね？」
そう言って、麗一は再び用紙を確認する。うん。間違いない。ここにちゃんと『1チーム5人』と記載されてある。
「ああ。そだけど？」
さも当たり前、といった様子で、有無は答えた。
麗一は、面子を確認する。自分と、有無。そして、恋歌と、式園さん。
……。
4人、だよね……？

「あ、あのさ、有無――――――」
「ユウ、登録してきたぞ」
「おう、レイ。サンキュ」
「なっ……別に、ありがたまれるような事をしたわけでは無くて……どうした麗一？何をボケっとしている？」
零無が麗一を見据える。
あ、そうか……。零無さんがいたのか。
麗一は失念していた事を恥じた。
「あ、いや、何でもないんです」
「？……ならいいが……」
そう答えるも、零無は少し訝しげな表情で首を傾げる。が、思い直しでもしたのか微笑を浮かべた。
「レイムちゃ～ん、有無～、麗一～！そろそろ始まるからこっち来なさーい！」
そこに、恋歌の大きな声が響く。
「了～解っ。さ、行こーぜ」
「うん。零無さん、行きましょう」
「ああ」
そう言いつつ、3人は駆け足で恋歌の元へと急ぐ。
「すまないな恋歌。2人をついでに呼んで来ようと思ったのだが……」
「ううん。気にしないでいいよレイムちゃん」
なんだか、恋歌と零無さん、急に仲良くなっているような気が……？
まあ、仲が険悪よりはマシか。麗一は心の中でそう解釈し、口に出そうになった疑問を飲み込んだ。
その時、ピーッという音が鳴り響く。
「あ、アナウンスっぽいよ」
恋歌がぼそりと言った。

『ladies（レディース） and（アンド） gentlemen（ジェントルメン）！！』

アナウンスの音声が響き渡る。かなり流暢な英語だ。

『いよいよやって参りました！ボウリング大会でーっす！！今年もかなりの人数が参加していて、嬉しい限りです！さぁて、前座はここまでとしまして、本題に入りましょう！ルールは至ってシンプル！それぞれのチームの全員のスコアを合計した中で、一番スコアの高いチームが優勝となります！見事ハイスコア賞に輝いたチームには、今年の冬を楽しく過ごす、豪華スキー旅行券を御用意しております！それでは、皆さんの健闘を期待します！頑張って下さい！』

長々としたアナウンスは終わり、ついにボウリング大会が始まった。

4

一言で言い表すならば、ボウリング大会は無法地帯だった。

有無は馬鹿の一つ覚えのようにスペアを連発。

恋歌は剛速球を放ち、ピンを砕くかのような音が会場に鳴り響いた。

そして特筆すべきは、零無だった。

なんと、全てストライクで終わらせたのだ。

神がかったボールさばきで、ピンを完封せしめた彼女は、こう言ってのけた。

『この程度、爆弾を放り投げるのに比べれば簡単な事だ』

これを言った後、零無は有無に羽交い絞めにされていた。麗一らは巻き添えを食いたくなかったので、ただ茫然とそれを見ていたのだ。

ここまでをまとめると――――

――――まともな投球を見せたのは、麗一と瑠璃だけだった。
そして結局――――

『当ボウリング大会優勝チームは……七篠君達のチームです！おめでとう！』

大会は優勝してしまった。
貰ったスキー旅行券、どうしようか……。
拍手喝采を浴びながら、そんな中で麗一は無粋とも言える事を考えていた。
「どーした、麗一ィ、しけた面して」
「あ……いや、ちょっと……」
「なぁに、『おめでとう』って言われてんだから、『ありがとう』で返してやれよ」
「あ……うん」
「おいおい……まさかお前「こんな時、どんな顔すりゃいいんだ」とか思ってんじゃねぇだろうなぁ？笑えばいいんだよ、笑えば」
「は、はあ……」
表彰台のような物から降りつつ、有無とこんな事を話した。そこに、女性メンバーもやって来る。
「ははは……緊張したなぁ……」
珍しく消え入りそうな声でそう言う恋歌。
「うむ……私もああいったラフな感じの表彰経験は初めてだったからな。些か妙な緊張をしてしまった」
「ふうぅ……恥ずかしかった、ですぅ……」
零無と瑠璃も頬を紅潮させながらそれに同意した。
3人もそれぞれ思う事があるらしい。
解放された麗一たち一行は、ボウリング場を後にした。
「さて、と……」

手の内で戦利品であるスキー旅行券を弄んでいた麗一は、有無が不意に発した一言で足を止めた。
「どうしたの？」
恋歌が尋ねる。
「……腹減らね？」
「あ、そうかも……」
時刻はもう昼近い。あの大会もかなり時間をかけてやったものだから、解放されたのは１１時半を回った頃だった。
「ん？どこか定食屋にでも行くのか？」
「レイムちゃん、定食屋は無いよ……」
零無の発言に恋歌がツッコミを入れる。
「あ～……」
喉を鳴らすように声を出して、一呼吸置いて有無は言った。
「……俺んち来る？」
「どうしてそうなったのさ！？」
麗一が、自分は否定的だ。とばかりにツッコミを入れる。
だが、その他の反応は麗一の虚を突くものだった。
「有無の家って初めてかも！行きたい行きたい！！」
はしゃいでそう言う恋歌。
「私は別に構いません」
にこやかにそう告げる瑠璃。
「ユウの家に、行くのか？……か、構わないのだが、心の、準備が……」
消え入るようにそう呟いた零無。
「賛成多数のようなので、レッツゴー、じゃね？」
トドメとばかりに言い放った有無の一言で、麗一は溜息を吐き出した。
「……皆が良いのなら、それでいいよ……」
戦意喪失、とばかりに俯く麗一だった。
「は～い、ココが俺んちでーす」

ほぼ抑揚の感じない声で、有無は気怠そうに紹介する。ポツンとした一軒家がそこにあった。
「狭(せま)ぇけど、入って入って」
そう言って、有無は自宅に麗一たちを招き入れた。
素っ気ないが、手入れは行き届いている方だ。麗一は意外に思った。
「おお……案外キレイ」
恋歌が麗一の気持ちを代弁したかのように呟いた。
「いや、だって俺、一人暮らしだし。自分でやらなきゃいけないかんな」
有無がそれとなく返したその一言に、麗一、恋歌、瑠璃の3人は驚きを隠せなかった。
「「「ウソぉ！！」」」
「いや、本当だ」
その叫びに返したのは、有無では無く零無だった。
「私は事情を知っているが……一族の取り決めだ。詮索はご遠慮願いたい」
その声はやんわりとしていたが、有無(うむ)を言わさぬ力のようなものがあった。麗一たち3人組は黙って頷いた。
その3人を尻目に、有無と零無は2人でぼそぼそと話し合い始めた。
「一族の取り決めねぇ……お前にしては上出来なんじゃないか？その切り替えし」
「なっ……何を言うか！あながち間違ってはいない筈だ！」
「あぁ……うん、まあ、そうだな……あ、お前らは中入っててていいぞ」
「あ、うん」
麗一たちは言われるがままリビングへ入って行った。
「またも素っ気ない……」
恋歌が呟く。

確かにリビングにしては素っ気なかった。むき出しの床に卓袱台のようなテーブルが置いてあり、壁際にはテレビと冷蔵庫が置いてあった。
「……そらそら、座った座った」
扉が開き、入って来た有無が開口一番に、手をひらつかせながらそう言い放った。
「はいはい、座りますよっ。ルリちゃん、座ろ」
「あ、はい」
「ほら零無、座れって」
「う、うむ……」
４人が席に着いた。
「じゃあ僕も……」
続いて座ろうとした麗一だったが、有無に押し止められた。
「麗一、お前はまだダメ」
「え！？」
何故（なにゆえ）！？そう言おうとした麗一を遮って、有無が言い放つ。・
「おいおいおい麗一クゥン……昼飯で俺んち来いって言った理由……まだ解からねえのか？」
「え？いや……」
「……麗一、頼むぜ」
ポン、と手を置かれる。
そこで、麗一はやっと座れない理由が解かった。
「まさか……僕に食事を作らせようとしてる！？」
「ビンゴ！」
「有無ねぇ……」
……呆れた奴だ。
今になっていちいち言える事でもないが、つくづくそう思った。
「はあ……」
有無宅のテーブルに突っ伏していた麗一は顔を上げた。

昼食を食べ、有無の部屋のゲーム類で遊び始めたまでは良かったのだ。

――――――いったい、どうしてこうなったんだろうね。

麗一は頭に手を当てた。若干頭痛がする。

「あはははははぁ！御咲君がいるゥ～！」

そこに、顔を真っ赤にした瑠璃が高笑いと共に麗一に抱き付く。

「……」

「むぅ～？無反応？つまんにゃい～！」

麗一は明らかに様子がおかしい瑠璃に、あえて反応しなかった。若干頭痛が酷くなったような感覚に陥りつつも、周りを見渡す。

有無は顔が真っ赤になった零無に乗っかられてじゃれあっていて（零無が一方的にじゃれているのだが）、恋歌は顔を真っ赤に染めて静かに寝息を立てていた。

麗一はもう一度、根本的な疑問を浮かべた。

どうしてこうなった、と。

それは、結局、押しに負けて麗一が作った昼食を食べ終えてしばらく経った頃だった。

有無の部屋へ行き、皆でゲームの２Ｐモードをやり始めたのだ。

それは巷で話題になっている人気ゲームで、操作もしやすく、ルールも『敵を倒して得点を稼ぐ』という分かりやすい物なので、当然の如く皆はそれに没頭し、それぞれがコントローラーを奪い合いつつ、楽しく遊んでいた。

白熱し、皆も喉が渇いてきた所に、有無が下から飲み物を持ってきたのだ。「葡萄のジュースだ」と一言添えて。

それを皆で飲んで、またゲームをやろうか、といった所で、麗一を除く皆の言動や行動が異常をきたし始めたのだ。麗一はハッとしてグラスの臭いを嗅ぐも遅かった。そこからは、阿鼻叫喚とも言える戯れの始まりだった。

そして現在の状態になってしまったのだ。
案の定、有無の持ってきたものはワインだった。しかもそれはかなりキツイ事で有名な代物であったのだ。
麗一もおかしいとは思ってはいたのだ。ただのブドウジュースにしてはキツ過ぎるし、飲んだ後に身体が火照るような感じになってしまうのも、頭がとろんとしてきてしまうのもおかしいと。そして、それを飲んだ直後に起こった皆の行動の異変。それは酒がまわり酔っぱらったせいとみて間違いは無いだろう。
「み～さ～き～く～ん～！なんかしようよ～！」
そこで聞こえてきた瑠璃の声で、麗一は構想を止める。
「え、えーっとですね……」
そう答えつつ、麗一はどうしたものかと頭をまわす。
こういうのは、なるべく相手にしない方が良いだろう。麗一はそう思い、そっぽを向いた。
「うぇえええええ……無視しないでよぉおおおおお……」
「え、ちょっ……」
その対応に、涙声を発して縮こまってしまった瑠璃に、麗一は泣いてしまったのかと思い手を伸ばす。
刹那、瑠璃はにかっとした笑顔で顔を上げて、言う。
「ひっかかったなぁ？にししっ」
悪戯が成功した時の子供と大差ない、無邪気な笑顔を浮かべる瑠璃。
それを見て、麗一は当惑した。
……式園さんって、こんな笑顔もできるのか。
麗一は、彼女と出会って1年ほどになるが、瑠璃のこんな笑顔を見たのは初めてだった。
酒が入って、幼少の頃の素に戻ったのだろうか？麗一は直感でそんな事を思った。
瑠璃の生家である式園家が、この地方有数の名家だという事は、麗一とて知っている。

実際に1年の頃、同じクラスになった時は「名家のお嬢様だから」などといった偏見にも似たような理由があって、話しかける者はおろか、近寄る人もいなかった。その瑠璃の周りの席に座っている人たちですら、休みの時間になるとそそくさとどこかへ行ってしまうといった様子だったのだ。

それでも話しかようとトライする物好きな人間も何人かいたのだが。

その物好きの中にカテゴライズされる人間に含まれていて、1年の頃のクラスで、唯一毎日瑠璃に話しかけていたと言っても過言ではない麗一でも、その瑠璃の時折見せる笑顔は、フィルターのような物があるのが伺い知れた。

普通の時は『くすくす』という擬音をそのまま擬人化したような笑顔なのだ。恐らく、幼い頃から教え込まれたのであろう、型にピッタリとはまった、他人に差し障りの無い、模範的な笑い方――

名家に生まれる、という事は、それ相応の代償が付きまとう。例を挙げれば、『自由』『進路』『恋路』――

本来の高校生における、青春と呼ぶに相応しい物がほぼ取り上げられ、代わりに与えられるのは足かせと手錠、そして、重い重い錆びついた鎖のアクセサリーを身に付けた心だけだ。

大変なのだなあ……。麗一の頭の片隅の、どこか冷静な部分が告げたその感想に、麗一は感慨深い事を思った。

――って、長々と考えてしまったけど、最後あたりはほぼ関係の無い所じゃないか！？

まるでドラマのあらすじじゃないか。というか、最後らへんはもろにポエムだ。

なにかの課題で作文が出るとして、それを提出し返される度に、教師から決まって一言「お前、詩人か小説家になったらどうだ？」と言われ続けた麗一だったが、その時の教師の気持ちが、今分かったような気がした。

そんな麗一の胸中など露知らず、瑠璃が口を開く。
「どーしたのぉ？ミサキーヌぅ」
「いや、何でもないよ……って、何さ「みさきーぬ」って」
「御咲君の事らよぉ？」
「上手い事を言ったつもり！？」
苦笑を隠し得ない麗一に、瑠璃はまたも笑みを浮かべる。
当然、またも麗一は当惑し――――――
そんな様子で、1日は流れて行った。

そして、午後6時頃――――――
「……悪いな、麗一」
酔いから醒めた様子の有無が、麗一に詫びる。その隣には、未だ泥酔している様子の零無がピッタリとくっついていた。これもある意味、瑠璃と同じく酒癖が悪いと言えよう。
「いいよ、僕も皆みたいに酔えていたら、こんな気苦労はしなかったろうからね……」
そう言う麗一も、未だに寝かけている恋歌と、べろべろに酔っている瑠璃を両肩に抱えている状態である。
結局、この面子の中で酒に強いのは麗一だけだった。
この状態を他のクラスメイトに未だ見られていないのは不幸中の幸いだった。次週の学校であられもない噂が飛び交うよりは、今気苦労する方が何倍もマシに決まっている。
「……んじゃ、次の学校でな。麗一」
「うん、じゃあね」
そう別れを告げて、有無は零無を抱えて、自宅へと引き返していった。
麗一は、色々と聞きたい事（主にワインの出所など）を聞きたかったのだが、敢えてそれを聞かなかった。あの有無の事だし、適当にはぐらかされるに決まっている。そう思ったからだ。
「……さて」

今はこの2人をどうにかして送らなければ。
麗一の頭の中にあるたった1つの思考だ。
酒が回った状態で1人で帰らせるなど、自殺行為にも等しい。帰りの道で何かあったら、どう落とし前を付けてくれようか。恋歌は行き着く先は僕と同じだから、まず最初に式園さんを送ろう。
結論に達した麗一は、瑠璃に問う。
「……式園さん」
「ん？な～に～？」
「あの……家どこですか？」
「んにゃ……？」
話が通じているのだろうか。麗一は小首を傾げた。
「……送ってくれるの？」
瑠璃が問う。
「あ……うん。そうだけど……」
麗一が短く返すと、瑠璃はさも嬉しそうな表情をして、口を開ける。
「……ありがとう。嬉しい」
ワインのせいなのかどうかは分からないが、頬を紅潮させながらそう告げた瑠璃に、麗一はドキッとしてしまう。
いつぞやのカノンの時みたいだな――――――
麗一は、ぱっと頭に浮かんだ感想を、刹那に取り消した。
流石にあそこまで酷い妄想はしていなかったが、思い出すだけで羞恥にも似た感情のせいで頬が熱くなってしまう。そこを誤解されるのはまずい。
「……御咲君？」
瑠璃が首を傾けながら聞いた。
「え？あ、いや、何でもないよ。……えっと、道、分かる？」
「……駅まで行けば、分かるよ」
「そ、そっか。じゃあ、行こう」
麗一が、傍らにいる恋歌を軽く抱いて支えつつ、瑠璃の手を引く。

瑠璃は引かれるがままに歩き出した。
麗一は気付いていなかった。
その自身の手に、彼女の心まで惹かれてしまっていた事に――

――

「えっと……」
目の前の巨大な青の建物に、麗一は若干怯む。
「ここが……式園さんのお家？」
おとぎ話から抜け出してきたかのような大きな屋敷を、まさか間違えてなどいないだろうかと瑠璃に念を押す。
「うん。私の家～」
「そ、そっか……」
やっぱりお金持ちなんだな……。
事も無げに告げる瑠璃を見て、麗一は溜息を吐くしかなかった。
「御咲君、いんたーほ……」
インターホン、と言おうとしたのだろうか。台詞を言い終える前に、瑠璃の身体が、ぐらり、と倒れかけた。麗一は、それをとっさに支える。
「はにゃ……」
心底眠そうな顔で、これまた眠そうな声を上げる瑠璃。
どうやら、酒の影響で睡眠が促進されているだけのようだ。麗一はホッとする。
「……いんたーほん、押して」
その瑠璃が、麗一に告げる。麗一は「分かった」と言って、その通りに動いた。
普通の物よりかは2回りほど大きいインターホンのボタンに指をのせ、圧をかける。指を離すと、ピンポーン、と小気味の良い電子音が聞こえた。
しばらくして、ぱたぱたの廊下を走る音と共に、スピーカーから声が聞こえた。

『はい。どちら様でしょうか？』
女性の声だ。麗一は礼儀正しく返答する。
「あの、私、御咲麗一と申します。実は今日、式園さんと……」
『ああ、御咲君ね！』
声を遮られた。どうやらインターホンに出ている相手は、麗一の事を知っているようだ。
『いいわいいわ、門を開けるから、入って入って』
その音声を伝えた後、インターホンは沈黙する。
直後、がらがらと派手な音を響かせて、屋敷の前の門が開き始めた。
「……うええ！？何！？何の音！？」
その音でびっくりしたのか、恋歌が目を覚ましたようだ。
「あ、起きた」
「何よ、今の音！？」
「あ～……それより恋歌」
「何？」
麗一は、今から瑠璃を送らねばならない。そこに必要以上の人間はいない方が良いと判断した麗一は、恋歌にこう告げた。
「悪いんだけど、ちょっとここで待っていてくれないかな？今、瑠璃さんを家まで運んで行こうと思ってて」
「へ？家……って、何コレぇ！？」
瑠璃が屋敷の存在に気付いたらしく、大きな声を上げる。無理も無いだろう。麗一とて驚きを隠しきれなかったのだから。
「……わ、分かった、待ってる」
「ありがとう。お願いするよ」
麗一はそう告げると、瑠璃の手を引いて屋敷の中へと入って行った。
業者でも雇っているのだろうか。ものの見事に手入れされた鉢植えがそこいらに飾られている。その鉢植えに飾られた道を、麗一は瑠璃を抱えて歩く。

「……凄いな」
麗一が呟く。それ以外の言葉が見つからない。
気が付けば、門の奥の家のドアまで来ていた。麗一は意を決して、ドアの近くのインターホンを押した。
『は～い、どうぞ～。開いてますよ～』
インターホン越しに許可が出た。家の中はどうなっているのだろう。ささやかな期待感に包まれつつ、麗一は扉を開いた。
扉の先には、大きな玄関があった。当たり前だが、自宅の物とは比べ物にもならない。
その前、玄関の段差の1つ上の位置に、女性が立っていた。その傍らには、おそらく小学生であろう少女の姿もある。
その少女の肩に手を置いている女性が、にこりと微笑んで、口を開けた。
「ようこそ、御咲君」
「よーこそです！」
女性の一言に合わせて、その小さい娘ももてなしの言葉を口にする。麗一は取り敢えず頭を下げた。
「ふふっ、礼儀正しいのね。瑠璃の言うとおりだわ」
「は、はあ」
「ふふっ」
麗一の生返事にも、女性はにこりと笑みを湛える。笑顔の絶えない人だ。麗一はその女性に対してそう思った。
「紹介が遅れたわね。私は瑠璃の母親の、式園葵（しきぞのあおい）よ。そしてこの子は、瑠璃の妹の藍（アイ）」
「おにーさん、よろしくね！」
笑顔で挨拶する藍。まるで『天真爛漫』を擬人化したような娘だ。
麗一ははにかんでみせた後、瑠璃に小声で一言告げる。
「……へえ、式園さん、妹がいたんだ」
「……ん。言ってにゃかった？」
「いや、初耳だよ」

「……そう」
彼女の眠気もピークのようだ。
「あらあら、瑠璃、しっかりなさい」
「ほにゃ……」
「おねえちゃん？」
「……んん」
家族が問いかけるも、ボーっとした様子だ。
「御咲君、瑠璃どうしたの？」
葵が問いかける。麗一は、こうなった原因を説明しだした。

「……ああ、それは仕方ないわね」
酒が入った経緯と、酔ってどうなったかを説明された葵は、開口一番にこう言った。
「そういうものなんですかね……」
「いやいや、この子、お酒弱いのよ。結構前にね、飲めるか試したんだけど、ご存じの通りの有り様になってね、ダメだこりゃ、ってなったの」
母親が言うのなら間違いは無いのだろう。麗一は苦笑しつつ「自分もそう思います」と同意しておいた。その直後、葵は身を乗り出し、こう告げた。
「……とまあ、立ち話もなんだし、中入る？」
「おいしーおかしがあるよー！」
2人から入室を進められた麗一だが、申し訳なさそうにそれをやんわりと断った。
「あら、どうして？」
「いや、気の問題でなく、外に人を待たせているんですよ」
麗一は親指を立てて玄関を指す。そう言うと、葵は肩を竦めた。
「あら、そうなんだ……それじゃ仕方ないわね……ところで」
葵はそこまで言うと、すっと目を細める。そして、こう言った。
「……その待たせてる人って、女の子かしら？」

「あ、はい。そうです、けど……」
「……やっぱり」
「？」
やっぱり、とは、どういう事なのだろうか。麗一は不思議に思った。
「いや、何でもないわ。忘れて頂戴」
「は、はい……」
「……さて、女の子を待たせる男の子は嫌われるわよ？瑠璃は私が運んでおくから、早く行ってあげなさい」
「あ、はい。分かりました。それではお言葉に甘えさせて頂きます。……さようなら」
そう告げた後、踵を返して去って行こうとした麗一だったが。
「……御咲君」
微かに呼び止める声が聞こえた。麗一は振り返る。
呼び止めたのは、瑠璃だった。酔いが醒め始めたのか口調は元に戻ったが、未だ眠そうだ。
「あの……お願いがあるんです、けど……」
「なにかな？」
「その……」
少し間を置いて、瑠璃は静かに告げた。
「……私の事、今度から『瑠璃』と呼んでくださいませんか？」
「え？」
「わ、私も……御咲君の事を、『麗一君』と呼ぼうと思います。……勿論、御咲君さえ良ければの話ですが……」
いきなりどうしたのだろうか。家族も興味津々といった様子だった。
そう思う麗一だったが、呼び名を気にする程麗一はシャイな人間では無い。特に断る理由も無いので、麗一は了承する事にした。
「……別に良いよ。僕は呼び名なんて気にしないしね」
「……そうですか」

「うん。瑠璃さん」
「さん、は要らないです……麗一、君……」
「そっか。わかったよ、瑠璃。……じゃあ」
「……はい……また……学校、で……」
そう告げて、瑠璃は寝てしまった。心なしか表情が綻んでいるようにも見えた。
「おやおや、お熱い事で」
それとなく、瑠璃の寝ている表情を見ていた麗一に、葵が冗談とも取れぬ発言をする。
麗一は、ぱっと顔を上げるとそれを否定した。
「いやいやいや！違いますって！」
「ま、そう反応するのは解ってたわよ。外にいる娘と二股になっちゃうもんね～」
「いやいやいやいや！」
麗一はかぶりを振って否定した。
よりにもよって、こんな事を言ってからかわれるなんて心外だ。
――――カノンの事を知られていないで良かった。
もし知られていたら、三股（みつまた）だの何だので今以上にからかわれただろう。麗一は安堵感を覚えた。
これ以上ここにいたら何を言われるか分かった物では無い。麗一は話を丁度良い所で切り上げ、家を出た。
瑠璃とその母は、性格は似ていないんだな。麗一は思った。
あの瑠璃の妹――――確か、藍と言ったっけ。あの子の性格はお母さんになのだろうな。という事は、瑠璃の性格は父親譲りなのかもしれない。瑠璃の父って、どのような人なんだろう。麗一は疑問に思った。
まあ、今度瑠璃に聞いてみよう。麗一は構想を終了して、恋歌の元へと向かう。
多分「遅い」とか言われるんだろうな……。
麗一の気苦労はまだまだ続く。

「……お疲れ様」
返ってきた後、疲れ切った状態で夕食（恒例の唐揚げ定食）を作り、後片付けが終わった後自宅に戻った麗一へ、カノンが労いの言葉をかけた。
「……うん。疲れたよ……」
力無く、麗一は答える。
「……楽しかったですか？」
そんな麗一に、カノンはおずおずとそう言う。麗一は、疲れたような佇まいを正して、口を開いた。
「うん。気は晴れた……と思う。……というか」
「？」
「……アヴソリュートの事を有無に話した時から、大体気は晴れていたんだけどね」
「……そうですか」
苦笑しつつそう告げた麗一に、カノンも口端を吊り上げた。
今度からは学校でも普通に過ごせそうだな。麗一は、1人安堵に浸りながら明日を思った。

今朝も教室は騒がしい。
麗一が静か過ぎるだけかもしれないが、いまさら言う事では無いような事だ。
少なくとも、口に出せば「当たり前だろ」と言いのけられるのは明白であった。
などという、ごくごく当たり前の事を思いつつ、麗一は教室の机に突っ伏していた。
今日もなかなかハードな朝だったな……。暇も合わさり、麗一は何をしたか、順を追って思い出そうとする。が、脳細胞の方にも疲労が回りそうなのでやめておいた。授業前だというのに、それはハードすぎるだと思ったからだ。

「あの……」
そこに降りかかる女声。麗一が顔を上げると、そこにはつい一昨日、ある約束を交わした女子が立っていた。
「お、おはようございます、御咲君……」
その女子とは、式園瑠璃その人だ。挨拶も、いつもと変わらない物だった。
だが、約束をした後では、その挨拶は条件を満たさぬ物だった。麗一は小首を傾げ、口を開く。
「あれ？瑠璃、約束忘れたの」
「ほ、ほえ！？」
瑠璃は、何に対して驚いたのか、顔を赤く染めて2歩後ずさる。どうしたのだろう。麗一には理解できなかった。
「……瑠璃、だからあの約束だよ。瑠璃が言ったんじゃないか。今度から御咲君じゃなくて麗一君と呼ぶから、僕からは瑠璃って呼んでくれって」
「へ？あ、ああ、そうでした……っけ？」
まさか、覚えていないのだろうか。
……まあ、酒が入っていたのだから無理も無いだろう。麗一は思い直し、また言葉を紡ぐ。
「だから、さ、瑠璃。挨拶やり直してみて」
「は、はい……おはようございます……れ、麗一、君……」
恥ずかしそうに瑠璃が呟いたその言葉は、しっかりと麗一の耳に届いた。麗一はこくりと頷いて見せる。
「今度からそう言ってくれるといいな」
「は、はい。注意します……ところで」
「なに？」
麗一が聞き返すと、瑠璃は制服のスカートをもじもじと弄びながら、こう続けた。
「……も、もう一度だけ、私の名前を呼んでみてくれませんか……？」

「うん。いいけど……」
こんな事をして、何になるのだろうか。麗一は全く意味も分からず、瑠璃の耳元へ顔を近づけて、小さく呟いた。
「……瑠璃」
「ふぁ……ぅ……」
囁かれた瑠璃は、何とも言えない声を上げ滑稽な程に赤く染まった顔を俯かせる。
これはこれで、額縁に入れたいほど絵になっていた。
「ほぉ～……おヌシら、いつの間に名前で呼び合うようになったのじゃ？」
「「うわぁ！！」」
そこに現れた有無が、まるでタイミングを計ったかのように入ってくる。
いや、有無の事だ、実際計っていたのだろう。麗一は悪い意味で有無を見直した。
というか、言葉づかいがおかしい気が……。
「あ、いや、時代劇久々に見たからさ」
「あ、そう……」
麗一たちのした約束よりも、かなりくだらない理由であった。が、有無はそれを指摘しただけで引き下がるような男ではない。
「んで？何で何で何で～？」
「ああ、いや、あのね」
麗一は弁解しようとする。しかし、周りはそれよりも早く仮説を展開して講義に入ってしまう。

『おい、さっきよ、麗一と式園さんが名前で呼び合ってたぞ』
『マジ！？って事は、麗一は瑠璃に気がある、って事なのか？』
『分からんけど……あいつテラ陶片朴だからなぁ……もし問い詰める事ができても「特に理由は無いよ」とか言いそうじゃん』
『いやでも、あの麗一でも、急に呼び名を変えるってトコで、何か

あったと踏んで間違いは無いでしょ』
『何があったんだろうねぇ……』
『あいつらの事だからやらしい事じゃないとは思うけどな』
『いや分からんぞ？麗一は表は優しいけど裏はどうだか……』

「……あっちの方が詳しい事知ってそうだな」
「待って有無！違う！皆の言っている事は全部誤解だから！」
がっしと有無の腕を掴む麗一。
その直後、麗一はもう片方の腕を掴まれた。
瑠璃か、と思いその方を向くが、瑠璃は両手を頬に当ててあたふたとしている。では一体誰の――――
「麗一ィ……どういう事かしらぁ……？」
誰の物か、は直ぐに分かった。この突き刺すような声は間違いなく恋歌だ。だけど、その声には、微細ながら怒気を押し殺したような物があった。
「さっき小耳に挟んだんだけど、ルリちゃんと何かあったらしいじゃない……説明してもらえないかしら？」
恋歌の顔には、凍り付いた笑みが浮かんでいた。正直言って、かなり怖い。
「ああ、えっと、あの……」
瑠璃の援護射撃は期待できそうにもない。麗一は混雑している頭で、どう説明しようか組み立て始めたが――――どうやら遅かったようだ。
「……説明しなさいって言ってるでしょうがぁあああああ！！」
「なんでこうなるのぉおおおおお！！」
見事なアームロックがかけられる。左腕に激痛が走る麗一。利き腕でない分、抵抗するための力が入りづらいため、なかなか抜け出せない。
「痛い！痛いよぉ！！」
「恋歌ァ！それ以上いけない！」

有無が明後日のフォローを入れる。いやそうじゃないでしょ！
「そりゃぁあああああ！！」
「いぇぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」
絶叫が響き渡る、朝日の入った教室。
麗一の受難な日常は、まだ始まったばかりであった。

the prism #2（後書き）

どうも、七篠名無です。
まずは時間を割いてこの小説を閲覧して下さった事に、お礼申し上げたいと思います。
まずは謝罪を。
「なぜロボットが出ないのか？」「ジャンルにそう書いてあるのに？」「ネタ切れ？」「カノンたんカワユスハアハア」ｅｃｔ…
……真にそうだと思います。すみませんでした。
それと……「次話投稿はやくね？」と思った方々には弁解を。
実は、１話を書いて２話を半ばあたりまで書いたところでこのサイトの存在を知ったのです。そして、友人にチラと見せていただけのこの小説も「どうせなら世界中の方々に見せた方が良いのでは？」と思い　１話上下の投稿に踏み切ったわけでありました。
そして、間髪入れずにこの#2を製作し、この驚異的な日数で次話投稿へ至ったワケであります。
そしてこの#2、かなりハブられているのが分かりますでしょう。
それについては、自身の文章構成力の足りないおかげであります。
本当に申し訳ありません。
実は、製作の段階で、４８０００文字程になってしまったので、泣く泣く省いた箇所がありました。
例えば大会の内容とか、例えばカノンちゃんとのゴニョゴニョとか
……
……まあ、何はともあれ、許していただければ幸いです。
それでは、また#3でお会いしましょう。

ｂｙ　七篠名無

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6892y/

---

the prism

2011年11月29日21時51分発行